

CEL

Culture, Energy and Life

Vol.

103

March 2013

特集

スポーツが持つ“多様な魅力”が QOL(生活の質)を豊かにする

「半歩先の生活情報」

〈エネルギー・環境編〉

■「豊かな海」を取り戻す－日本の漁業の再生に向けて

〈都市・コミュニティ編〉

■都市生活者のための防災・減災－ふだんの備えをデザインする

〈住まい・生活編〉

■単身者、これからの住まい方

連載

エネルギー講座「暮らしとエネルギー」

第4講 住まいとエネルギー

第5講 賢く住む家(スマートハウス)

「社会的蓄え」たつぷりの黄金の国ジパング

柳沢 有紀夫

オーストラリア人の旅行先として日本はとても人気がある。訪問した人のほとんどが古都の佇まいや商都のにぎわいなどとともに感心するのが、数々のハイテク技術。たとえば「トイレからお湯が出てお尻を洗ってくれる」とか「自動販売機やATMが音声でお礼を言う」とか。ただ、「センサーで人を感じ知して自動的に上がる便座の蓋」に関しては、「心霊現象かと思って、パンツを脱ぐ前に漏らしそうになった」という声もよく聞かれる。

「電車が5分とか10分に一度来る」も驚きの種だ。私が住むブリスベンは衛星都市も合わせた人口が約200万人のオーストラリア第3の都市。わが家は街の中心地点から直線距離で8キロしか離れていないが、それでもラッシュ

アワーを過ぎると電車は30分に1本となる。さらに郊外に行くと、1時間に1本となる。「新幹線に乗る」ことを旅の目的のひとつにしている人も多いが、「速さは知っていたけど、あんなに立て続けに来るとは思っていなかった」という声も頻繁に聞く。国土が広いせいもあるが、オーストラリアで長距離列車というと、1日2本とか週に2本という、実用性よりも観光を目的としたものがほとんどだからだ。

一般家庭に泊まった経験のある人は、「シャワーのお湯は出し放題」というのにも驚く。というのは、ブリスベンのほとんどの家では家族が入れ代わり立ち代わりで20分も立て続けにシャワーを浴びると、水しか出なくなるからだ。都市ガスが来ている家庭はほとんどなく、電力

で沸かしたお湯をタンクに貯めるのだが、その容量が限られているのだ。

もうひとつインフラの話題を書くとき、ブリスベンの中心地から車で40〜50分走ると、上水道がない地域も多い。屋根に降った雨水を巨大なタンクに貯めてろ過して使用。雨不足で残量がわずかになると、タンクローリー車のようなものに来てもらい、水を買うのだ。まるで吉幾三さんの歌『俺ら東京さ行くだ』に近い世界。またはドラマ『北の国から』の黒板家か。

こう書くと、「オーストラリアってどれだけ遅れた国だ」と思われるかもしれないが、じつは2011年の国民1人あたりのGDPはなんと6万6371米ドルで世界5位。日本の1.45倍となっている。別の見方をすると、日本の国民1人あたりのGDPは数年前と比べてガクッと順位を下げて世界17位の、4万5870米ドル。これをもって、「日本はダメだ」と悲観的になる人が多いというかほとんどだと思うが、なんのなんの。今まで例を挙げてきたように、オーストラリアなんぞがうらやむような技術やインフラといった「社会的蓄え」がたつぷりある。

今、調子を落としているが、すでに「豊かな国」、「黄金の国ジパング」なのだ。今後も努力は必要だが、必要以上にパニックを起こすことはない。日本人のいちばん反省すべきところは、なんでもかんでも反省してしまう点だ。

もちろんお金がなければ、バブル期がそうであったように「消費を愉しむ」とはできないかもしれない。でもこれからは今ある「社会的蓄え」を生かしながら、消費ではなく、「人生を愉しむ」とか「本当にやりたいことを愉しむ」時代だと思ふ。

私はもうアラフィフだというのに、アマチュアサッカーチームに属して5ヵ月ほどの間は毎週金曜日の夜に約20試合、公式戦を戦っている。チームの練習日や草サッカーを合わせると、たぶん70〜80日ほど、ボールと仲間と戯れている（歳のせいとか、足がもつれてときどき芝生とも戯れているが）。試合が終われば、「反省会」という名目で、星空の下でビールを一杯！

決して「リッチ」ではないが、豊かな時間。日本もそういった方向にシフトする素敵な時期に来た気がする。



柳沢 有紀夫（やなぎさわ ゆきお）

文筆家、「海外書き人クラブ」お世話係。オーストラリアブリスベン在住。1964年生まれ。慶応義塾大学文学部卒業。外資系広告代理店で12年間コピーライターとして勤務後、99年にオーストラリアへ移住。主な著書は、『値段から世界が見える！日本よりこんなに安い国、高い国』（朝日新聞出版）、「子育てに必要なことはすべてアニメのババに教わった」、「日本語でどつぞ」、「困った地球人」（共に中経出版）など。

巻頭エッセイ

オーストラリア発 「社会的蓄え」たっぷりの黄金の国ジパング 柳沢有紀夫

半歩先の生活情報

「エネルギー・環境編」 「豊かな海」を取り戻すー日本の漁業の再生に向けて インタビュアー 突々 淳 4

「都市・コミュニティ編」 都市生活者のための防災・減災ーふだんの備えをデザインする インタビュアー 永田宏和 8

「住まい・生活編」 単身者、これからの住まい方 インタビュアー 清水朝一 12

特集

スポーツが持つ「多様な魅力」がQOL(生活の質)を豊かにする

鼎談 スポーツの力、「感じる」ことと「伝える」こと

山本 浩 ● 朝原 宣治 ● 弘本由香里 16

スポーツ文化の視点と生活者の「からだ」 菊 幸一 23

現代のスポーツは、政治、経済、教育、社会…さらに、「人類の未来」の姿まで考えさせてくれる 玉木正之 30

「生活技術」を支えるコオーディネーション運動 荒木秀夫 34

生涯スポーツが人と地域にもたらす楽しく健康な生活 山口泰雄 38

祭的要素を持つスポーツイベントの社会・経済的效果 八木 匡 42

現代社会における女性とスポーツ 小笠原悦子 46

report

「スポーツが持つ「多様な魅力」がQOLを豊かにする」活動事例から

自分の身体の使い方を学び、「スピード」と「人間力」を培う NOBY T&F CLUB 50

バスケットボール文化を盛り上げて被災地復興と町おこし 花道プロジェクト 52

シニア世代が生涯スポーツを通じて地域のスポーツ・コミュニティを形成 神戸市シルバーカレッジ 54

本の万華鏡

「スポーツが持つ「多様な魅力」がQOLを豊かにする」を紐解くヒント 海老久美子 56

コラム「遊」 夜空を見上げようー春の星空ウォッチング 渡部潤一 57

生活者の省エネルギーに関する意識について 志波 徹 58

誤解による理解ーコミュニケーションで苦労するわけ 鈴木 隆 62

生活者の意識と行動ー第1回(夏季)調査から 三島順子 66

CELからのメッセージ
スポーツの底力をクオリティ・オブ・ソサエティの向上に活かす 木全吉彦 70

CEL SERIES

連載 エネルギー講座 「暮らしとエネルギー」 監修 下田吉之

「第4講」 住まいとエネルギー 濱 恵介 「コメント」小玉祐一郎 72

「第5講」 賢く住む家(スマートハウス) 丹羽 哲也 「コメント」田辺新一 76

食卓の喜び (AUGENSCHMAUS UND TAFELFREUDEN) Dr.Ingrid Haslinger

第15回 祝宴の食卓(16世紀初めごろ) 訳 山下満智子・宇野 佳子 82

連載 フォト・エッセイ

「耕す人々」⑦ 実践と協同がもたらすもの 太田 順一 84

TOPICS 第23回 炎と食シンポジウム講演ダイジェスト

米食と日本人、食文化研究の視野 石毛 直道 88

コラム「心」 学びに向かう志を育てる 山本 健慈 94

FROM EDITOR

半歩先の生活情報

エネルギー・環境編

「豊かな海」を取り戻す 日本の漁業の再生に向けて

インタビュー（2012年11月19日）

日本の「海」と「漁業」が危機に直面しています。漁業従事者の高齢化や輸入魚介類の増加、漁船燃料費の高騰、消費者の魚離れなど山積する問題に加え、海の環境変化で魚が獲れなくなっている状況も明らかになってきました。兵庫県漁業協同組合連合会 参事の突々淳氏に、瀬戸内海から見た海の現状と漁業再生に向けた取り組みについて聞きました。

「きれいな海」は「豊かな海」？

——瀬戸内海から見た漁業の実情をどうとらえていますか。

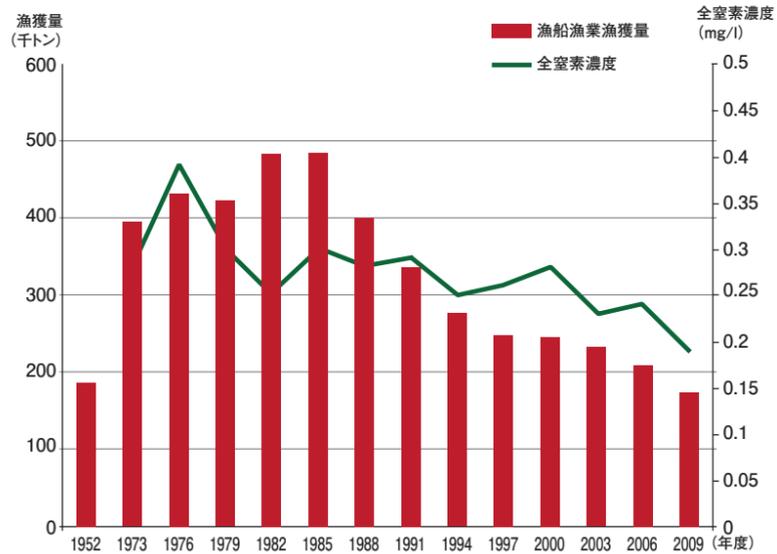
瀬戸内海は古来より豊かな海の幸に恵まれ、多様な形態の沿岸漁業が発達してきました。近年の移り変わりをみますと1970年代は、日本の高度経済成長のなか、自然海岸の埋立てや産業排水・生活排水によって、赤潮被害が問題になった時代でした。漁業者はきれいな海を取り戻そうと声を上げ、その対策として政府は1970年、水質汚濁防止法を制定、また、1973年には瀬戸内海環境保全臨時措置法を議員立法

で制定し（1978年には瀬戸内海環境保全特別措置法となる）、水質規制の強化に乗り出しました。

80年代になると、その効果もあって赤潮発生が減少する一方で、瀬戸内海の漁業生産量は上向き、1982年には漁船漁業漁獲量が48万トンを超えました。今から見るとこの頃が漁獲量のピークで、90年を前に下がり始めます（図1）。

2001年には赤潮発生の最大の原因として窒素・りんも削減の規制対象になりました。その頃に

図1 瀬戸内海の漁船漁業漁獲量



突々 淳 兵庫県漁業協同組合連合会 参事

とつとつ きよし
■プロフィール

高知大学農学部栽培漁業学科卒業。昭和59年、兵庫県漁業協同組合連合会入職後、販売部推進課長、流通加工部長などを経て平成16年に現職。漁業が将来にわたって産業として存続し、日本の食の安定と健康に寄与するために、漁場の再生、魚食の復活、資源管理型漁業の推進等をテーマに活動している。
<http://www.jf-net.ne.jp/hggyoren/>

は海水の透明度もずいぶん改善されていましたが、海の生態系を支えている栄養塩（窒素・りん）まで規制した結果、漁獲量の右肩下がり止まらず、今では最盛期の半分になってしまいました。

——水質が改善されたのに水産物が少なくなったとき、どう対応されたのですか？

当初「獲りすぎではないか」と漁業者は考えて、稚魚や二枚貝の放流などを始めました。それは90年代のことでした。しかし、状況は改善しませんでした。ノリ養殖で色落ちが頻発し、魚の餌場となる岩礁に海藻が生えない「磯焼け」も見られ始めました。それで漁業者も「海の様子がおかしいぞ」と気づき始めたのです。

皮肉にも、水質保全の規制のゆきすぎも原因の1つだったのです。元来、海の浄化は干潟や砂浜がその役割を担っています

ますが、浅場の埋立てや護岸工事、川のダムや堰が増えたことで土砂や栄養豊富な水が海に供給されなくなったり、規制基準が厳しくなるにつれて工場や浄水場の浄化技術が高度化したりして、その結果、海の栄養塩は減少し続け、広範囲な「貧栄養化」を引き起こしています。今、瀬戸内海の大部分は痩せて、漁獲量は減少し続けています。実は、ノリの色落ちや磯焼けは、海水に含まれる窒素やりんなどの「栄養塩」が不足して起こっていた現象だったので、浄化されて「きれいな海」にはなっていないのです。まさに、「水清ければ魚棲まず」です（図2）。

「自然の循環」と「豊かな海」を取り戻す

——「豊かな海」を再生するため、どのような取り組みをされていますか。

兵庫県の漁業者が、5年ほど前から実施しているのが「海底耕耘」（写真1）です。海底を専用のケタと呼ばれる機具で耕すことで、生物の住みやすい環境に改善し、海藻や魚介類の繁殖・育成を促すのが目的。すでに一部の海域では養殖ノリの色落ちがなくなるなど実際に成果も上がっています。

また、10年以上前から「漁業者の森づくり」（次頁の写真2）という活動を続けています。森に降った雨が腐葉土のある大地にしみ込み、栄養素を含んだ川の水となって海に注ぎ込む健全な物質循環を取り戻し、次代に豊



写真1 海底耕耘

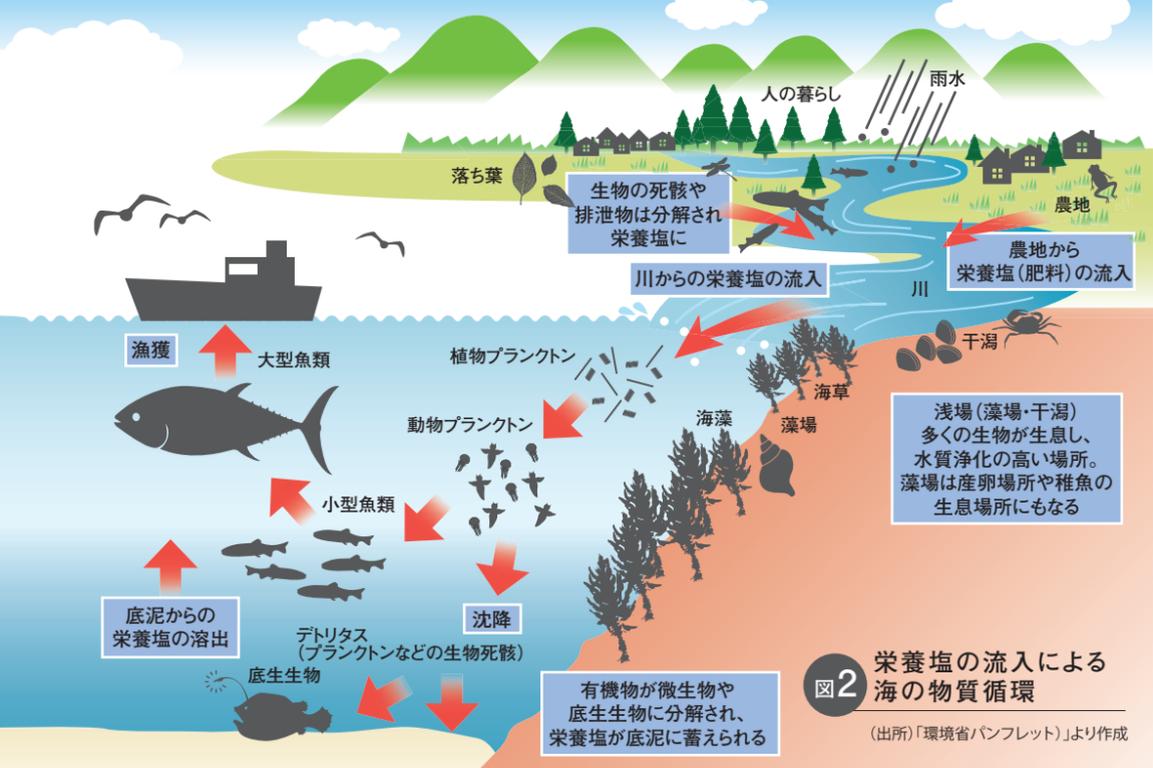


図2 栄養塩の流入による海の物質循環

（出所）「環境省パンフレット」より作成



写真2 漁業者の森づくり(植樹活動)



写真3 農業者と漁業者によるため池の「かいぼり」(池ざらえ)



写真4 海の森づくり(アオリイカの産卵礁の設置)

かな海を引き継ごうと、漁協組合員が生協の組合員や子供たちと一緒に、県下各地で植樹や間伐作業を行っています。こうした活動を通じて、一般の方に森と海の関連やその重要性を知っていただくのも目的です。

このほか数年前から、県内各地にあるため池の底をさらう「かいぼり」(写真3)作業を地元の家や住民の方々と、漁協関係者が協力して行っています。

ため池に沈殿した泥に含まれる窒素やリンなどの栄養分を海に流すことで、ノリ養殖などに有効活用できるほか、ため池管理者の高齢化

たこの作業を復活させることで、ため池の適正管理にもなりますし、農業者と漁業者との交流も図られることから行政も支援しています。

下回り、2010年にはその差がますます広がっています。とくに近年の傾向として気になるのは、以前は魚食に戻ると言われていた50〜70歳以上のシニア世代が肉食にシフトしていること。つまり国民全体で魚離れが進行しています。また、将来の食料支出額を予測した農林水産政策研究所のデータによると、2025年に調理食品が40%近く増加するのに対して魚介類は25%減少する見込みです。このままいくと魚食が衰退し、栄養バランスのとれた日本型食生活が大きく変わってしまいかねません。

—このころは魚介類の購入先も食品スーパーなどの量販店が主流ですし、輸入物が目立ちますね。

最近の食品スーパーの店頭には並ぶ魚種は多くて30品目くらい。それも切り身や刺身のパックや干物など調理しやすい形態で売られていて、ロットや規格が揃う輸入魚や養殖魚が増える一方、地域の鮮魚店で売られていた地魚や規格外の小魚が店頭に並ぶことはまずありません。このようになってき



写真5 地元直産の鮮魚の移動販売を行っている漁連の魚屋-とれびち号

でも多く「魚好き」を増やすとともに、地産地消も進めていこうという取り組みです。

—環境省も、人間の手を加えることで生産性と生物多様性が維持されている沿岸海域を「里海」として、その創生を支援していますね。

自然はあらゆるものがつながって循環していますが、その多くは人の手で大きく改変されて、再びもとの姿に戻すことは困難です。ダムや堰を取り壊したり、埋め立てられてきた護岸にかつての干潟を再生させることはできません。しかし、私たちがこのような自然のメカニズムを理解し、物質循環させることを意識して自らの手で少しずつ行っていけば、もう一度人の手で、多様な生態系と自然環境が保全された恵み豊かな「里海」に再生することはできるのです。

私たちは漁業団体として、この瀬戸内海が再び水産資源であふれる真の「豊かな海」になってもらいたいと心から願っており、漁業者でなければできないその役割を、先頭に立って果たしていくつもりです。その一環として私たちは、瀬戸内海に良好な漁場環境と水産資源を回復させるため、漁業者の要望を盛り込んだ「新瀬戸内海再生法」の法整備に向けた活動に取り組んでいます。

細りゆく漁業と魚食文化

—沿岸漁業者をとりまく経営環境が厳しさを増していると聞きます。

漁獲量が減少して漁業所得が減少するなか、漁船燃料代の高騰が重くのしかかって

たのも低価格、簡便、食べやすさといった消費者ニーズを偏重し過ぎたから、といえるのではないのでしょうか。

本来の姿を取り戻すために

—かつては「町の魚屋」さんが、買い物客に旬の魚やおいしい食べ方を教えてくれましたが、そうした機会がもつとあればいいですね。

おいしい地の魚を、おいしく食べていただくための情報発信が重要だと考えています。そこで私たち県漁連が中心になって、多くの人に魚への関心を高めてもらおうと2009年7月に発足したのが「SEA T-CLUB(シートクラブ)」。海(SEA)と食べる(EAT)を組み合わせてシート(SEAT)です。これまでの活動としては、旬の魚を使った料理教室や魚のさばき方教室を開催したり、魚に触れる経験が少ない子供たちを対象に、小中学校を回って食育を行いました。また、兵庫県下のJA農産物直売所を中心

に軽トラックで巡回して、兵庫県産の鮮魚および加工品の移動販売(写真5)も行っています。対面販売を通じてお客様に魚に適した調理方法などを提案しています。一人でも多く「魚好き」を増やすとともに、地産地消も進めていこうという取り組みです。

ただ、漁業者は決して手をこまねいているわけではなく、沿岸漁業の活性化を図る取り組みも盛んに行われています。たとえば、鉄やコンクリート、木などを沈めてイカの産卵床や魚礁をつくったり(写真4)、稚魚を海に放す種苗放流もしていますし、魚の価値を上げる取り組みとしては、捕獲した稚魚や二枚貝を大きな生け簀で育てて市場に出す蓄養など、県や市と協力して多様な活動を行っています。

—消費者の「魚離れ」が進んでいる状況はどう見えますか。

水産物は小売経費が4割近くを占めるなど、流通コストの占める割合が大きく、肉類に比べて割高感があることも、消費低迷につながっているようです。

厚生労働省の「国民健康・栄養調査報告」によると、国民1人当たりの魚介類摂取量は年々減り続け、2006年に初めて肉類を含まないという結果がでた。シートクラブは発足から4年経ちましたが、今までの成果はいかがですか。

一般向けの料理教室や子供の食育活動も含めて、昨年1年間で約1万人の方に参加していただきました。成果はまだこれからですが、お陰さまで参加いただいた方々には好評ですので、口コミでさらにこの活動が広がることで、地の魚はおいしい、自分で魚を料理したい、という人を一人でも多く増やしたいですね。また、地の魚をより多くの人に知ってもらい、食べていただくには、それを提供する飲食店、料理人の方々の役割も大きいですから、飲食のプロを対象にした「魚のプロ養成講座」などの実施も検討しているところです。

—豊かな魚食文化を継承していくため、消費者に伝えたいことは何でしょう。

先ほどお話ししたような、日本の海の現状や漁業の実情についてほとんど知られていないので、より多くの方にできる限り正確に知っていただきたい、というのが私たちの立場です。そのためにも今後も魚を通した教室・イベントなどをたくさん企画・開催していきたいです。食育や環境教育の現場である学校に向けた情報発信も積極的に行っていこうつもりです。

都市生活者のための防災・減災

―ふだんの備えをデザインする

インタビュー(2012年11月27日)

濃密なコミュニティが成立しにくい現代の都市生活のなかで、いかにして地域の防災・減災力を高めていくのかは、今大きな課題となっています。そこで、アートやデザインの力を活用して防災・減災のためのツールや仕掛けの数を開発している、NPO法人プラス・アーツの永田宏和氏を訪ね、東日本大震災以降のマンション開発などにおける新しい動向や神戸で始めている取り組みなどについてうかがいました。

防災・減災への取り組みにアートやデザインの力を活かす

私たちNPO法人プラス・アーツは、阪神・淡路大震災の被災体験をもとに地震に対する考え方をまとめた『地震イツモノート』の企画や、防災・減災を楽しみながら学ぶイベントなどを、地域、学校、企業、マンションなど、これまでさまざまな場所で展開してきました。

私たちが第一に考えているのは、日々の暮らしの中で災害に備えるということ。ただ、それは簡単なものに見えて難しい。そのため、

私たちは生活者の興味を引き、意識を高める手法として、アーティストやデザイナーの創意を活かした取り組みを開発してきました。

その基本は楽しみながら学ぶということ。例えば、子どもたちがおもちゃを取りかえっこする「かえっこバザール」というアート・プログラムと家族向けの防災訓練を融合した「イザ!カエルキャラバン!」では、子どもたちが、机の下敷きになった人形をジャッキを使って救助したり、バケツリレー競争や、消火器でスト

ことで、その特性や、考えられる災害に応じて独自のものが生まれてくるわけです。

こうしたプログラムのもとになったのが、私たちが行った阪神・淡路大震災の被災者へのリサーチ。それを2007年にまとめたのが『地震イツモノート』です。ここには、実際に地震が起きた時に何が困ったのか? 現実の避難所生活はどうだったのか? その時何が役立つのか? など、被災者の様々な本音や知恵が並んでいます。書籍化にあたっては、イラストを著名な寄藤文平さんに半ば無理矢理に(笑)お願いしました。被災者の言葉はとても生々しく、重い部分が結構あります。それを柔らかく伝えるには、どうしても寄藤さんのイラストとデザインの力が必要でした。

私たちが今やっていることは、すべてこのリサーチが起点です。つまり被災者の方々に教えていただいたことがもとになっています。それをどう伝え、どう受け止めてもらうのか。リサーチの際に印象に残ったのは、当時とても悲惨だったという証言とは別に、ある種のユーモアだったと言う人がいたことです。みんなが同じ目線に立って助け合った。地域の人、役所の人も、一致団結して働いた。動くのも早いし、不足は補い合った。ところが何日か経って、物資が届き始めるとエゴが出てくる。もめごとが生じてきたといえます。それを非難し、諦めるのではなく、人間とはそういうものだということをまず知っておくことが必要だと思えます。だからこそ、防災・減災にはコミュニティの視点も重要になってくるのです。

ふだんの暮らしのなかで地域の力を高めていくために

マンションなど、現代の都市生活のなかでは、濃密なコミュニティが成立しにくいのは確かです。私たちが今、行政やデイベロッパーなどとともに取り組んでいる経験から言っても、そこに、日常から助け合う力を育んでいくのは容易なことではありません。



防災・減災関連のワークショップでオリジナルの模型を使って講演をする永田宏和氏

ラックアウトのようなゲームをしたりします。楽しいイラストやキャラクターがいっぱいで、ゲーム感覚だから、子どもたちも本当に真剣で熱心です。数年前に始めたこうした試みは、今全国に広がっています。

私たちは、そこに、さらにまちづくりの視点を加えていこうと考えています。イベントのプログラムにしても、できあがったものとしてではなく、地域の人をまじえて現場で考える



阪神・淡路大震災の被災者167人に、被災時からその後の状況をヒアリングとアンケートで尋ねた調査を元にした『地震イツモノート』(木楽舎)。寄藤文平さんのイラストが、被災当時の状況や日常での備えにつながる防災・減災の知恵をわかりやすく伝えている



レッドベア
ベアサバイバルキャンプの様子



大阪ガスが推進している「火育」ともコラボしており、火の扱いもプログラムに入っている

キャンプに参加した子どもたちが防災・減災に関する技を習得した際にもらえる、レッドベアサバイバルキャンプの「技バッジ」。このバッジを目指して子どもたちは必死にチャレンジ

しかし結論としては、諦めず、少しでも良くなるためにいろいろなことをやってみようということ。結局これは、息の長いまちづくりと同じことだと言えるでしょう。

例えば、何百戸のマンションで、防災・減災のイベントに、一度に全員を引っ張り出すのは無理ですが、10人なら何とかかなりそうです。10人が15人と、少しずつ増やしていくように努める。子育て世代に働きかけるには、「イザ！カエルキャラバン！」などのプログラムが使えますが、高齢者層の場合は学びのある場や食と関係したテーマなどが考えられます。例えば、炊き出しセットを使って実演したり、練習してもらったりする機会にして、できるだけ大勢の人に来てもらおうと、あの手この手でアプローチしています。

やはりどこか孤独感を感じておられる住人の方も多いようで、一度参加すると、他の住人と知りあえて良かったという感想もよく聞きます。だから、そこに住んでいる人たちに寄り添って、求めているものを見極めながら進めていくべきでしょう。ただし、最初は仕掛けていくけれども、それは種を持っていくということ。住人を巻き込みながら、企画の中にも入ってきてもらい、やがて我々は引いていき、最後は自立してもらおうのが理想です。

皆が真剣に考え始めている マンション開発での防災・減災

千戸単位の大きなマンションだと、災害時には自主的に対策本部をつくらないといけないくらいの規模です。しかし、ふだんは他の住人と全く会わない生活もできるし、ふれ合う必然性がないから、コミュニティもできない。

それでも東日本大震災の時には、仙台などでは、揺れが収まった後に高層マンションの1階に多くの人が降りてきて、共同で炊き出しを始めた例がいくつもあります。緊急時にはひとりではられない。エレベーターも止まっていり、いつまた大きな揺れがやってくるかわからない。



大阪のあるタワーマンションでの防災展示の様子。『地震イッモノート』に関連したパネルや防災グッズの実物を置くなどし、最終日には住民が参加する防災講座も実施



デベロッパの側も、今は真剣に考え始めています。東日本大震災以降、関東の高層マンションでは、地震の度に大きな揺れがあり、住民の関心も高まっています。それを受け、水や食料などの備蓄システムを充実させ、住民向けの防災マニュアルづくりをし、自助としてのふだんの備えを勧めたりもしていますし、災害時には管理組合や管理会社がどう対応するかを含めたオペレーションシステムの構築などにも取り組むはじめています。さらに、従来はなかったことですが、今は周辺の町内会の活性化までを考えようというところまで広がってきています。

私たちも、できるだけ多くの住民に関心を持ってもらい、参加してもらうため、工夫を凝らした防災・減災イベントを試みています。関西でも、大阪のあるタワーマンションでは、住民の誰もが通るロビーで防災展示を1週間行いました。関連グッズの実物や家具固定の効果がわかる模型を置くなどし、これを同時に後日の防災講座の告知としました。講座当日は、50人ほどが

非常食や非常時のトイレの講座などに参加し、「非常用設備探検ツアー」では屋上ヘリポートや受水層などを見学しました。これは、設備の確認だけでなく、住民同士の交流にもつながります。そこから、実際の緊急時には互いにどう安否確認し、助け合うのかを考えるような方向に進んでほしいと思っています。

結局、一番の課題は住民の中の担い手づくりです。住民理事会などを対象にセミナーを開いたり、管理会社の社員が防災・減災講座もできるような研修システムを考えているところです。最近では、入居前から意識を変えようということで、マンション購入予定者対象の講座を催すこともしています。それとは別に、私は、マンションの造り方自体を今一度考え直す時期ではないかと感じています。今後は、集まって暮らすことの意味を、ハーブ面だけでなく、コミュニティの視点からも総合的に考え直していく必要があるでしょう。

「プラス・クリエイティブ」による 社会的課題へのアプローチ

私たちは今、旧神戸生糸検査所の建物を再生活用するKIITO（デザイン・クリエイティブセンター神戸）の運営を委託されていますが、ここでもアートやデザインの力の活用を深化させた「プラス・クリエイティブ」の手法で、さらに広汎な社会的課題にアプロ

チしていこうと考えています。

なかでも阪神・淡路大震災を経験した神戸から、防災・減災のクリエイティブな動きを起こしていくことは大切です。その一つとして、今「レッドベアサバイバルキャンプ」という試みを始めています。キャンプを通じ、災害時に役立つ技などを子どもたちが身につけるようにしようというものです。そのプログラムを組み立てるに当たっても、消防局の人や学生やデザイナーなど様々なメンバーが集まって、事前にKIITOで10回以上のセミナーを実施しました。キャンプとして展開することや、技を習得した子が「技バッジ」をもらえるという案も、この時に出てきたアイデアです。

2012年の夏には、いわき市の教育委員会からのオファーがあり、キャンプを6カ所の公民館で実施しました。その際も事前のワークショップを実施し、現地の人たちに独自のプログラムを考えてもらい、新しく10種類のいわきバッジが生まれました。

今後も、みんなで知恵を出し合うという「プラス・クリエイティブ」の考え方を実践しながら、それぞれの場所で次々に新しい担い手が生まれてくるようにしたい。それがひとつの理想のかたちだと私は考えているのです。

NPO法人プラス・アーツ
神戸事務所

〒651-0082 神戸市中央区小野浜町1-4
デザイン・クリエイティブセンター神戸 307
TEL 078-335-1335 <http://plus-arts.net>

単身者、これからの住まい方

インタビュー(2012年12月6日)

高齢化や未婚率の上昇とともに、単身世帯の増加が見込まれています。今後、住まいに対するニーズや住宅サービスはどのように変化していくか、私たちはそれぞれどう対処していけばよいのでしょうか。今回は、住まいの面から世帯構造変化への対応に取り組んでいる、三井不動産株式会社賃貸住宅事業部の清水朝一統括にお話をうかがいました。

住まいに関する意識と世帯構造の変化

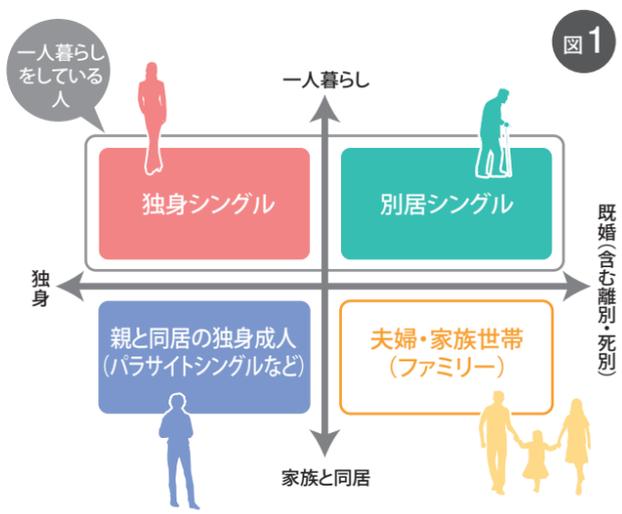
— 最近の住環境や意識の変化について、どのように捉えていますか。

まず需要面では、「サステイナビリティ(持続可能性)に対する関心の高まり」が挙げられます。リーマンショックや東日本大震災等を経て、「安全・安心」や「環境共生」に対する意識が強くなっています。具体的には自家発電設備を導入した戸建住宅や備蓄倉庫、カーシェアリングなどを導入したマンションが増えています。震災による帰宅難民化を経験し、「通勤距離の長さ」リスクの一つ、「という考えも強くなっているようです。また、生活者が将来の有事に備えておくこ

との重要性に改めて気づき、「つながりや絆」に目を向けています。特にマンション居住者の場合、地域コミュニティとのつながりの有用性が今まで以上に認識されつつあります。

一方、供給面を見ると、既築マンションのストック(在庫)が分厚くなり、都心をはじめとして、既存(中古)住宅市場が拡大しつつあります。マンションの仕様も向上し、永住するのに十分な品質を持った既存住宅が増えています。リフォームへの理解も深まってきており、昔に比べれば都心居住のコストはかなり低くなっています。

また、少子高齢化の影響で「世帯の小家族化」が進んでいます。東京都では、すでに全世帯の約4割を「単身世帯」が占



めています。こうした小家族の増加は、ネットスーパーの普及や自動車保有率の低下など消費行動にも影響を与えていると考えられます。

単身者を理解するための3つの視点

— そのような単身者を、住まいという観点からどのようにとらえていますか。

単身者(single)という言葉の使われ方には、「一人暮らしをしている人(living alone)」という居住形態を示す場合と、「独身の人(unmarried)」という婚姻状態を示す場合があります(図1)。

一般的に、「住まい」という視点から見た単身者は、「一人暮らしをしている人」を指し

ます。例えば、親元から離れて暮らす若者をはじめ、広義には、単身赴任者や、伴侶死別後の独居高齢者なども含まれますが、彼らは「独身の人」ではありません。反対に、親と同居している「独身」の成人(いわゆるパラサイトシングル)は「一人暮らしをしている人」ではありません。

このように単身者は、居住形態と婚姻状態が混同されがちですが、ここでは一人暮らしをしている人を単身者としてお話しします。また、単身者といっても多様ですので、次の3つの視点から理解することにします。第一に、「性別」によって「一人暮らし」に求めるものが異なります。例えば、三井不動産グループが実施したアンケート等によると、女性の場合、セキュリティを重視する意見が圧倒的に多くなっています。

第二に、年代や「ライフステージ」によっても嗜好は異なります。一般に、30代になると持ち家購入意欲が、70代以降になると生活支援や介護などへの関心が高まります。

図2は、ライフステージの節目を「35歳」「50歳」「65歳」「80歳」と15年刻みで設定したものです。「若年期(〜34歳)」では、全体の約7割を占める未婚者が、住まいを結婚までの仮住まいと考えて借家するケースが多くなっています。家賃が高かったり居室面積が狭かったりしても「通勤利便性」の優先度を高く考える傾向があります。

図2 年代別にみた5つのライフステージ

若年期 (〜34歳)	<ul style="list-style-type: none"> 就学や就業・転職等を機に、親世帯から分離・独立する年代 未婚・独身など「単身」が70%以上を占め、借家率も70%以上と高い
中間期 (35〜49歳)	<ul style="list-style-type: none"> 家計収入が安定し、家族や資産形成が進む年代 晩婚化などを背景に、「単身(38%)」と「夫婦と子(37%)」とがほぼ拮抗
壮年期 (50〜64歳)	<ul style="list-style-type: none"> 子育てが一段落し、仕事をリタイアするまでの準備期間の年代 ミドルと同様に、「単身(32%)」と「夫婦と子(32%)」がほぼ拮抗
成熟期 (65〜79歳)	<ul style="list-style-type: none"> リタイアにより可処分所得は減少するが、「可処分時間」は大きい年代 年金中心のためキャッシュフローは低いが、持家率は高い
不安期 (80歳〜)	<ul style="list-style-type: none"> 健康状態の変化により日常生活に何らかのサポートが必要な年代 活動期同様にキャッシュフローは低いが、相続資産などストックは多い

企業の定年は65歳に延長

平均寿命は男性79歳、女性86歳

(出所)「平成22年国勢調査(東京都)」より作成

「中間期(35〜49歳)」は、家計収入が安定し、家族や資産形成が進むステージですが、近年は晩婚化により「単身」と「夫婦と子」がほぼ拮抗しています。住まい選択では、「持ち家が賃貸住宅か」に悩む時期でもあります。最近では、生活利便性などで我慢をせずに相応の家賃を払う積極的賃貸派も増えています。



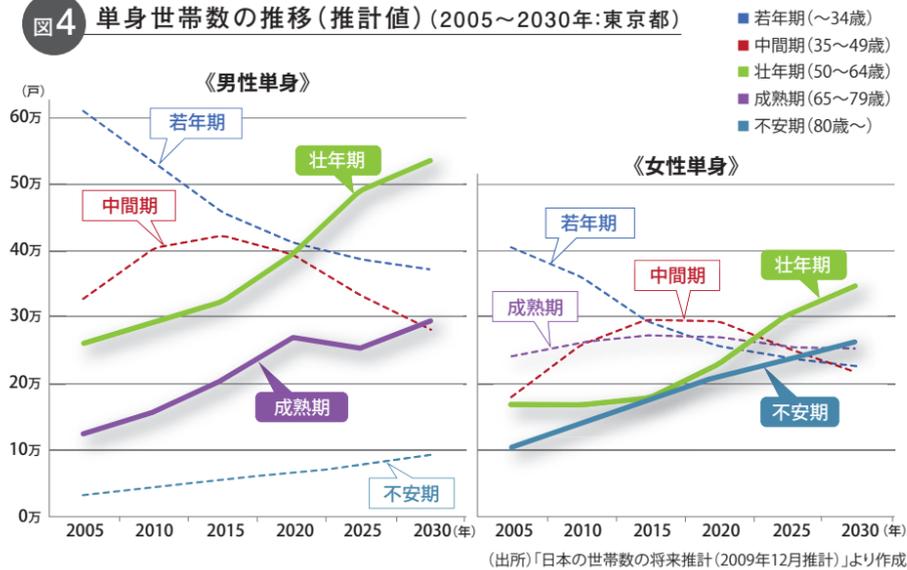
清水 朝一
しみず ともかず

三井不動産株式会社
賃貸住宅事業部
企画運営グループ 統括

プロフィール

1993年三井不動産(株)入社。ユニバーサルデザインを追求した分譲マンション「パーク・ハイム豊中緑地公園」や介護支援事業「ケアデザイン」などを担当後、S&E総合研究所にて「高齢化と住まい」や「長寿化とライフプラン」などの調査研究に取り組む。現在は賃貸住宅事業部にて、単身者・シニア向けの商品・サービス企画を担当。

図4 単身世帯数の推移(推計値)(2005~2030年:東京都)



(出所)「日本の世帯数の将来推計(2009年12月推計)」より作成

シニアハウスの女性フロアなども注目されていて、コミュニティ形成に向けた、社宅・寮のリノベーションなども増えていくと予想しています。

現在、各社が取り組んでいるものとして、住宅に対するサービスの付加があります。例えば、ホームセキュリティに力を入れて安心という価値を強調している会社や、地域の商店街と提携して様々なデリバリーサービス

(出前やクリーニングの引き取りお届けなど)を行い、きめ細かい利便性提供を試みる会社が出てきています。

当社でも慶應義塾大学スポーツ医学研究センター、(株)タニタと連携して、今年1月から都心マンション居住者向け健康サポートサービス「パーソナル・ヘルス・デザイン・プログラム」を始めました。これは、マンションの共用部に看護師資格をもった(株)タニタのP.H.D.コンサルタントが常駐し、個々の居住者のニーズに合わせて運動方法や食生活の指導を行い、効果的な健康増進をサポートするオーダーメイドのサービスです。

現在のところ、賃貸住宅居住者が主な対象ですが、徐々に分譲住宅にも広がっていきたく考えています。

——単身者の意識や行動が変わることによって、住まい全体にはどんな影響があるのでしょうか。

シニア層の多くは、子育てに適したファミリータイプの住宅を保有していることから、そのミスマッチを解消する動きが広がるでしょう。例えば、自分たちだけでは広すぎる家を若いファミリーに譲って、狭いけれどももつと便利な都心のマンションに移り住む。このような動きが広がれば、住宅市場も変わるのではないかと予想しています。

特に単身者の場合は、広い家に無理に住み続けるよりも、貸す方が合理的です。現

では、今後単身者の増加が予想されています。第三に、「経済条件(状況)」です。年齢が上がるほど、フロアとしての年収だけでなく、ストックとしての金融資産、住宅資産などに差がついてきます。

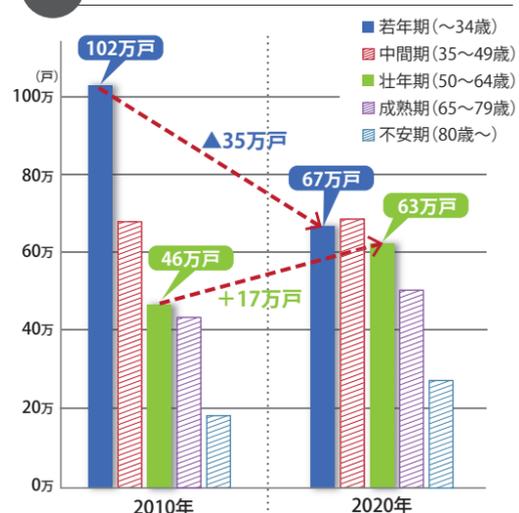
——具体的に単身者は今後、どのように推移していくのでしょうか。

図3は東京都の単身世帯の年代別の変化を推計したのですが、少子化の影響により、2010年に102万戸だった「若年期」の単身世帯は10年後の2020年には63万戸へと大幅に減少し、代わって、「壮年期」より上の年代で大幅に増加します。

ただし、男女の平均寿命差の影響からか、男性は「成熟期」の増加人数が多い一方、女性の場合、伴侶と死別する「不安期」で大幅に増えるのが特徴的です(図4)。

50代以上の単身世帯では、男性単身よりも女性単身の持ち家率の方が高くなっています(図5)。理由は現在調査中ですが、次のような仮説を立てています。終身雇用に守られた男性単身者の場合、定年後は退職金を基にして柔軟な人生設計を持っている。一方で、終身雇用の恩恵を受けにくかった女性単身の場合は早目に持ち家を取得して(早目に返済を完了して)、老後の不安を払

図3 年代別単身世帯数の変化(推計値)(東京都)



(出所)2010年は「平成22年度国勢調査」より作成
2020年は「日本の世帯数の将来推計(2009年12月推計)」より作成

試しておきたいと考えているのではないのでしょうか。

もしこの仮説がある程度の射ているならば、今後男性も雇用状況の不安定化の影響で、若い世代の持ち家率が上がっていくかもしれません。最近、タワーマンションなどで40〜50㎡台のコンパクトタイプの部屋が供給されるようになっていきます。投資目的だけでなく、そのような単身者の実需での購入、あるいは中古物件のリフォーム事例なども増えていくと思います。

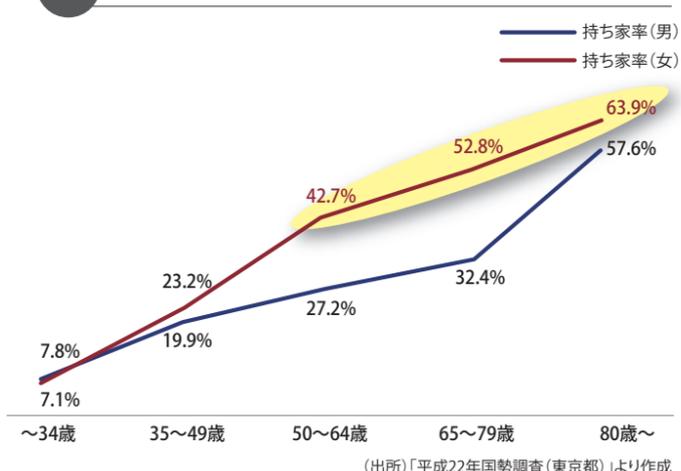
一方、30〜40代の単身者は賃貸住宅に長く住んでいる人が多いようですが、賃貸⇔仮住まいなので多少の不便はやむを得ないと考えていた人たちの中に、「我慢せずにもう少し

多様な発展が期待される単身者向け住宅サービス

——単身者の多様なニーズに対して、住まいの供給はどう変化していくのでしょうか。

女性は暮らす上での豊かさへのこだわりが強いので、当社が提供しているマンションでは、キッチンや収納スペース、セキュリティなどを充実させています。反対に男性の場合は家で過ごす時間が比較的に短いので、屋内の設備よりもむしろ、立地、駐車場の有無、資産価値、かつこよさなどに関心を示すようです。

図5 単身世帯の男女別年代別持ち家率(東京都)



(出所)「平成22年国勢調査(東京都)」より作成

在多数を占めているシニア層が保有する持ち家資産を有効に活用するための政策的支援は、これからの日本の住生活を向上させるために必要なことだと思います。

また生活者の視点からは「人生90年」のライフプランを想定しながら、柔軟に「住まい」を「不動産」として活用していく知恵が求められます。ファミリータイプだけでなく、単身者向けのコンパクトな持ち家も「自ら住んだり」「老後は若い人に貸したり」できるからです。その際には、「家賃収入が私的年金になる」という発想を持つことも重要です。



山本 浩
法政大学スポーツ健康学部教授、
元NHKエグゼクティブアナウンサー・解説委員

弘本 由香里
大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所
特任研究員

朝原 宣治
大阪ガス(株)近畿圏部、元陸上競技選手・
北京五輪400mリレー銅メダリスト

■ 身体を通して「気づき」「感じる」ことの重要性

朝原 2010年の春から、大阪ガスの地域貢献活動の一環として、陸上競技クラブNOBY(ノビィ・NOBY T&F CLUB)を立ち上げています。現在、会員は約200名で、子どもたちが大部分ですが、下は小学校4年生から、上は69歳の方までが参加されています。陸上

競技の指導というよりも、身体全体を使って、楽しく、自主的に運動をしてもらえる場を提供することが狙いです。特に子どもに対しては、そこでのいろいろなことを感じてもらい、生きるための力を培ってもらいたいと考えています。また、大阪ガスだけでなく、地域の大学や行政、NPOや他の企業などにも、地域全体として、様々なかたちで関わっていただいています。

山本 子どもたちにとって、しっかりと指導者の下で、主体的に身体を動かすことができる環境を与えてもらえるのは、非常に意味のあることだと思います。そもそも、走るということには歴史が深いアクションです。動物行動学者が言うには、草食獣系は逃げるために走る、一方、肉食獣系は獲物を追うため、そういう気になった時だけ走る。

朝原 普段はだらっとしていても…。

山本 腹が減ってきたら走る。草食の方はいつも神経を張り詰めている。ところが、人間の走りはそのどちらにも属さない。人間的な思考や意志がないと走れない。子どもの頃に、それは自分で感じ取って身につけていくものでしょう。

弘本 そうですね、人は二足歩行で骨盤も大きくなく、子どもは小さく生まれます。未熟なまま世に出て、親や家族も関わる中で成長していく。独特の生活文化の中で、いろんなことを学びながら生きる能力を身につける存在ですね。

山本 自分の体験から言っても、幼稚園くらいの頃は、走って速い子はそれだけでみんなから尊敬された(笑)。生きる能力が高いようにも思えます。NOBYでも、子どもたちはそういう気持ちで入ってくるのでは。

朝原 中には走るのが得意でない子もいます。リレーなどをすると、周りから、おまえのせいで負けるとか言われてしまう。確かに能力は人それぞれですが、運動会とは違って、NOBYでは負けても楽しいんです。少しでも速く走れるようになってきたらもっと楽しい。

特集

スポーツが持つ“多様な魅力”がQOL(生活の質)を豊かにする

今回の特集では、生活者のQOL(生活の質)向上にスポーツがどう貢献するのかについてアプローチします。スポーツは、遊技、競争、肉体鍛錬、コミュニケーションなど多岐にわたる側面を持っています。こうしたスポーツの多様性に注目し、文化的、生活的側面に加え、社会的側面にも光をあてながら、それが私たちのライフスタイルやQOL向上にどのようなつながりを持つのかを捉え直していきたいと考えます。

■ 鼎談 ■

スポーツの力、 「感じる」ことと「伝える」こと



弘本由香里がスポーツの多様な価値について語り合う鼎談。身体を通して「感じる」ことの重要性と、そこから培われる自律心やコミュニケーション力、さらにはスポーツのエネルギーを地域に活かす可能性などにも話題が広がりました。



今回は、NHKアナウンサーとしてワールドカップサッカーやオリンピックなどの名実況で知られ、現在は法政大学で教鞭を執られている山本浩氏をお招きして、大阪ガス(株)に所属する北京五輪銅メダリストの朝原宣治とエネルギー・文化研究所の



弘本 NOBYで行われている、身体だけでなく子どもたちの人間力を伸ばすプログラムにとっても興味があります。何年前か前、ドイツでシェフタイナーが提唱した教育理論を実践する幼児教育の現場を見に行ったことがあるのですが、その手法とも類似点があるような。例えば、子どもの自我形成の基礎として、空間を感じ取る力が大切という考え方や、園庭も自然の森などで、そこで自分の身体を通していろんなものに触れ

■ スポーツを通し育まれる「コミュニケーション力」

弘本 NOBYで行われている、身体だけでなく子どもたちの人間力を伸ばすプログラムにとっても興味があります。何年前か前、ドイツでシェフタイナーが提唱した教育理論を実践する幼児教育の現場を見に行ったことがあるのですが、その手法とも類似点があるような。例えば、子どもの自我形成の基礎として、空間を感じ取る力が大切という考え方や、園庭も自然の森などで、そこで自分の身体を通していろんなものに触れ



弘本 私は子どもの頃、給食と徒競走がとても苦手で(笑)、早く大人になりたいと思うていました。朝原さん自身も、短距離走から始めたのではなく、いろんな環境に身を置いて、自己の能力を高めてこられた。さまざまな練習を繰り返し試しながら、自分を成長させていくことを、身をもって示してきていますね。

朝原 やはり、できないことができるようになるのは、とてもうれしいことです。

弘本 しかも、朝原さんのような憧れの人が目の前にいること自体が、子どもたちにとって、とても大きな学びになりますね。そこからいろいろなのが吸収されていくように思われます。

■ トップ選手から自然に伝わっていくものの価値

山本 スポーツの先進国では、ずっと以前からトップ選手が将来性のある子どもたちと一緒にトレーニングをするようなことをしていますね。

朝原 ヨーロッパとかでは、そうしたことは当たり前のようにやっています。試合の前日もトップ選手は子どもたちとふれ合いますし。

山本 日本の選手がやってこなかったのはなぜでしょう？ 自分の調整を気にする？

朝原 むしろ周囲がだめだと言っているから選手もそう思うのでは。でも、最近は選手の意識も変わってきたと思います。

山本 1987年に当時の東ドイツに陸上競技の取材に行ったのですが、選ばれてきた子どもたちもトップ選手と一緒にトレーニングをしていました。トップのふるまいや生活の仕方を若い人に直に見せる。しかもトレーニングの段階では基本的には平等。そこに大きな価値がありそうです。

朝原 ファンサービスという意味では、陸上のウサイン・ボルト選手のパフォーマンスは素晴らしいですね。カメラを向けられても、走る直前までそれに応える。世界的なスパースターには大きな影響力があるということも彼はちゃんと意識しています。

山本 ボルト選手はお客さんを楽しませるし、同時に自分のリラクゼーションもしている。ああやっている間にモチベーションを上げていくのでしょうか。

朝原 ロンドン五輪でも大いに沸いていました。それとは別に、ロンドンでは、ボルト以外のそれぞれの選手についても、誰がどれくらいで走れば新記録になるとか、その経過の情報なども、ちゃんと電光掲示板に表示されていたのが良かったですね。

弘本 観る側も単に順位の結果だけでなく、以前の記録などを見ながら評価する。

朝原 応援のしどころがわかります。自己記録をだいふ伸ばしてきたとか。それが日

るようにする。もうひとつ、言葉によって他者との関係性を育む力が重視されています。きっとそれらは幼児期に、かつては日常生活の中で自然と身につけていたものですね。

朝原 世間では、頭の回転とか知識とかは大事に思われるのですが、身体については忘れられがちです。子どもは、昔なら外での遊びなどで互いにふれ合って、自分の身体がどうで、他人の身体はどういうものか、その距離感もつかんだはずなんです。そこがきっちり定まっていないと、精神的にも安定しないのでは。NOBYのプログラムを監修してもらっている徳島大学の荒木秀夫先生も、まず自分の身体を知る空間認知が大切で、そこからコミュニケーションの力も育まれるとおっしゃいます。

弘本 人間の生活は、朝起きて、食べて、活動して、寝てと、日常繰り返していくことが基本ですが、それも幼い頃から身につけてないと案外難しい。季節の循環や一日の循環など、そのリズムを身体化していくことも重要です。繰り返して上達していくこともあるでしょうし、繰り返すから次にこういう工夫をしてみようと気づく。繰り返す営みの中で、人が自律的に生きていくために欠かせない力が養われるのではとも思えます。それはスポーツの練習に似ているのかもしれない。

朝原 トップ選手はそう。伸びる選手の場合は繰り返しの中で「発見」する。伸びない人は、結果ありきであまり考えずに繰り返している。トップの人は成長に向けて繰り返しながら楽しんでいる。タイムを見るだけでなく、今日はこんな風にしてみようと、こんな食事



子どもとバスケットボールの練習 (岩手県大槌町)



NOBYでのトレーニング風景

で走ってみようとか、変化を与えながら練習しています。

山本 小さなモチベーションを積み重ねながら、目標に向かっていく。その間にいろいろなることがわかってきます。私も放送の仕事で、例えば1分半で歩きながら中継といった時には、先に現地に行って10回くらい動いてみる。何回目からはオートマティズムが出てきて、1秒の感覚が長くなってくる。自分の位置が明瞭に分かってきて、例えば7・6秒くらいからこの位置でこの言葉を言おうとかができるようになってきます。

朝原 僕らも、確かに100分の1秒の単位で、ちょっとした違いを知ることがありました。

山本 よく、子どもはGPS機能が未発達だと言います。だからボールを受けるにも、うまく落下点に動けない。キャッチングポイントもわからないから、手を広げて捕ろうとする。それが、やがては普通に受けられるようになってきて、もつといくとイチローみたいに後ろ向きで捕ったりできる人が出てくる。

弘本 幼い時にできなかったことが次第にできるようになってくる。その反対に、年をとってくると、昔できていたことができなくなってしまう(笑)。



■ スポーツが持つ物語性とメディアの役割

弘本 昨年フィンランドを訪問したのですが、2012年はちょうどヘルシンキが「世界デザイン首都」で、それに関連したいろいろな展覧会が行われていました。そこでは、現在評価が高い作家をフィーチャーした展示の周辺に、同時代の別の作家の作品なども並べてあり、あまり陽の当たらなかつた人も含め、時代や文化の流れの中で紹介するという手法がとても興味深いものでした。同じようなことは、スポーツの見方としてもありうるのでは。

山本 朝原さんの時代を辿っていくと、たくさんスプリンターがいきました。オリンピック予選で敗れた人もいます。その人たちの当時のスプリントに関する考え方を辿っていくだけでもおもしろい。スポーツ界は、そういう財産をたくさんもっている。メディアもそういうところに力をそそげば、多くの人が知らない発見がきっとあるはずですよ。

弘本 それが社会の財産にもなります。ある人ひとりではなく、それ以前の人々の努力にも価値があるというような、もうひとつ別のものが見方が浮かび上がってきます。

朝原 勝っている人がいれば、その裏には、負けている人がそれ以上にいる。

山本 人間世界がそこに再現されていると言えそうです。

弘本 スポーツの記憶は、世代や時代を越えて共有できる、社会を映す歴史的・文化的な資源でもありますね。

山本 メディアのコンテンツとして、今スポーツは大きな価値を持っています。オリンピック、ワールドカップサッカー、世界陸上などは特にランクが高い。それ以外に新聞やテレビ局が主催や後援をしている

山本 荒木先生のおっしゃることは、年齢に関係なく役に立ちます。その意味で、NOBYは高齢者のためのクラスをつくってほしい。ただ、そうすると高齢者はかりになっちゃうかも(笑)。

弘本 西宮の山手に農地のフィールドがあつて、あるNPOと農家が協働で農業塾を運営しています。NOBYの子どもたちも体験学習に参加したことがありますね。農業体験のサポートをするボランティアのみなさんは高齢の方も多いのですが、子どもたちとふれ合うことが大きな喜びになっています。

朝原 子どもたちにとっても離れた世代の人と接する良い機会です。また、NOBYの一般の部にも様々な大人の方がいます。子どもたちも、いくつかの学校から来ています。友達をつুক্তたりする良い場になっているのいい。

弘本 ドイツ在住の知人がいるのですが、ドイツでは地域スポーツクラブがとても盛んで、コミュニティの核になっているそうです。いじめ問題も日本のように先鋭化していかないのは、そういうところで学校や学年の垣根を越えているいろいろな年代の子どもや大人に接することができ、それが救いになっているのではないかと。

朝原 指導する側とされる側が対等な関係で、日本の学校ごとの部活と違って、自分にあつた指導者のいるクラブチームを選ぶことができます。また、そういう場所で、出会った人にちゃんと挨拶するということなどから、人との関係づくりを始めるのは、すごく大切なことだと思います。

弘本 スポーツのルールに則って何かをすることからも、たくさんの方とを学んでいきますね。社会の安定を支える規範にもつながる。

山本 その意味では、スポーツに対する世の中の評価がまだまだ低い。スポーツというものが、まさに生きるためには欠かせないものだというところに、みなさんが気づくべき時代ですね。

大会がある。スポーツの世界から出てくる人は、ある意味で政治家より影響力があり、そのメッセージの浸透力も強い。

朝原 そういう発信がちゃんとできるようなアスリートを増やすことが大事ですね。

山本 ただ、言いたいことがある場合は、アナウンサーの質問に、そのまま答えないう方がいいですよ(笑)。大抵アナウンサーは、今いかですか、あの時はすごかったですね、このあとどうですかと、現在、過去、未来について聞いてきます。でも、実際は受け答えの一言だけを抜き出して使う。だから最初に、「その話ではなくて」と制して、自分の言いたいことを一言で言う。サッカーの中山雅史や三浦知良は上手。メッセージ性も高い。イチローもそうです。思いついたことを真っ直ぐに言うべき。

■ スポーツをもっと身近な生活に交わるものに

山本 NOBYが今後どう展開していくかについては、陸上競技の世界でも多くの人が関心を寄せているようです。

朝原 あまり陸上競技には特化していませんし、走りもありません。

山本 それがいいんです。走るの、ほとんどすべてのスポーツのベースですから。



大阪マラソン2012

スポーツ文化の視点と生活者の「からだ」

菊 幸一 (きく・こういち)

筑波大学大学院教授。1957年生まれ。専門はスポーツ社会学。1987年筑波大学大学院博士課程体育科学研究科単位取得退学。教育学博士。日本スポーツ社会学会前理事長。主な著書は、『スポーツ政策論』（共編著、成文堂）、「からだ」の社会学』（共編著、世界思想社）など。

朝原 最近、スポーツを切り口に、いろんな分野の人に出会っています。その広がりがおもしろいですね。また、スポーツの中でも、競技の違う人たちと一緒に何かができないかと、女子バレーボールの監督をされていた柳本晶一さんと「アスリートネットワーク」という活動も始めています。いろんな人とコラボすることで、もっと身近な生活と交わるものとしてスポーツを感じてもらえるような橋渡しをしていきたいと思っています。

弘本 芸術・アートの発想や手法を活かして、医療や福祉、減災・防災の分野などの社会課題の解決に役立てる動きがありますが、スポーツでも、同様の可能性が大いにあると思います。

山本 スポーツに親しむ人は健康度が高い、あるいは生涯にわたる幸せ度が高いだろうという観点から、ある種のポイント制度を発想することもできます。スポーツが人の健康や暮らしにもたらすものを数値化して見えるようにして、例えば、ポイントをためるほど医療費が安くなるかというように、ポジティブな指標として活用する。そ

山本 浩 (やまもと・ひろし)
法政大学スポーツ健康学部教授

1953年島根県出身。東京外国語大学卒業後、NHKに入局。アナウンサーとして、オリンピックやFIFAワールドカップサッカーおよびJリーグなどの数々の歴史的試合の中継を担当。多くの名実況で、スポーツ実況のカリスマとも呼ばれた。その後、NHKエグゼクティブアナウンサー、解説委員(スポーツ・体育分野担当)を務め、2009年から法政大学の教授に就任。著書に『メキシコの青い空—実況席のサッカー 20年』『実況席のサッカー論』ほか。

朝原 宣治 (あさはら・のぶはる)
大阪ガス(株) 近畿圏部地域活力創造チーム、元陸上競技選手

1972年神戸市生まれ。同志社大学卒業後、大阪ガス(株)入社。100mでは日本人として初めて10秒0台をマークし、日本記録を3回更新。自己最高記録は日本歴代2位の100m10秒02。アトランタ五輪から4回連続五輪出場。2008年北京五輪の男子4×100mリレーで銅メダル獲得。現役引退後、2010年から子どもの健全な成長と次世代のトップアスリート育成を目的として陸上競技クラブ「NOBY T & F CLUB」を設立。

弘本由香里 (ひろもと・ゆかり)
大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 特任研究員

筑波大学芸術専門学群卒業後、住宅建築専門誌『新住宅』編集員などを経て、1992年から現職。持続可能な住まい・まちづくり、地域資源を活かした新たなコミュニティ・デザインのあり方など、大学や地域との協働による実践研究に取り組む。共著に『大阪 新・長屋暮らしのすすめ』（創元社）、『地域を活かすつながりのデザイン—大阪・上町台地の現場から』（創元社）など。

のための実践指導の資格なども整備して、指導員と設備が整ったクラブに加盟すると、それもポイントになるといような施策も考えられます。

弘本 地域での健康増進やスポーツをする場の拡充、それに関係した働く場づくりなどにもつながりそうですね。

山本 その時に発言権があるのは、競技スポーツをずっとやってきて、今は地域の人がスポーツの価値を再発見するお手伝いをしてる人。朝原さんには、やるべきことがいっぱいありますよ(笑)。

朝原 その意味では、もっと発信力を持たないといけませんね(笑)。
弘本 社会や暮らしのあり方が大きく変化しているなかで、人の五感を磨き、潜在能力を引き出し、人と人の関係性や地域の力を育むスポーツの可能性、スポーツと地域・社会を結ぶアスリートの新たな役割など、お二人のお話からリアルに伝わってきました。今後に向けて期待が高まります。貴重なお話をありがとうございました。

CEL

スポーツをする「からだ」の不思議

考えてみると、人間の「からだ」というのは、実に不思議な、不可解な存在である。普段、私たちは五体満足な「からだ」の機能を駆使して、精一杯の利便性を求め、生活に支障のない「からだ」の動きを通して、自由を満喫している。もちろん、肢体に不自由のある人が、その動きの制限から生活を満喫する自由が奪われているという事を言いたいのではない。「からだ」に何らかの不自由がある人も、その状態から自らの「からだ」の機能を向上させるためにあらゆる努力を続けながら、環境に適応した(あるいは適応させた)「からだ」の自由を拡大させていく。

しかし、そのような生活と「からだ」との関係、すなわち普段の生活では「からだ」の機能を全開させて、生活の利便性を向上させ、あるいはその機能を機械に代行させることまでしながら自由な運動を拡大していくとすることが当たり前に行われていることに比べると、スポーツをする「からだ」ほど、摩訶不思議なものはない。なぜなら、例えばサッカーでは、人間の「からだ」にとってもその自由を拡大し、利便性を高める手・腕を使用してはならないことになっているからだ。このサッカーに限らず、およそ現代のスポーツにおいて、人間の「からだ」の自由奔放なエネルギーの



発揮（それが高ければ「暴力」となるエネルギー発揮の暴走）をコントロールするルールを持たないスポーツは、もはや今日「スポーツ」とは呼ばれない。
先のサッカーの話に戻ろう。一般生活において他の誰からも、理不尽にルールとして「手・腕を使つてはならない」と言われたら、人びとはたちまちのうちにその自由な状態に我慢ならなくなり、ルールを破っていくことで

あろう。しかし、サッカーをする人びとの「からだ」は誰も不平・不満を表すこともなく、むしろ喜々としてそのルールに従い、その動きを機械に代行させないで、自ら汗を流しながらこれを楽しもうとする。むしろ、普段の生活ではルールを守ろうとしない子どもたちの方が、積極的にサッカーのルールを守り、わざと不自由な「からだ」をつくって遊ぶのである。いったい、サッカーをする「からだ」に何が起つたのであろうか。

ここでは、どちらも同じ「からだ」でありながら、生活のために手段化される「からだ」と、遊ぶことを自ら求めようとする目的としての「からだ」に大きな意味の違いがあることに気づかせられよう。
「ここでは、どちらも同じ「からだ」でありながら、生活のために手段化される「からだ」と、遊ぶことを自ら求めようとする目的としての「からだ」に大きな意味の違いがあることに気づかせられよう。
ような禁欲的で、非暴力的なゲーム形式に変えたのが19世紀におけるイギリスの私学エリート校「パブリックスクール」であったと言われている。そこでは当初、先生の手におえない乱暴な生徒たちが、「からだ」のエネルギーを暴走させるままに暴力的で荒々しいモブ・フットボールに興じていた。これを生徒たち自身によって自治的にコントロールさせ、楽しさを継続する時間をなるべく長くするルール（＝拘束）を設定しよう提案したのが、ラグビー校の校長であったトマス・アーノルドであった。寮対抗から複数の寮による総当たり戦へゲーム形式を変えることで、彼ら生徒たちは安全にゲームを行い、それをなるべく継続することによって楽しい時間を延長すること、それが結果的には「からだ」のエネルギーを自他の「安全な」そして「楽しくなる」からだのためにコントロールするという、意図せざる結果を招くことになったのである。これこそが、アスレティズム（Athleticism スポーツ礼賛）というイギリス独自のスポーツを通したジェントルマン（紳士）教育思想を生み出し、社会的エリートを育てるスポーツ教育として成立していく要因となったのである。

しかし、このこと以前に、近代イギリス社会は18〜19世紀にかけて起こった産業革命＝エネルギー革命によって、人



【図1】「からだ」のエネルギーが暴走するモブ・フットボール
(出所) Martin Tyler: The Story of Football, M.Cavendish, 1976

しかし、近代社会は、このエネルギーをコントロールすることによって、近代以降の社会に受容され、「からだ」それ自体の喜びや楽しさを享受することができ、安全で安心な身体運動文化としてのスポーツに変質していったのである。そして、これを近

る。それは、スポーツをする「からだ」が他の目的の道具となつてしまふような他律・手段的なものなのか、それともこの「からだ」を動かすこと自体に楽しさや喜びを見出そうとするような自律・目的的なものなのかの違いによるのである。この違いは、スポーツをする「からだ」が生活者にとって文化としてとらえられたとき、初めて人間にとって愛おしい存在として意味や価値が付与されるという、スポーツ文化の視点の重要性に気づかせてくれる大きなヒントとなっている。

「からだ」のエネルギーのコントロールと近代スポーツの誕生

そもそも「サッカー」という文化とは何かを、その歴史から振り返ってみよう。その原型は、イギリスにおける中世庶民のモブ・フットボールにあると言われている。このフットボールの形式は、現在のサッカーとは異なり、かなり荒々しく、暴力的なゲームであった。すなわち、それは村対抗、町対抗で競われる群衆フットボールであり、豚や牛の膀胱でつくられたボールを数百人の人びとが入り乱れて奪い合うスポーツで、殴る、蹴る、取っ組み合うのが当たり前前のケガ人続出（死者が出ることも珍しくないほど）のゲームであったという（図1）。

このような暴力的なスポーツであるサッカーを、一転して現在の力や家畜に頼らない蒸気エネルギーのパワーをいかに合理的に効率よくコントロールするのかが社会的課題になっていた。すなわち、エネルギー量それ自体の価値より、このエネルギーをその目的に応じたようにコントロールして発揮するのか、すなわちその「技術」の開発に価値がおかれるように変化していったのである。その意味で、これまではどちらかと言えば、エネルギーの発露の原点であった人間の肉体的パワーは、多少それが暴走（＝暴力化）しても社会的に許容されることが多かった（だから、モブ・フットボールも許されたのだ）。

しかし、近代社会は、このエネルギーをコントロールすることによって、近代以降の社会に受容され、「からだ」それ自体の喜びや楽しさを享受することができ、安全で安心な身体運動文化としてのスポーツに変質していったのである。そして、これを近

代イギリスのエリート教育の一環として開発し、取り入れていったのがパブリックスクールにおけるスポーツ教育であったのだ。

これこそが、非暴力的であることはもちろんのこと、健やかで伸び伸びとした「からだ」によるパワー発揮の近代的原型(方法)であり、その生成のためには横溢する「からだ」のエネルギーを自ら解放する(追求する)とともにコントロールするという、二律背反的な事象を統合する文化として、今日のスポーツが成立したということを知っておかなければならない。

スポーツ文化から遠ざけられる生活者の「からだ」とその復権

ところが、近代化が遅れたわが国の教育において、子どもたちの「からだ」は、まずもって知育・徳育・体育という三育思想における体育としてのそれであり、そこでは統一した「国民」であることを自覚させるもとも手取り早い「上からの」コミュニケーションツールとして、生活者の「からだ」が位置づけられることになった。だから「からだ」は最初から命令され、指示される対象であり、その外形が命令や指示通りに動いているのかどうかを即座に評価し、確認することができる(できやすい)他者のまなざしを意識した規律訓練の対象であった。また、運動する「からだ」は結果として国家の軍事力や労働力に役立つものでなければならず、それは

タの「からだ」には到底かなわない。しかし、人間は100mという距離を人間同士で競い合う行為に文化的な意味を与え、スタート・走路・ゴールを決めて(行動文化としてのルール化と物質文化の支え)、そのルールを自ら守ることによって、走ることを通じた競い合い「走り合うこと」に大きな文化的価値「走るからだ」自体に楽しさや喜びを見出すのである。人間にとっての「健やかかなからだ」とは、速く走ることそれ自体にあるというよりは、むしろそれがどのような文化的目的(観念文化)に導かれたスポーツをする「からだ」なのかによって意味づけられ、価値づけられていると言えよう(図2)。

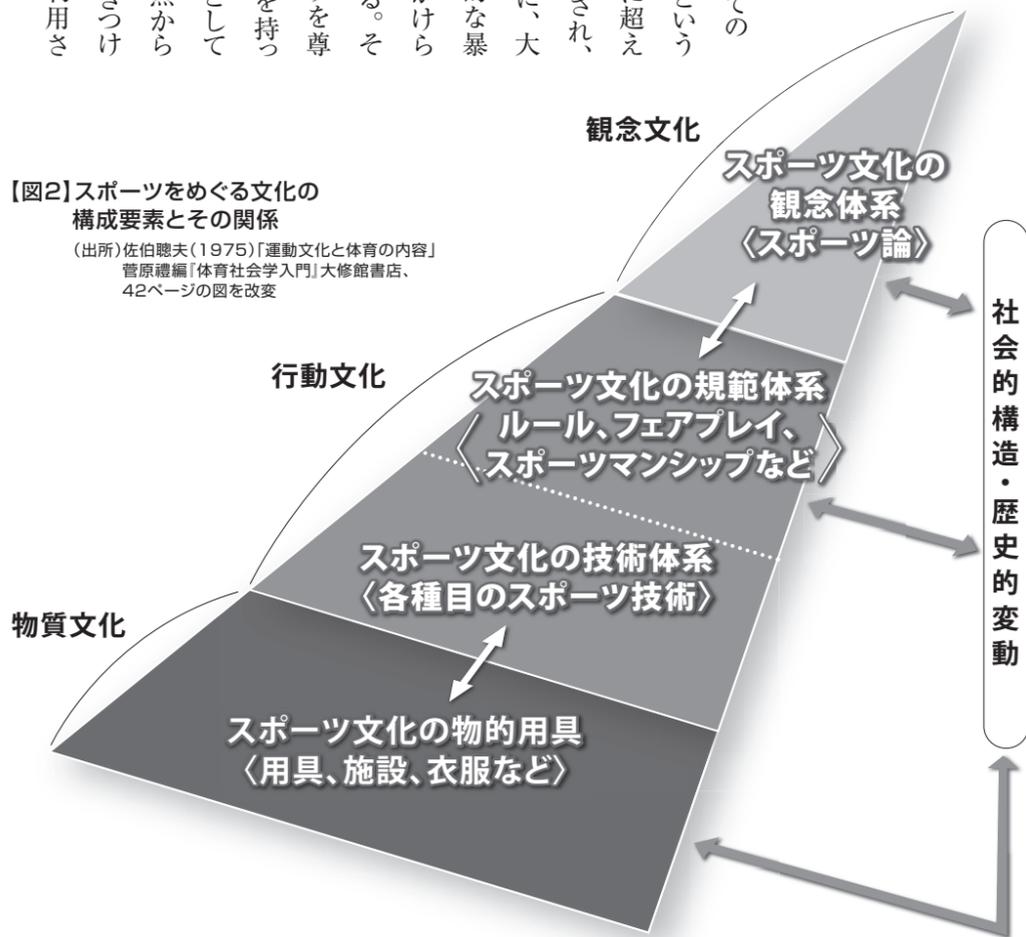
ところが、今日、文化的価値として認められた運動としての「からだ」は、もはや発育発達期である青少年期というひとつのライフステージのみに対応する教育的価値をはるかに超えて、すべてのライフステージ(生涯)にわたって社会的に受容され、大衆化されている現状にある。そうすると、スポーツは逆に、大衆(不特定多数)の欲望をストレートに反映してその潜在的な暴力性を扇動させられたり、外部から禁欲的圧力を過剰にかけられたりする対象に逆戻りしてしまう傾向をもつようになる。そのような大衆の欲望を煽るのは、文化的価値としてスポーツを尊重する理念を持たない経済、政治、メディアといった権力性を持った他領域(界)からの圧力と手段化である。ここでは、文化としてのスポーツによって育まれた「健やかかなからだ」を生活者の視点からどのように守り、育てていくのかに関する現代的課題が突きつけられていることになるのだ。それは、スポーツという文化が利用さ

単純な量的指標によって外から評価されやすく、比較可能な対象でもあった。すなわち、我が国では、近代国民国家「日本」を形成する重要な手段として、その当初から「からだ」が他の目的に役立つそれとして道具化され、手段化されていたことになる。

そのような「からだ」観は、本来自由な「からだ」の動きを奨励するはずのスポーツにも適用され、いち早く野球や陸上競技、漕艇など外来スポーツを取り入れたエリート校(明治時代の第一高等学校や第三高等学校など)では、その社会的正当化のためにエリート精神を獲得する手段としてスポーツをする「からだ」を評価し、その修養・鍛錬性を重視した。つまり、とくにここではスポーツをする「からだ」の文化的な楽しさは隠蔽され、その健全性は他者に従属する身体的成果(従順な身体)の程度を通じて従順な精神の成果として測られたのである。スポーツ競技大会の勝敗の結果は、そのような成果の現れとしてもとらえられ、「我慢するからだ」や「苦しむからだ」がスポーツの勝利を導く「からだ」として神話化され、ますますそれを奨励することになった。

しかし、そのような「からだ」に対する統制や禁欲を新たな解放へと逆転させて「からだ」の喜びをつくり出す時空間が、単なる「からだ」による運動ではなく、プレイ(遊び)としてのスポーツであった(あるいはスポーツでしかなかった)ことに注目しなければならぬ。そこで初めて、近代社会が求める「健やかかなからだ」のあり様が認められたスポーツは、その文化的特性が尊重され、今日に至るまで継続しているということなのである。例えば、100m走をいかに速く走るのかを競い合うヒトの「からだ」は、動物であるチー

れ、手段化されやすい価値を持つがゆえに、その自律性と自立性を有する生活者の「からだ」が身体的幸福(physical happiness)の文化的享受をどのように実現しているのかが問われる所以でもある。



【図2】スポーツをめぐる文化の構成要素とその関係
(出所)佐伯聰夫(1975)「運動文化と体育の内容」
菅原禮編「体育社会学入門」大修館書店、
42ページの図を改変

生涯スポーツからみた健やかな生活者の「からだ」と生活の質(QOL)

それでは、生活者からみた「健やかなからだ」とは何か。生活の質(QOL: Quality of Life)とスポーツ文化とはどのように関連するのだろうか。生涯にわたる「健やかなからだ」をスポーツの文化的価値とクロスさせてとらえたとき、すなわち生涯スポーツからみて、健やかな生活者の「からだ」をどのようにとらえることができるのかということである。生涯スポーツと「健やかなからだ」との関係を観的にとらえてしまうと、スポーツを生涯にわたって実践することと「健康」「健やかなからだ」というコンテクストが生まれ、そこでは生涯スポーツと「健やかなからだ」の育成との関係をめぐって何の問題も生じる余地がないことになろう。

しかし、人間の「からだ」は動物としてのヒトの「からだ」以外の何ものでもないわけであるから、言うまでもなく誕生から青少年期までを除けば、どこまでも「成長していくからだ」ではなく、「衰えていくからだ」、あるいは「死に向かっていくからだ」と言つてよいわけで、むしろそのような状態で推移していく「からだ」と付き合う期間の方がはるかに長い。だから、ここでいう「健やかな



という価値基準を、従来の、一方的なプラスを志向する(青少年期における若々しい、あるいは元気な)「からだ」として措定し、イメージしてしまうと、「衰えていくからだ」は多少無理をしてでも過剰にその方向に従おうとすることになるだろう。この「衰えていくからだ」と、偏った生涯スポーツ観に支えられた、いつまでも元気で若々しい「幻想としてのからだ」とのギャップは、思わぬところで「からだ」自体を死に追いやることさえありえるのだ。「健康のためであれば、死んでもいい」というパラドックス、すなわち脅迫された「健やかなからだ」は、むしろその目的や意味とは逆の結果を生み出す可能性のあることに十分留意しておかなければならない。

つまり、人間の人生にとっての「からだ」の健やかさとは、成長することや衰えることを「からだ」の「自然」としてそのまま受け入れることから始まって、「いま、ここ」にある「からだ」を人間の生の充実に向けて幅広い観点から文化的に解釈し、その望ましさを高めていくことで実現していくものと考えるべきであろう。そこには、たとえ病気や「からだ」の障害があったとしても、人間の生の充実(QOL)をめざしてそのような今、ここにある「からだ」と常に肯定的に向き合い、真摯に、そして素直に「からだ」の楽しさや喜びに浸ろうとする広義の文化的行動「スポーツ」の世界への可能性が拓かれている。人間は、「からだ」を通して健やかさを獲得するので

はなく、「からだ」からしかそれを学べないのであり、自己目的な楽しさを追求する「からだ」のエネルギーの可能性(人間的生の充実を可能にする「からだ」と結びつく社会的・文化的環境を整えること)でしか、これを実現していく術がないのである。また、この人間の「からだ」は自然そのものであるから、そのエネルギーの発揮の仕方やコントロールは自然環境全般や他者の自然としての「からだ」と調和し、共生する方向をめざすことしか生かされないことになる。QOLを文化的に享受する「からだ」は、決して自然の理(ことわり)から逸脱したり、暴走したりすることはないのである。

サッカーをする「からだ」に代表されるように、スポーツの文化的行為とは、ときには自然を破壊してまで日常生活のなかの「からだ」の利便性を追求することをわざわざやめて、むしろ「不自由なからだ」「困難なからだ」を想定することにその出発点があった。そしてこの行為は、自ら今できる力をコントロールしながらこれを効率よく発揮して、その目標を克服したり、達成したりする自己目的な楽しさを追求する過程そのものである。だから、それはこれまでのように上昇する生活者の「からだ」にとって役立つから行うというスポーツ文化の教育的(体育的)視点からではなく、スポーツが近代文化として成立した文化的視点に立ち返って、実際に下降していく生活者の「からだ」にとっての文化的視点からこそ、(衰える「からだ」の面倒くささを乗り越える)その意味や価値のある楽しさを享受する可能性に拓かれていることになると考えられる。

したがって、人生80年時代を迎えた現在の生活者(大人たち)の責任はきわめて重いかもしれない。なぜなら、「健やかなからだ」や

QOLを文字通り体现する「からだ」をめぐる彼らが指し示す思想としての文化的環境と実践(すなわち、スポーツ環境とスポーツ行動)との関係は、次代の生活者(子どもたち)の生涯スポーツモデルとなっていくであろうから。そこでは、「健やかなからだ」が、病気なのか、病気でないのか、から判断されるのではなく、どのような状態の「からだ」であっても文化的活動としてスポーツする楽しさや喜びを享受できる自己目的的活動のモデルが示されるであろう。そして、加齢による体力の衰えは、むしろこれまでのスポーツ経験の蓄積に加えて、現在の新たな体力状態にフィットしたさらに多くの身体運動経験の可能性に拓かれているという意味で、多様なスポーツ環境とスポーツ行動を実現するチャンスととらえられるだろう。スポーツ(エネルギー)の持つ多様な魅力とは、これまで述べてきた近代スポーツの文化論的視点からみたスポーツをする「からだ」が発揮する自在なエネルギーのコントロールによって拓かれることから、人間の一生涯にわたる魅力として享受されていくと考えられる。

このような生涯を通じた「健やかなからだ」をめぐる文化的価値を体现するスポーツ文化のパラダイム・チェンジは、スポーツを通して生活全般にわたるQOLの向上にも寄与することが望まれる。その原点は、サッカーをする「からだ」の不思議「スポーツ文化の視点、にこそあると考えられるのだから」。

(付記) 本稿は、拙稿(2007)「運動・スポーツの文化的価値と「からだ」中等教育資料、56(7)・20125を新たなアイデアに基づいて大幅に修正・加筆したものである。

スポーツが持つ多様な魅力がQOLを豊かにする

現代のスポーツは、政治、経済、教育、社会… さらに、「人類の未来」の姿まで 考えさせてくれる

— 現代社会におけるスポーツの意義と課題 —

玉木 正之 (たまき まさゆき)

スポーツライター、音楽評論家、小説家、放送作家、1952年京都市生まれ。東京大学教養学部中退。大学在学中から新聞(東京新聞)で演劇・音楽・映画評やコラムなどを執筆。主な著書は、『スポーツ解体新書』(日本放送出版協会)、『ニッポンはどうすれば勝てるのか?』(アスペクト)など。

スポーツ立国を目指した試み

ロンドン・オリンピックが幕を閉じたあと、史上最多38個のメダルを獲得した日本選手たちは、3台のバスに分乗して東京銀座をパレードした。すると約50万人もの人々が沿道を埋め、選手たちに向かって笑顔で手を振り、歓声をあげ、大きな拍手を贈った。

これもまた、現代社会でスポーツが果たしている大きな役割の象徴的な出来事、といえる。国を代表するスポーツマンの活躍は、国民の心を明るくし、「心の健康」に寄与しているのだ。

ただしオリンピックを開催したイギリスでは、さらに大きな役割をスポーツに与えた。「心の健康」だけでなく、スポーツが国民の「身体の健康」にも具体的に影響を及ぼすよう、キャンペーンを開始したのだ。

イギリスのメダリストたちは、大会終了後にテレビやラジオ、さらにツイッターやフェイスブックを通じて、イギリス国民にスポーツへの積極的な参加(スポーツクラブへの加入)を呼びかけた。この運動はイギリス・オリンピック委員会(BOA)が中心になって仕掛けたものだが、モデルになったのはオーストラリアの「スポーツ立国運動」だった。

1976年モントリオール五輪で、金メダルがゼロ(銀1銅4)という惨憺たる結果に終わった

オーストラリアは、2000年のシドニー五輪招致活動を視野に入れ、国立スポーツ研究所を設立。エリート・スポーツマンの育成に力を入れると同時に、青少年や一般国民のスポーツ人口の増加に着手した。

その際、国民への広報活動や国の予算獲得等

の根拠になったのが、「定期的にスポーツ(身体運動)を行う人が10%増加すると、心臓疾患と腰痛の患者が、それぞれ5%減少する」という国立スポーツ研究所の提示したデータだった。そしてスポーツ人口が40%増える(心臓疾患と腰痛患者が20%減少する)場合、保健費や医療費の節約、労働力の増加等で、約23億豪ドル(現在のレートで約2000億円)の

「利益」が生じると試算し、オーストラリアは全国にスポーツクラブを設立。スポーツの裾野を広げ、スポーツ人口を増やすと同時に、五輪選手などのエリート選手を育て、スポーツの頂点を高く築くという「スポーツ立国(スポーツによる国づくり)」を実践した。

国民の心をつなぐ スポーツ

イギリスもロンドン五輪を通じて、そのような国づくりを目指したが、さらに近年急増している移民者たちの暮らす地域に、

オリンピックの諸施設を集中させ、新たに英国籍を取得した移民と、古くからの英国人との間の境界を取り除くことでも、スポーツを大いに利用した。つまり、同じスポーツを見たり、応援したり、実際に行ったりするなかで、移民と英国人の間に横たわる人種、民族、宗教等の違いから生じる垣根が取り払われるよう期待したのだ。

それがどの程度功を奏したか、判定するのは困難だが、ロンドンでのオリンピックやパラリンピックでは、多くの移民選手が活躍。開閉会式でのイベントでもアフリカ系アジア系の人々が大勢登場し、観客席でも同様の光景が見られた。そのことを考えると、移民の多様化で一国家一族ではなくた現代社会において、スポーツは国民の心をつなぐツールとして、一定の役割を果たしたといえそうだ。

そういったスポーツの果たす社会的役割は、かつてスポーツが国威発揚という政治的役割に利用されたこと(たとえば1936年のベルリン五輪でヒトラーの支配するナチスがオリンピックを政治的に利用し、国家宣伝に用いたことなど)とは、まったく正反対の新しいスポーツの社会的役割、ということが出来るだろう。



東京・銀座をパレードするロンドン五輪のメダリストたち(毎日新聞社提供)

小さくないスポーツの市場規模

もちろん最近でも、スポーツ（オリンピック）が国家の国威発揚のために政治利用されるケースはある。が、それ以上に現代社会のスポーツは、経済的な役割が大きくなった。

夏の両オリンピックはもちろん、サッカーのワールドカップ、テニスの四大大会（全英、全仏、全米、全豪オープン）、ゴルフの四大大会（マスターズ、全米プロ、全米・全英オープン）……など、スポーツの世界的ビッグイベントは、巨額のマネーを動かし、国際経済にも影響を及ぼしている。

ヨーロッパ・サッカーやアメリカの四大スポーツ（メジャーリーグ・ベースボールMLB、アメリカン・フットボールNFL、バスケットボールNBA、アイスホッケーNHL）など、欧米のスポーツはそれぞれ大きな市場規模を誇っており、アメリカのGDP（グロス・ドメスティック・スポーツ・プロダクト）は（1995年のデータで）約1520億ドル（約13兆円）。これはアメリカ国内産業別ランキングでは、電器産業（13

Top25 U.S. Industry Ranking (1995 Industry GDP ; billion of \$) Rank Industry Size	
1. Real Estate	850.0
2. Retail trade	639.9
3. Wholesale trade	491.0
4. Health services	443.4
5. Construction	277.6
6. Business services	275.3
7. Depository institutions	223.9
8. Utilities	205.3
9. Other services	194.9
10. Telephone and telegraph communication	155.7
11. Sports	152.0
12. Chemicals and allied products	141.0
13. Electronic and electrical equipment	138.5
14. Industrial machinery and equipment	123.3
15. Insurance carriers	115.4
16. Food and Kindred products	113.3
17. Trucking and warehousing	100.6
18. Legal services	100.5
19. Printing and publishing	89.7
20. Motor vehicles and equipment	88.7

(出所) Sports Marketing Quarterly Volume6・Number4

教育テーマに寄与するスポーツ

このように現代社会におけるスポーツは、社会的にも、政治的にも、経済的にも、決して小さくない役割を担っているのだ。が、さらに忘れてならないことが二つある。

一つは国際オリンピック委員会（IOC）がスポーツの体育（フィジカル・エジュケーション）とし

ての教育的価値に着目し、14歳から18歳のスポーツ選手を対象に第1回ユースオリンピックを2010年シンガポールで開催したことだ。冬の大会も翌々年インスブルック大会から始まり、スポーツを通じた青少年教育を目的とするスポーツ教育プログラムを取り入れた大会として、夏冬ともに4年に1度開催されることになった。

日本では明治時代に欧米から伝播したスポーツは、主に学校教育のなかの体育として発展してきた歴史がある。それなのにユース五輪がメディア等で注目されないのは、学校体育の現場にいまだに体罰が存在することと並んで、残念な言いほかない。学校でのスポーツ教育は、体力の向上や学校対抗の部活動だけでなく、イジメ問題の解消や引きこもりの防止等、多くの新たな教育テーマにも活用できるはずだ。

「人類の未来」とスポーツ

そして最後に取りあげるのは、現代のスポーツが「人類の未来」に対する「考察」を行っているという事実である。いったい未来の社会には、ど

んな人類が登場するのだろうか？

たとえば市川崑監督の残した記録映画『東京オリンピック』を見てほしい。このスポーツ映画の名作には素晴らしい見所が数多くある。が、スポーツマンの身体だけに注目して見ると、約半世紀のうちに人類の身体がかなり大きく変化したことに気付く。

長距離走者のように、さほど今日と変わらない身体もあるが、総じて現在のスポーツマンは男子も女子も筋骨隆々となり、半世紀前のオリンピック選手は、まったく普通の人（スポーツをやっていない人）に見える。

トレーニング方法の開発と進歩、サプリメントなど高栄養の食事の摂取、それにドーピング（？）……によって、約50年を経て人類の身体は大きく変化したのだ。

さらに南アフリカのピストリウス選手のように、両脚義足でオリンピックの（健常者の）陸上球技に出場する選手も現れた。しかもパラリンピックでは、ピストリウス選手に勝つ選手まで現れた。そんなパラリンピックの選手が、もしも世界記録を出したら、それは人類の記録として公認されるべきか……？

また臓器移植者スポーツ大会（心臓や腎臓の

内臓臓器の移植手術を行った人の大会）では、既に100mを10秒台で走る人が出現している。

それは通常のスポーツ大会ではドーピングとして使用が禁止されているステロイド系の薬（筋肉増強剤）が、臓器移植者には移植した臓器に対する拒否反応を抑える必需薬として許可されているから、ともいわれている。もちろん臓器移植手術をした人に、ドーピングだからといって必需薬を禁止することはできない。ならば、その人が、将来世界記録を出せばその記録は……？

それは考えてみれば、メガネをかけた選手が射撃やアーチェリーに出場するのは反則か……という問題と同じだ（現行ルールでは、もちろん反則ではない）。ならば未来の人類は、どんな改造人間（サイボーグ）もしくは人造人間（アンドロイド）になるのか……。

現代社会におけるスポーツは、社会的にも、政治的にも、経済的にも、教育的にも……そして哲学的にも、倫理的にも、人類の未来にまで、多くの影響を及ぼし、問題提起をしてくれているのだ。それほど価値のあるスポーツを、我々がどこまで活用できるか……。それには、我々が必要がありそうだ。

スポーツが持つ「多様な魅力」がQOLを豊かにする

「生活技術」を支える

コーディネーション運動

最近、様々なスポーツや健康運動分野で、コ(オ)ーディネーショントレーニングと称した教室が盛んに行われるようになりました。このコ(オ)ーディネーショントレーニングは、実は、特定のトレーニングを指すのかというと、必ずしもそうではなく、もともとは体力の要素に含まれるものから、敏捷性を高めるトレーニングであったり、スポーツの技術、技能を身につけるトレーニングであったりと、様々な意味で使われています。

諸外国でも、特有の、または一般的な意味で

「coordination」という用語が使われ、学問的分野としても認知科学、工学などでも見受けられます。いずれにしても、コ(オ)ーディネーションという用語は、統合、総合、融合などをイメージできることから、多少なりとも多くの要素を組み合わせるという意味であることには間違いありません。私は、このような広範な意味で使う場合を、コーディネーション(coordination)とし、私自身が実践している理論をコーディネーション(coordination)として使い分けています。本稿では、コーディネーション運動と、

人間の生きる「術(すべ)」との関連について触れることにします。

身体技法と科学をつなぐ コーディネーション理論

コーディネーション理論のことをまとめてみます。その源泉の一つとして、私が注目したのは、20世紀初頭に、ドイツ医学で用いられてい

た概念です。その時代における医学は現代医学に比べると進んでいないのは当然ですが、一方で、思想的には重要な内容が含まれ、人間の運動や身体をどう考えるのかといった点で大変意義深いものがあります。同じころ、医学の分野以外にも、ヨーロッパでは教育学や身体訓練などといった、少なくとも人間に関する多くの領域で優れた身体技法が盛んに提唱されていた時代でもありました。それらの中には、今日でも医療・リハビリ、教育などに大きく貢献している理論があります。注目すべきことは、そのころに提唱された医学、身体技法が、今日の脳科学で、それらの妥当性が実証されつつあることです。私のコーディネーションの発想は、その身体技法と現代の脳・認知・運動の科学の接点から得たものです。

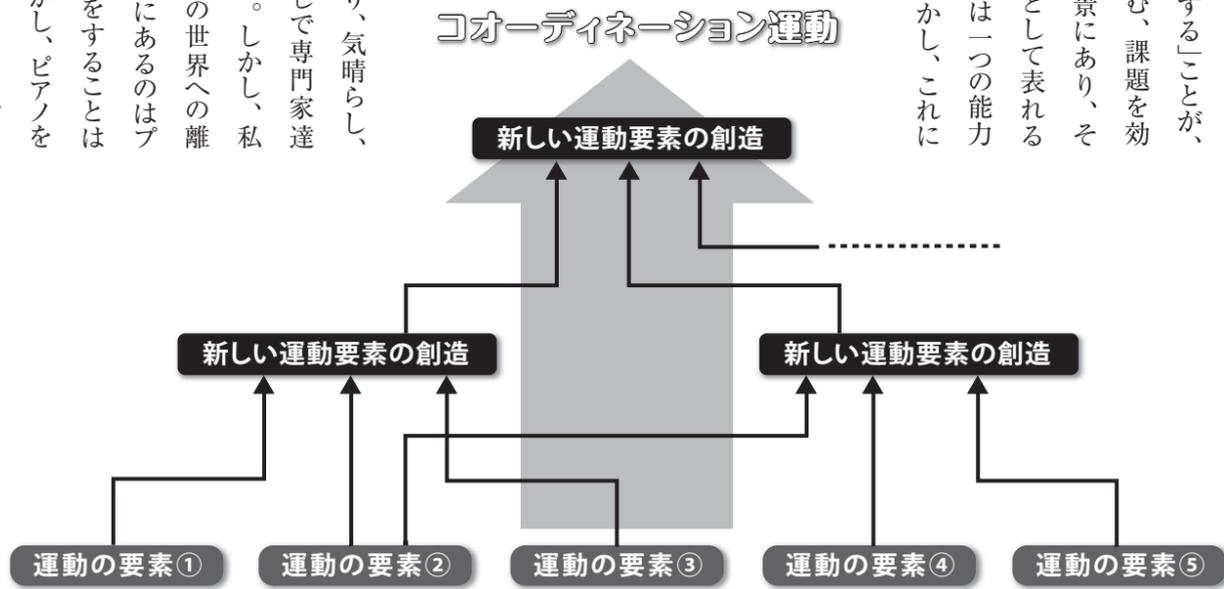
そこで、それらの科学的成果についてですが、重要な知見は脳科学、認知科学において、身体と運動の問題が様々な領域で注目されていることがあげられます。例をあげてみましょう。知性は、運動を制御する脳部位と密接に関係していることがわかってきました。暗算の時さえそうです。コミュニケーションの能力においては、単に言語の問題だけでなく、身体と運動、それ以前に言語そのものの運動学的意味が重要

視されるようになってきました。つまり、身体的な「動き」の前に、「動かそうとする」ことが、状況を判断する、相手の意をくむ、課題を効率よく安全にこなすこと等の背景にあり、それが運動として表れるか、知性として表れるかとの差はあるものの、根本的には一つの能力であるということになります。しかし、これには、一つの大きな前提があります。すなわち、「創造性」の問題です。

スポーツにおける「創造性」の問題

スポーツそのものは、語源

的には「日常性からの離脱」であり、気晴らし、遊びなどを意味するといった感じで専門家達の間では説明されているようです。しかし、私は、日常性からの離脱を、「創造の世界への離脱」と解釈しています。その根幹にあるのはプレイ(play)です。野球、サッカーをすることは弾くこともプレイで、役割を演じることもプレイ



【図1】運動要素を組み合わせるコーディネーション運動

単純な運動要素が組み合わせられて、新しい運動要素が創られる。さらにそれらが組み合わせられて、より高度な運動へと発達する過程がコーディネーション運動となる。同時にこの組み合わせ方も変化する。

荒木 秀夫 (あらき・ひでお)

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授。1952年生まれ。82年筑波大学大学院博士課程体育科学研究科体育科学専攻修了。専門は運動行動制御論。主な著書は、「コーディネーション運動」(健康体力づくり事業財団)など。

イです。遊びもプレイです。そこには、共通した「創造」という行為がみられますが、なぜ、このように人間の活動の中にプレイが多く登場するのかというと、それが、人間の進化の中でたどりつつある道であるからです。

ここでの創造は、既に存在するものから生まれます。つまり、今ある何かを組み合わされて生まれること…。鉄棒にしても、サッカーにしても、ぶら下がること、走ること、蹴ることなど、ざっと見るならば、一つ一つは単純な運動から成り立っています。それらがつながって、組み合わせられて、新しい一つの単位となつて、また新たに高いレベルで組み合わせられて高度な運動となります。やはりコーディネイトされた運動が、新たに高度な運動を「創造」することになるといえます。この過程がコーディネーション運動です(前頁の図1)。

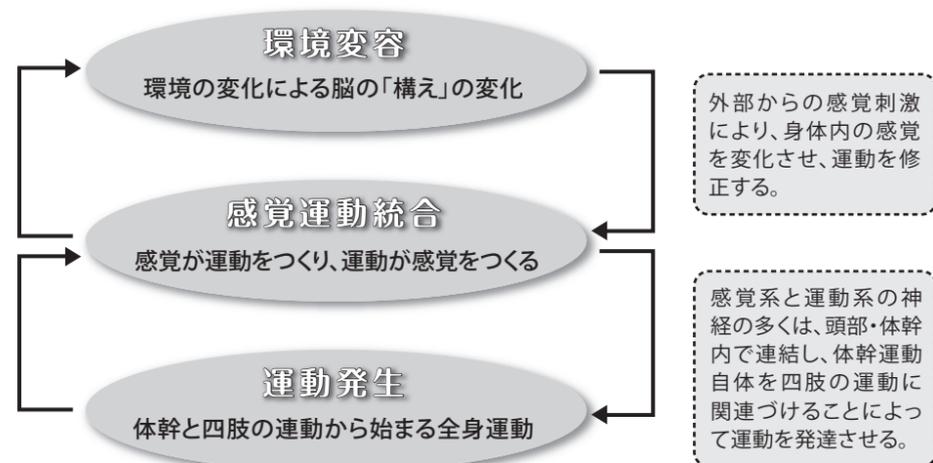
スポーツ実践に生かす コーディネーション トレーニングの3つの視点

コーディネーショントレーニングについてです

重要です。

第二の環境変容の問題ですが、創造的な運動能力、すなわちコーディネーション能力は、受身ではなく、主体的に「何とかしよう」という動機によつて発達していきます。これを促す要因は、環境にあります。とにかく環境に変化を与えることが重要で、トレーニングの場を変え、器具に変化を与える…、こうしたわずかな変化で、脳は、大きく「構え」を変化させます。そして、最後の感覚運動統合の問題ですが、これは、「感覚が運動をつくり、運動が感覚をつくる」ということを意味します。実際には、何かを認知するためのトレーニングでは、動きを伴わせるようにし、ある動きを得ようとするならば、それと関連する感覚刺激を強めることが重要となります。

これらのことが、コーディネーショントレーニングにおいては、共通した視点となりますが、通常のスポーツ競技におけるトレーニングでも、これらの視点を取り入れることによって、柔軟な動きを実現し、創造性豊かな運動を発揮することに繋がっていきます。つまり、スポーツスキルの「コーディネーション化」とも言うべきものです。



【図2】コーディネーショントレーニングにおける3つの視点

体幹を制御する神経系は、運動制御の最も基本となる回路をつくり、体幹運動が起点となって上肢、下肢の空間的な位置や運動速度を調節する。感覚と運動は、相互に密接な神経回路をつくり、相互に統制し合う。このことによって、環境に変化が生じると、感覚系を通じて、新しい運動を創造する。

が、ここでは、様々な運動やスポーツのトレーニングを、よりコーディネーション運動に近づけることを目的としたコーディネーショントレーニングの視点について紹介することにします。コーディネーショントレーニングを行う上で、すべてに共通する視点、すなわち、何に注意を向けてトレーニングを行うべきかについて、3つのことをあげてみます。第一には、運動発生の問題、第二に環境変容の問題、第三に感覚運動統合の問題です。それぞれは非常に複雑な問題を含みますが、ポイントとしていくつか整理して紹介したいと思います(図2)。

第一の運動発生の問題とは、どのような運動であっても体幹に運動の起点を置くということです。簡単にまとめると、いかなる運動においても、体幹、とりわけ肩関節と腰関節、それらをつなげる軸に反応がみられるかどうかということです。トレーニングにおいては、手先、足先に目を奪われずに、体幹の反応を引き起こすトレーニングを前提とすることが

生きる「術」につながる コーディネーション能力

子ども達にとって、例えば、テニスをすべて教わり、水泳もすべて教わる…、こうした教わることの反復に、はたしてどれだけ工夫し、創造する余地があるのかが問題となります。優れた指導者は、この点をしっかりと配慮しています。コーディネーション能力は、創造性をいかに発揮するのかという能力です。現代の生活は、昔と比べれば、大きく変わってきました。数万年の間に、今日ほど環境が急激に変化した時代はなかったでしょう。そんな中でも、人間が生きる上で変わらないものは、生きる上で必要となる「術」です。それを支える人間の脳は、一つの能力を発達させるのではなく、組み合わせる能力を獲得するために進化してきました。そのことが創造力を発揮する土台となります。

先に述べたように、人間の知性、コミュニケーションなどの諸能力に「運動」が関係しているならば、生きる術、すなわち「生活技術(ライフスキル)」は、創造性に満ちたスポーツを通じて

結びにかえて

子ども達には、遊びと同じように、スポーツの中で、工夫したり、何かを考え出したりすることに楽しさを感じて欲しいものです。かけっこで一番になって、まわりから褒められることよりも、走り方をちょっと変えたら、こんなに速く走れたという発見の楽しさが、生きるための「術」につながるでしょう。結局、創造性に満ちたスポーツこそが、一般に言われている体力の向上や健康のためということにとどまらず、人間のあらゆる能力の基礎となる、豊かな生活の「術」と生きる「力」を育むということになります。

動物は、運動ができてスポーツはできません。人間はスポーツができます。しかし、時としてスポーツのつもりでも、動物の運動と変わらなくなる可能性も考えられます。スポーツブームの現代、スポーツをもう一度見直してみたいものです。

スポーツが持つ多様な魅力がQOLを豊かにする

生涯スポーツが人と地域にもたらす 楽しく健康な生活

はじめに

近年、国際的にスポーツの価値が再評価されている。青少年の健全育成や体力の向上だけでなく、スポーツによる地域振興や経済波及効果、健康で活力に満ちた長寿社会の創造、スポーツによる国際貢献や開発支援など、スポーツの社会的、文化的、経済的価値への期待がますます高まっている。このような背景の中、スポーツ界における新たな課題に対応するために、『スポーツ振興法』が50年ぶりに改正され、新たに『スポーツ基本法』が2011年8月24日に

施行された。

2012年3月には、『スポーツ基本法』の理念を具体化し、今後のわが国のスポーツ政策の具体的な方向性を示すものとして、国、地方公共団体及びスポーツ団体等の関係者が一体的になつて施策を推進していくために、『スポーツ基本計画』が策定された。その基本理念は、「年齢や性別、障害等を問わず、広く人々が、関心、適性等に応じてスポーツに参画することができ、スポーツ環境を整備すること」、すなわち生涯スポーツ社会の実現にある。

本稿では、『生涯スポーツが人と地域にもたらす楽しく健康な生活を社会学的視点から考察してみたい。』

生涯スポーツとは？

生涯スポーツは、1988年に当時の文部省体育局に「生涯スポーツ課」が設置されたことにより、その振興が始まったといえる。文部省は、「いつでも、どこでも、誰にでも」というスローガンにより、多様なニュースポーツの普及や生涯スポーツコンベンション、全国スポーツ・レクリエーション祭の開催により、生涯スポーツの理念とプログラムを広げてきた。生涯スポーツの定義に関するコンセンサスはないが、筆者は「幼児期から高齢期に至る各ライフステージにおいて、個人の年齢、

体力、選好にあった運動やスポーツを継続して楽しむこと」(山口1994)と定義した。

生涯スポーツにおいては、「記録や勝敗」といった結果にこだわらず、「プレイや交流」というプロセスを楽しむことが大切である。結果にこだわらず、プレイや仲間との交流を重視することにより、スポーツを継続して楽しむことができる。継続して実施することにより、運動の技術や効果も高まり、健康にも良い影響を及ぼすようになる。楽しみながら継続できたとき、スポーツは生活スタイルの一部になり、初めて生活文化とよばれるようになる。



【図1】生涯スポーツの3条件

図1は、生涯スポーツの3条件を示している。スポーツ活動の中で、楽しさや満足感を体験することがスタートである。これらの研究成果によれば、楽しさや満足感を体験した者は、のちのライフステージにおいても、継続してスポーツを実施する傾向が強いからである。また、継続して実施しなければ、

生理学的な効果や運動学的なスキル向上が得られず、仲間との交流やふれあいもなく、生きがいにならない。このようにして、健康増進、生きがい、ふれあいといった効果を実感することが、フィードバックされ、日常でのスポーツ実施における楽しさにつながっていく。そして、21世紀に入り、スポーツは、運動能力の優れたアスリートや若者だけの活動だけではなく、ライフステージを通して一人ひとりが楽しむことのできる「生涯スポーツ」として認知されるようになった。

するスポーツ、みるスポーツ、 ささえるスポーツ

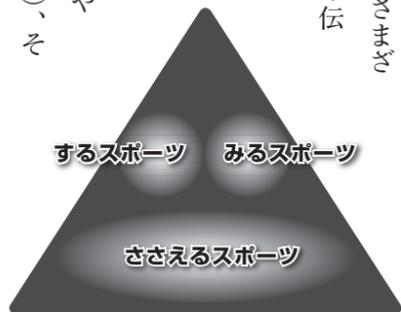
スポーツ基本法の前文において、「スポーツは世界共通の人類の文化である」と明記された。スポーツの持つ多様な魅力は、単に参加するだけでなく、観戦したり、ボランティアとしてイベントをささえたり、その魅力が広がり深まりをみせている。

図2は、スポーツ文化の多様性を示している。「するスポーツ」においては、アスリートやスポーツ愛好者が成文化された競技規則やルールにもとづき、地域におけるスポーツクラブや公共、

民間施設において、さまざまな現代スポーツや伝統スポーツを楽しんでいる。

「みるスポーツ」においては、I F(国際競技連盟)やNF(国内統括組織)、そしてリーグやトップリーグといったスポーツ団体がイベントを組織し、スタジアムやアリーナにおいて、サポーターやファンが観戦し、テレビや映像などのスポーツメディアを通して、多くの人々がダイナミックなスポーツシーンを享受している。

「ささえるスポーツ」においては、スポーツイベントにおけるボランティアが大会の運営をささえている。また、地域における「多世代、多目的、自主運営」という特徴を持つ総合型地域スポーツクラブの運営をボランティアスタッフがささえ、指導場面においても、多くのボランティアコーチが日常の活動をささえている。特に、オリンピックやワールドカップ、そして東京マラソンなどのメガ・スポーツイベントにおいては、もはやスポーツボランティアの存在なしには、運営は不可能であり、イベントの成功もあり得ない。



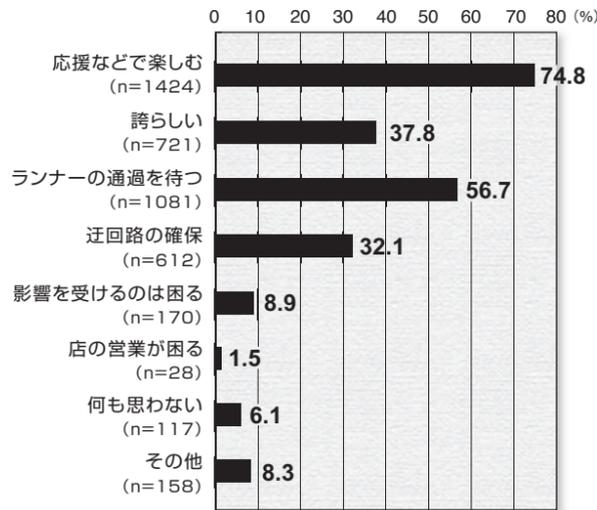
【図2】スポーツ文化の多様性

山口 泰雄 (やまぐち・やすお)

神戸大学大学院人間発達環境学研究所教授、学術博士。専門はスポーツ社会学。1975年東京学芸大学卒業、79年筑波大学体育研究科修了、84年ウオータールー大学院博士課程修了。主な著書は、『生涯スポーツとイベントの社会学』(創文企画)、『健康・スポーツの社会学』(建帛社)など。

開催日時	2011年11月20日 神戸市役所前9時スタート
大会規模	約2万人(マラソン：制限時間7時間、クォーターマラソン制限時間2時間)
大会テーマ	「感謝と友情」震災以降、手を差し伸べて頂いた国内外の人々・地域への感謝の気持ちを表明
神戸マラソンの特色	「ファッション」「グルメ&スイーツ」「ジャズ」「インターナショナル」 「する」：ランナー23,000人 「みる」：沿道応援 52万人(神戸市民の約3分の1) 「ささえる」：ボランティア 6,000人
経済効果	経済効果：59億円(県内のみ) 社会効果：「地域活性化」「ランナーの増加」「地域の誇り」

【表1】第1回神戸マラソン2011の概要



【図3】設問「家の近くがコースになったら？」の答え

市民マラソンによる地域の活性化：神戸マラソンの事例

最近の生涯スポーツの新たな動きとしては、都市型市民マラソンの開催が全国的に広がり、単にランナーとして参加することだけでなく、参加形態が多様化していることがある。すなわち、ランナーとして「するスポーツ」に参加するだけでなく、「みるスポーツ」として、沿道でランナーに声援をおくり、「ささえるスポーツ」として、ボランティアがランナーとイベントをささえている。

都市型市民マラソンの開催は容易ではない。筆者は、第1回神戸マラソン2011の開催に、前身の神戸全日本女子ハーフマラソン大会から関わってきた。そして、基本理念や大会種目、コース等の基本構想をつくるフルマラソン検討委員会の委員長を務めた。同委員会には、陸連関係者だけでなく、行政、経済界、学識経験者、道路利用者代表等、そしてアドバイザーとして県警も含まれていた。道路利用者代表や県警からは、マラソン大会開催による道路渋滞等、批判的な意見が毎回続いた。そこで、神戸マラソンに関する県民・市民意識調査を県民モニター、

市政アドバイザー、HP閲覧者(13100)を対象にして、質問紙調査のかたちで実施、データ分析を行った。

図3は、「家の近くがコースになった場合の考え」を示している。1位は、「応援を楽しむ」で約75%、2位が「ランナーの通過を待つ」で約57%、3位が「誇らしい」で約38%であった。「影響を受けるのは困る」や「店の営業が困る」は、合計して1割程度であった。神戸市民・兵庫県民は、マラソン大会が好きで、誇らしく、応援に出かけるのが4分の3に上った。また、神戸マラソンへの意見・要望を自由記述で聞くと、肯定的な意見が否定的意見をはるかに上回り、「大会開催への激励」「まちおこしになる」「市民参加型にしてほしい」「神戸らしいコース」など、前向きな意見が大半を占めた。この調査結果は、フルマラソン検討委員会において紹介され、神戸マラソンの開催やコース選定の議論の参考資料となり、前向きな議論の契機となった。また、神戸は、1909年に「マラソン大競争」という日本で初めてのマラソン大会を開催しており、地域住民は神戸マラソンの開催を心待ちにしてきたといえよう。



神戸大橋における学生ボランティア



ランナーと沿道の応援

人々・地域への感謝の気持ちを表明している。大会においては、東日本震災の被災地から高校のコーラス部を招待し、神戸市の高校生とスタウト前に美しい歌声を響かせた。また、被災地からの応募者は、抽選なしにエントリーでき、肩の黄色のリボンをして神戸の街を駆け抜けた。神戸マラソンの特色は、神戸・ひょうごの魅力

を反映し、「ファッション」「グルメ&スイーツ」「ジャズ」「インターナショナル」である。第2回神戸マラソン2012では、神戸市内の洋菓子店や食品業界のサポートを受け、フィニッシュ地点で洋菓子やチーズがふるまわれた。開催日の前日と前々日におけるEXPOでは、ライブのジャズが演奏された。

「するスポーツ、みるスポーツ、ささえるスポーツ」の視点からまとめると、第1回神戸マラソンでは、ランナー2万3千人、沿道応援52万人、ボランティア6千人が大会の成功をささえた。マラソンコースの沿道には、神戸市民の約3分の1が全国からのランナーに声援を送った。阪神・淡路大震災から復興した長田では、神戸出身の漫画家である横山光輝ゆかりの「鉄人28号モニュメント」付近で、応援イベントとして「ふれあいフェスティバル」が開催され、ステーキや出店により多くの市民が集まった。

おわりに

1980年代の終わりから広がった生涯スポー

ツは、「誰にも、身近で、手軽にできる運動・スポーツ」として全国の市町村に定着した。また、「するスポーツ」「みるスポーツ」「ささえるスポーツ」として、多様な価値と参加形態を持つスポーツ文化に変容した。

ケーススタディとして取り上げた、神戸マラソンの経済効果は、59億円(県内のみ)と算出された(ひょうご経済研究所2012)。また、第1回(2011年)の問題点や課題をPDCAサイクル(※)により修正し、第2回(2012年)は大幅に運営を改善し、大会開催の成功につながった。第2回には、沿道の応援は55万に、ボランティアも7千500人に増えた。そして、生涯スポーツイベントとしての神戸マラソンの開催は、「地域の活性化」と「地元ランナーの増加」、そして「神戸市民・ひょうご県民の誇り」になった。

(※)計画(plan)、実行(do)、評価(check)、改善(aci)のプロセスを順に行うマネジメントサイクル。

参考文献

- 一般社団法人ひょうご経済研究所「第2回神戸マラソン 経済波及効果を高めるための提言」(2012)
- 神戸大学生涯スポーツ研究室「ひょうご神戸マラソンに関する県民市民の意識調査」報告書(2010)
- 山口泰雄「生涯スポーツの基本的考え方①スポーツと健康」25(4)：72-75(1994)

スポーツが持つ多様な魅力がQOLを豊かにする

祭的要素を持つスポーツイベントの 社会・経済的効果

八木 匡 (やぎ ただし)

同志社大学経済学部教授、経済学博士。
1959年愛知県生まれ。名古屋大学大学院経済学研究科博士課程修了。京都大学経済研究所助手、名古屋大学経済学部助教授を経て現職。専門は公共経済学、スポーツ経済学、文化経済学、教育経済学。主な著書は、『スポーツの経済と政策』（共著、見洋書房）など。

祭の本質

2011年10月から12年3月まで放映されたNHK朝の連続ドラマ「カーネーション」のクライマックスは、病院で開催されたファッションショーの場面といえよう。がんを宣告されて生きる希望を失った女性が、ファッションショーで自らの輝いた姿を、家族を含めた多くの人々に示すことにより、生きることの喜びを思い出し、奇跡的に病気が回復し、幸福な生活を取り戻すというエピソードは非常に示唆的である。

カーネーションの舞台となった岸和田は「だんじり祭」で有名であり、ドラマの中でも祭は主人公の精神的支柱として描かれている。祭の日には、主人公の家の前を何百人という男たちによつて曳かれただんじりが疾走していく映像が昂揚感を持って映し出され、祭が地域社会の絆をもたらし、郷土愛を醸成していることが伝わってくる。

カーネーションで描かれたファッションショーとだんじり祭は、12年の夏に開催されたロンドンパラリンピックとロンドンオリンピックとも多くの共通性を有している。パラリンピックは、障害を持つ

て生きる人々に生きることの素晴らしさと喜びを与えるとともに、障害の有無を超えて感動の共有をもたらすものである。そして、オリンピックは「最も早く、最も高く、最も強く」をスローガンに、人間の知的・肉体的能力の究極の姿を示す昂揚感溢れる祝祭となっている。カーネーションで描かれた世界とパラリンピックおよびオリンピックとの差異は、ローカルとグローバルとの差異にあるといつて良いであろう。ローカルとグローバルとの間で優劣を付けることは適切とはいえず、それぞれの特質を理解することが必要となる。ローカルは、宗教を含めた固有文

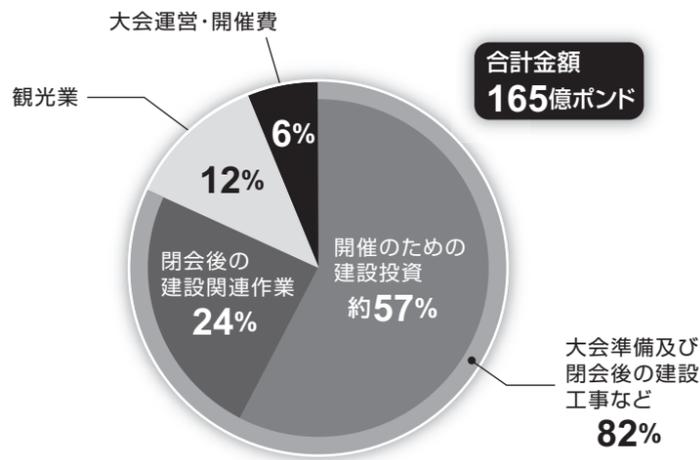
化および生活そのものとの密接な関係性から価値が生まれ、グローバルは人類共通の価値観と普遍性において大きな価値をもたらすといえよう。

オリンピックおよびパラリンピックは、宗教的差異とか文化的差異を乗り越え、スポーツという普遍的な共通の舞台において究極の人間の能力を競い合うことを通じて、世界の人々が感動と価値観を共有し、絆をもたらす祝祭的な意義を本質的に有しているといえよう。

に165億ポンド(約2兆円)の経済効果が新たに生み出されるとされている(※1)。そのうちの約57%が開催のための建設投資に付随し、閉会後の建設関連作業が24%、五輪に絡んだ観光業が12%、大会運営・開催費が6%を占める(図1)。英国全体での雇用増大が6万2200人と予想され、波及効果は英国全体に及ぶとされている。また、観光客は1000万人以上増加し、17年末までに、観光業は20億ポ

スポーツビッグイベントの 経済的価値と社会的価値

オリンピック、パラリンピック、ワールドカップといったスポーツビッグイベントが長期間にわたって持続可能であるためには、イベント開催の収益性がある程度確保されている必要がある。2012年7月上旬に発表された、ロイズ・バンキング・グループによる調査報告書「ロンドン2012の経済効果ーオリンピックとパラリンピック」によると、05年から17年までの12年間



【図1】英国におけるロンドン五輪の経済効果

(出所) The Economic Impact of the London 2012 by Oxford Economics

下の国内総生産(GDP)を生み出すとしている。そのうちの48%が閉会後での効果と推計されている点は注目される。五輪を直接目的とした海外からの旅行者は約120万人と推計しており、17年までに五輪がらみで訪英する人が約1080万人増えると予想している。

直接的な経済効果に加えて、オリンピック開催によつて、広大な自然公園となるオリンピック・パークが建設され、閉会後はオリンピック・ビレッジ内に3000戸前後の低価格の住宅ができる予定となっている。これらは、環境改善効果と所得再分配効果を有しており、犯罪発生リスク軽減にも寄与すると予想されている。また、五輪の開催経費は、最終的には予算内の92億9800万ポンドに収まることになり、中央政府が62億4800万ポンド、ロンドン市が8億7500万ポンド、宝くじで21億7500万ポンドとなっている。経済効果が165億ポンドであれば、五輪開催の経済的妥当性は存在しているかと判断できよう。

これらの数値に対しては、楽観的過ぎるという批判と、開催期間中の交通規制、結婚式場等の非関連産業への打撃といった負の効果も指摘されており、メディアによつて五輪開催の経済



東京ゲートブリッジ完成記念スポーツフェスタ(2012年2月4、5日)の様子
(写真: shugo TAKEMI / TOKYO2020)

効果に対する評価は定まっていない。したがって、ロンドン五輪を例として、東京五輪の開催の是非を単純に判断することについては慎重になる必要がある。むしろ、ロンドン五輪の経済波及のプロセスを詳細に検証し、閉会後の経済効果の持続性と財政負担への影響のシミュレーションを厳密に行う必要がある。

経済波及効果のプロセスの中でも、特に注目して精査する必要がある項目は、①地域経済の底上げ効果と国民経済全般の底上げ効果、②産業構造変化への影響と人材育成効果、③インフラ整備による生産性向上効果と生活の質向上効果、④社会構造への影響効果である。

地域経済の底上げ効果と国民経済全般の底上げ効果は、ある意味でトレードオフの関係にある。土木・建設投資の発注先を何割地域外に割り振り、何割を地域内に発注するかを決定するかは、直接的な投資効果の波及プロセスに決定的な影響を持つ。また、閉会後の経済効果の持続性は、五輪開催を契機に、企業および地域経済の競争力がどのように変化したかを評価することによって判断できよう。東京五輪の開催を考えたときに第1次発注先を都内の企業に発注するのか、他道府県に発注するか

地域名	全体に占める割合(%)
ロンドン	41
イングランド南東部	9
イングランド北東部	7
イングランド東部	6
スコットランド	6
ウェスト・ミッドランズ	6
ヨークシャー・アンド・ザ・ハンバー	6
イングランド南西部	6
イースト・ミッドランズ	5
その他の地域	8

【表1】経済効果の恩恵を受ける地域

(期間:2005年~2017年)
(出所)The Economic Impact of the London 2012 by Oxford Economics

を政策的にコントロールすることは、それほど容易ではない。特に技術力等の面で競争力のある大企業が、東京都内に集中していることを考えると、中小企業への業務発注は、下請けとして、元請け企業からの発注となり、利益率に大きな差が生まれることが予想される。そのため、東京都での五輪開催による経済効果は、関東圏以外には波及しにくい可能性がある。もちろん、部品供給におけるサプライチェーンが関東圏以外で構築されていることから、関東圏以外への波及効果が存在していると考えられるが、建設、

観光、広告、印刷、出版といった主要五輪関連産業での関東圏外への波及効果は限定的となる可能性が高いといえよう。したがって、関東圏外への経済効果の波及を高めるような政策策定が必要となる。

五輪開催による産業構造の変化は、建設業の成長、スポーツ関連産業の成長、観光業およびイベントプロデュース等のサービス産業の成長といった要因によって生じると予想される。これらの産業が、閉会後に供給過剰になるのか、市場の拡大を伴いながら持続的発展に繋がるのかは、質的向上と効率性の向上が五輪開催までの期間に如何に進められるかに依存すると考えられる。五輪開催による需要増と収益構造の改善の好機において、企業が長期的な競争力改善のための戦略的な投資を行うことができるかが重要となる。戦略的な投資は、五輪開催による知名度の向上とブランド価値の上昇を活用したものである必要がある。グローバルな市場開拓まで視野に入れたものである必要がある。戦略的投資が有効に機能することにより、閉会後の経済効果の持続が可能となり、経済の底上げが可能となる。

五輪開催に伴うインフラ整備が、長期的な生活環境の改善と生活の質の質的改善に繋がるためには、五輪のコンセプト設計の段階からこの点を十分に考慮したものとなつていく必要がある。ここでも、短期的なコストと長期的な便益がトレードオフの関係性を有する可能性がある。長期的な生活環境の改善をもたらすインフラ整備のためには、短期的には追加的費用がかかるため、五輪開催の財政収支を悪化させる可能性もある。パラリンピック開催に伴うユニバーサルデザインの普及等は、社会的弱者の包摂(※2)といった長期的な社会構造の改善をもたらすことが期待されるものの、費用の増大が不可避となる。

生活環境の改善と生活の質の質的改善に繋がるためには、五輪のコンセプト設計の段階からこの点を十分に考慮したものとなつていく必要がある。ここでも、短期的なコストと長期的な便益がトレードオフの関係性を有する可能性がある。長期的な生活環境の改善をもたらすインフラ整備のためには、短期的には追加的費用がかかるため、五輪開催の財政収支を悪化させる可能性もある。パラリンピック開催に伴うユニバーサルデザインの普及等は、社会的弱者の包摂(※2)といった長期的な社会構造の改善をもたらすことが期待されるものの、費用の増大が不可避となる。

長期的な生活の質の改善と社会構造の改善のための費用増大を賄うためには、五輪の質を高めることが最も有効な手段となる。この質的向上の本質は、冒頭に述べたように、五輪という普遍的な共通の舞台において、世界の人々が感動と価値観を共有し、絆をもたらす祝祭的な意義を明確に体現できるかにある。人々が感動を共有でき、希有な経験を得ることができれば、必然的に開催国の国家ブランドは向上し、長期にわたつて経済効果は持続していくことになる。このことにより、五輪開催に伴う政府財政負担は軽減され、五輪はさらなる発展に向けて進むこととなるのである。

(※1) Oxford Economics commissioned by Lloyds Banking Group (2012), The Economic Impact of the London 2012 - Olympic & Paralympic Games -

(※2) 社会的包摂(Social Inclusion)は、いろいろな生活困難を抱えた人間を社会的に排除しないで、社会的に包み込むという考え方。

現代社会における女性とスポーツ

小笠原 悦子

(おがさわら・えつこ)

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科教授。専門はスポーツマネジメント、女性スポーツ。主な著書は、『スポーツマネジメント』(大修館書店)など。

新しいマーケットとしての女性スポーツ

2012年12月8・9日、第5回日本スポーツマネジメント学会が仙台で開催された。学会では、「なでしこジャパン」代表戦における観戦者調査の結果が発表された。これまで、Jリーグを長年研究してきた男性研究者たちが、「なでしこジャパン」という女性スポーツの象徴的なテーマを取り上げ、初めて発表を行った

だけに、新しい風を感じた。

また、地元仙台では2012年のJ1で2位となった「ベガルタ仙台」に、同年から「ベガルタ仙台レディース」が設立された。そしてトップリーグの「なでしこリーグ」の低位組織である「チャレンジリーグ」からスタートし、優勝、2年目から「なでしこリーグ」への昇格を決めた。当学会のシンポジストとして発表したベガルタ仙台の白幡洋一社長は、「ベガルタ仙台レディース」の存在はチーム経営にとっては、女性スポーツの振興というよりも、むしろ新しいマーケットの拡大であるとの認識を明らかにした。

文部科学省の新たな女性スポーツ支援のための施策

2011年の「なでしこジャパン」のFIFA女子ワールドカップ優勝を契機とし、その後の社会現象から、結果的に日本の潜在的なマーケット(まだ未開発のスポーツにおける女性)に気づくこととなったと思われる。

文部科学省は、2012年3月に「スポーツ基

本計画」を発表した。この基本計画には、女性とスポーツに関する記載が明確に盛り込まれている。「オリンピック競技大会において、女性が参加できる競技数(メダル数)が増加しており、特に、近年の夏季大会で我が国の女性アスリートのメダル獲得率は男性アスリートより高い。こうした分野における競技力の向上は、重要な課題となってきたが、女性アスリートに対する効果的な支援のあり方についてはいまだ研究・開発の途上にある」(文部科学省、2012)という記載がある。このような背景の中で、2011年から文部科学省は、トップアスリートの中でも女性アスリートに特化し、「女性アスリート戦略的強化支援方策の調査研究」を委託事業として開始した。2012年は2年目を迎え、順天堂大学が委託を受け実施している(<http://www.juntendo.ac.jp/athletes/index.html>)。

その調査研究の中で明らかとなった事実に基づき、現代における女性スポーツのあり方を、女性アスリートに着目し、彼らが直面する課題について以下に述べてみたい。

女性アスリートの直面しやすい3つの課題

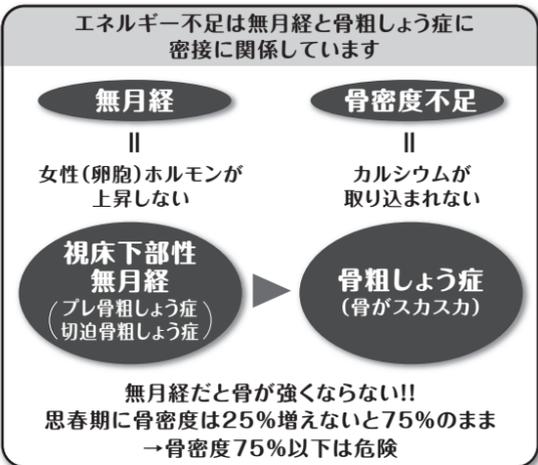
女性アスリートが直面しやすい課題は3つに絞られる。ひとつ目は身体・生理的課題、次は心理・社会的課題、そして最後は組織・環境的課題である。

1 身体・生理的な課題

女性と男性アスリートの違いは、女性アスリートに月経があるということである。しかしながら、男性コーチには、女性アスリートを「小さな男性アスリート」ととらえてしまっている困った人たちが存在する。女性アスリートは、アスリートである前に、「女性」なのである。

月経があることはエネルギーが蓄積されている証拠

無月経はエネルギー不足を意味する!



【図1】

(出所) 松田(2012)「女性アスリートのヘルスコントロール」p.5 より抜粋

この月経のメカニズムを理解するためには、西別府病院の松田貴雄医師の作成されているガイドブックが大変分かり易い。以下に抜粋して紹介する。

松田氏によれば、月経がないままスポーツを続けると、いろいろなスポーツ障害が起こりやすくなる。3カ月以上月経のない状態を「無月経」というが、この状態は「エネルギーの蓄積システム」ができていないと言い換えられるという。無月経はエネルギー不足を意味する。

月経はエネルギー蓄積システムが準備完了し、エネルギーが蓄積されている証であるという。逆説的には、無月経はエネルギー不足を意味する。エネルギー不足になると体脂肪が減少する。体脂肪が減少するとレプチン分泌が低下。レプチンが低下するとエネルギー消費を抑えるとともに、脳の視床下部に働き、排卵を止めるという。これが無月経だそうだ。

体脂肪が減少してレプチンが低下すると骨にも作用して骨密度が低下する。エネルギー不足が始まるとレプチンの分泌が低下するので、エネルギー不足と体重減少を避けなければならぬ。無月経は既に骨に影響が出始めているサインなので、「骨粗しょう症」であるという(前頁・図1)。

② 女性アスリートに起こりやすい障害

女性アスリートに起こりやすい障害は、膝前十字靭帯損傷と疲労骨折である。この2つの障害が最も多いのは16歳であるとされ、前述の松田氏によれば、靭帯や骨の強さが十分にえられないまま筋力のみが強くなるのが、この原因のひとつだという。そのためにも、骨をつくる時

期、靭帯の柔軟性を必要とする時期(月経開始前後)が重要で、さらに、この障害の予防のためにも、無月経にならないように注意を促している。様々な視点で、月経開始(初経開始)前後が、長期にわたり競技生活をする上で大変重要であることを松田氏は強調している。

2 心理・社会的な課題

次に、女性アスリートの心理・社会的な課題としては、女性アスリートの心理特性、指導者の指導方法、結婚・妊娠・出産・育児・家事等のライフイベントと競技生活の両立、そして引退後の進路について述べたい。

女性アスリートは男性アスリートとは異なった興味や関心が存在する。したがって、アスリートの性差を考慮した上での指導が自ずと必要になる。女性アスリートが小さな男性アスリートではないという理由はここにも存在する。

順天堂大学のプロジェクトの調査によれば、女性アスリートが肩にけがをした際に、「男性のコーチに、肩にテーピングをしてもらう時に大変恥ずかしい思いをした」と述べた元選手のコメント

トがある。女性アスリートの気持ちも考慮していない指導者の対応の例である。

次に、2012年ロンドン五輪でも結婚・出産後の選手が走り高跳びで金メダルを獲得した。日本でも、田村亮子選手が結婚して谷亮子として金メダルを獲得し、次に出産して「ママでも金(メダル)」を目指したが叶わなかった。まだ日本では、女性アスリートが競技か結婚、あるいは競技か育児の二者択一を結果的には迫られる社会的状況である。しかしながら、海外の選手強化の動向から、結婚、妊娠、出産、そして子育て期の女性アスリートをどうサポートすべきかという視点が注目されつつある。

最後に、女性アスリートの引退後の進路であるが、現状としては指導者的な立場に立つ女性の比率は20%を切っている。また、スポーツ組織の役員(意志決定者)の女性の比率は4%と、国際オリンピック委員会(IOC)が提唱する数字である20%を大きく下回っている(順天堂大学、2012)。

一方、ロンドンオリンピック大会に参加した女

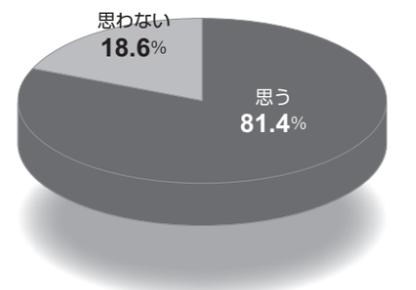
子選手の調査(JOC女性スポーツ専門部会、2012)では、回答した参加選手の41・3%が引退後に指導者になることを望んでいることが明らかとなり、潜在的な女性の指導者へのニーズを確認することができた(図3)。

3 組織・環境的な課題

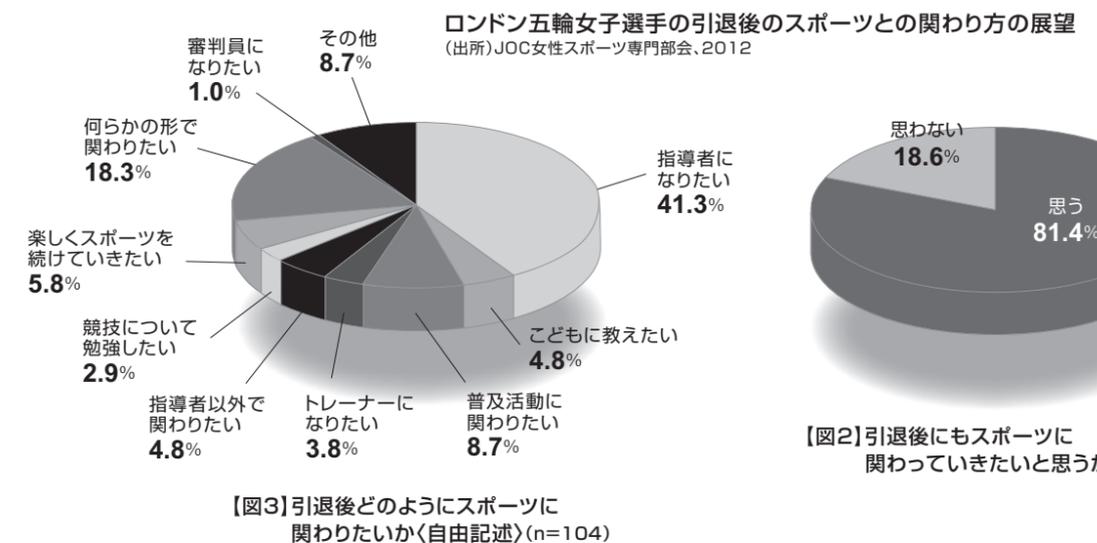
前述したように、スポーツ組織には女性アスリートの身体・生理的および心理・社会的な課題が存在することが明らかである。そして、その課題に加えて、女性アスリートを取り巻く組織・環境的な課題も存在する。

まずは、女性リーダーの不足が挙げられる。

女性アスリートには指導者になりたいという要望が存在するにもかかわらず、その女性たちが実際には指導者的な立場(コーチや役員)に就いていない。まず、その原因として、女性コーチのコーチ業とライフイベント(結婚、出産、育児)との両立の難しさが挙げられる。すなわち、子育て中の女性コーチのための託児機能を含む環境が整っていないことが原因である。スポーツ組



【図2】引退後もスポーツに関わっていきたくと思うか(n=129)



【図3】引退後どのようにスポーツに関わりたいか(自由記述)(n=104)

織の強化部長からも「トレーニングをする場所に託児所を完備する等、子供がいても安心してコーチングできる環境への要望」が出された(順天堂大学、2012)。

女性スポーツの発展には、イノベーション(新しい価値の創造)が必要である。現存せず見たいものがないものにはあるが、もし実現すれば素晴らしいと思えるような新たな価値を創造し、それを必要と思われる人々へ提供することである。

公開競技としてはあるが2013年度から高校総体に女子レスリングが採用されることになった。需要があるから採用したのではない。女子レスリングという競技種目の国際大会での活躍を背景に、新たにこの種目を採用し、女子レスリングの今後の普及を狙ったものと思われる。競技大会の開催によって、女子の競技人口の増加を促す動きは、2016年のリオ五輪から採用されることとなった女子ラグビーも同様である。

全ての女性が最大限に関わることでできるスポーツ文化を実現すること、これが我々女性スポーツを推進する者たちのゴールである。



最後に、本格的な400mトラックを使い、100m×4のバトンリレーを2レース。子どもたちの小刻みな足音がトラックに響く



NOBYは、朝原さんが所属する大阪ガス㈱の西宮市・今津総合グラウンドを拠点として運営されている。小学校4～6年生を対象にした普及コースのほか、15歳以上の専門コース、一般コースなどがある



NOBYのプログラムでは、コーディネーショントレーニング^(※)などの最先端の理論を取り入れた身体の動きづくりやライフスキル(生きる力)の育成などが目指されている
 ※「協応性」(動きをうまくこなす能力)を向上させるトレーニング法。バランスやリズム感覚など「身体能力の巧みさ」に加え、「身体と脳を同時に鍛える」ことで、個人が持つ運動能力や知的能力の総合的な向上を目指す



朝原さんを中心に、全国トップクラスのアスリートたちがコーチを務める

NOBY T&F CLUB
問い合わせ先

〒663-8225 西宮市今津西浜町 1-1
TEL.06-6261-5034
<http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/noby/index.html>

子どもたちは体育館中を走り回り、のびのびと元気に身体を動かし続ける



自分の身体の使い方を学び、「スピード」と「人間力」を培う

NOBY T&F CLUB

〔兵庫県西宮市〕



NOBY運営に携わる朝原宣治さんと石井智さん(右)

感性を高めることから始まる ライフスキル(生きる力)向上を目指す

音楽に合わせて、のびのび手足を広げ、リズムカルに体を動かす子どもたち。真剣な表情のなか、時に笑顔が弾ける。「とにかく楽しく運動してほしい。ここは陸上競技のクラブですが、子どもたちには速く走る技術やフォームなどは教えません。大切なのは、自分自身の身体の使い方を身につけること」。笑顔でこう語るのは、元陸上競技選手で北京五輪400mリレー銅メダリストの朝原宣治さん。体育館で元気に動き回る子どもたちは、彼が主宰する「NOBY T&F CLUB(以下NOBY・ノビー)」のスクール生たちだ。同クラブは、彼が所属する大阪ガス㈱の社会貢献事業の一環として、西宮市にある同社・今津総合グラウンドで運営されている。

この日、約50人の子どもたちに付いていたコーチは朝原さんのほかに数人。日本チャンピオンと全国トップクラスの現役アスリートもいる。順にメインの指導者を入れ替わりながら、自らも身体を動かし、子どもたちに絶えず目を配る。

体育館で、バランスをとる体操や音楽を使った動き、ボールを使った運動などを続けた後は全員で外へ。コースの一部を使い、今度は順にスラロームなどを繰り返す。

これは、子どもが身体の基本的な使い方を身につけられるように組み立てられたNOBY独自のプログラムだ。

「どうやって走るかは、結局は自分で感じて、見つけるものです。だから、そのための意識づけをして、自身の感性を高めていくことが何より大切」と言う朝原さんは、さらに「子どもたちが身体の動きを通して自分で感じる。ことから、もっと普遍的な、人間にとってこうあるべきという方向を自然に身につけられるように手助けしたい」と語る。

朝原さんとともにNOBYの運営に関わる大阪ガス㈱の石井智さんはこう説明する。

「彼が求めているのは、いわば子どもたちの『人間力』を培うことです。運動能力はもちろんそれぞれに異なりますが、自分の身体を使いこなす力やライフスキル(生きる力)を養うことが大切だと思います」

こうした考えから、NOBYはより総合的な取り組みを視野に入れており、西宮市や地元の大学、NPOとも協力して子どもの自然体験イベントや食育講座を開催するなど、地域での連携の輪を様々なかたちで広げている。

「地域とともに次世代を育てていこう」というのが目標です。もちろん、将来このクラブの子どもの中からトップアスリートが生まれてくれば何よりもうれしい。同時に、若いコーチやアスリートから次の指導者が育ってくるような好循環を生み出していきたいですね」と石井さん。

地域でスポーツの裾野を広げることが社会貢献になり、トップアスリート育成にもつながる。さらには、アスリートたちのキャリアを生かす場づくりにもなるだろう。新しい仕組みづくりを視野に入れた、NOBYの今後の展開に期待が広がる。

(文責・CEL編集部)

CEL

バスケットボール文化を盛り上げて 被災地復興と町おこし

花道プロジェクト [岩手県大槌町]

バスケットボールを通じて町を再生するための地元発のイベントとして2012年5月に開催された「第一回 桜木杯」。少人数で参加できる3on3形式、年齢や性別不問のオープン・エントリー制にしたことも盛り上がる要因となった



プロジェクト発起人のひとり、矢野アキ子さん。広島県福山で食品会社に勤める。被災地支援ボランティアとして大槌町に入ったのを契機に、若い世代を引きつける町おこしの必要性を痛感したという

大槌町に新名所「桜木の花道」を作ろう、というアイデアが生まれた桜木町地区。2013年中に、同地区の裏山に整備される避難道に苗木を植える予定

大槌高校体育館で高校生チームと練習試合をする「JOINT」メンバー。「桜木杯」後は近隣の社会人チームだけでなく、高校や中学のバスケット部員や小学生との交流も活発化している



「JOINT」創始メンバーのひとり、河合秀保さん(上)。大槌町で鮮魚店を営む

プロジェクトメンバーの大半を構成する、大槌町の社会人バスケットボールチーム「JOINT」の皆さん。下は高校生から上は30代後半まで年齢や性別、職業、バスケ経験もさまざま



15年来続く「JOINT」の創始者であり、現在もチームのまとめ役を務める中村晃一さん(36)

「花道プロジェクト」
問い合わせ先

<http://www.hanamichi.info>
info@hanamichi.info

- (※1) 3人で1チームを編成して、通常のコートの手前を
使うバスケットボールのゲーム形式。
- (※2) 漫画「スラムダンク」(作・井上雄彦)に登場する
主人公「桜木花道」にちなむ。



城山体育館から見下ろした大槌町中心部。東日本大震災による津波と直後に起こった火災により、多くの人命や町並み、産業基盤が失われた。今もわずかな廃墟を残し、土台がむき出しのまま



人気漫画をモチーフに草の根地域振興 全国から若者とバスケットファンが集まる町に

リズムカルな音楽が流れるなか、澁刺とコートを駆け回る選手たち。湧き起こる拍手と歓声——東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県大槌町。被災した町を一望する丘の上にある城山体育館で2012年5月20日、地元高校生や社会人、警察官、消防署員、ボランティア団体を含む15チーム、総勢約80名で3on3ルール^(※1)のバスケットボール大会「桜木杯」が開催された。運営に当たったのは、大槌町在住者と町外の有志からなる「花道プロジェクト」の面々だ。

「バスケットボールを通じて、大槌を人が集まる元気な町にする」のがプロジェクトの主目的である。発起人のひとり、矢野アキさんは震災から数カ月後、広島県から大槌町に入ってボランティアに参加。「桜木町」という地区で家屋整理の作業中「桜の花道を作れば、観光の名所になるのでは」と思い立つ。人気バスケットボール漫画の主人公名から連想したアイデアだった^(※2)。同じくボランティア仲間、映像系の仕事に携わる河谷秀行さんに相談するとすぐに意気投合。全国のバスケットファンが集うような仕組みをつくり、桜とバスケットを活性化しよう、と構想が膨らんだ。

その内容をチラシにまとめて町内で告知すると、地元の社会人バスケットチーム「JOINT」の年長メンバー、河合秀保さんの賛同を得た。こうして2011年11月、「JOINT」有志を主体に「花道プロジェクト」チームを結成。だがメンバーの多くは被災者であり、日々の生活に追われ思うように事が進まない。そこで「とりあえず何か始めよう！」と矢野さんから町外のメンバーが先導して開催に漕ぎ着けたのが2012年5月の「桜木杯」だった。

「みんなに『楽しかった』と言っていただけたのが何よりうれしかったですし、自分自身も久々にバスケットを心から楽しめました」と話すのは、河合さんと同窓生で「JOINT」代表の中村晃一さん。同町では震災後、数々の追悼・復興イベントが行われたが、純粋にスポーツを楽しむイベントはなかっただけに喜びもひとしおだったという。大会終了後、参加選手や観客、裏方で協力してもらった地元の人々から「来年以降もやろう」と自然に声が上がった。

ただし「桜木杯」は告知期間が短かったこともあり、参加できなかったバスケット愛好者や学生も多く、「来年まで待てない」という声が多く寄せられた。そこで半年後の2012年10月に「仙道カップ」と称する大会を開催。前回は上回る19チームがエントリーし、とりわけ町外から多くの参加があり、当初の目的である「バスケットで大槌に人を呼ぶ」ことにもつながった。

一方、桜木町に「桜並木をつくる」計画については2013年中に、同地区の裏山にある避難道に苗木を植える予定で進んでいる。並行して「バスケット町おこし」の一環で進めているのが、バスケットボールの屋外コート建設だ。用地については、今後整備されるであろう運動公園や緑地広場等の敷地内に、スペースの確保ができるか行政と協議している。敷設工事などで約1千万円の資金が必要で、各方面に募金を呼びかけている。課題は山積みだが徐々に賛同者も増え、地域を越えてつながる動きも広がりつつある。

「10年後に桜の花道で酒を呑もう！」を合言葉に、プロジェクトメンバーたちは一歩一歩着実に、夢をたくり寄せようとしている。

神戸市シルバーカレッジ
問い合わせ先

神戸市北区山田町下谷上字中一里山14-1
しあわせの村内
TEL.078-743-8100
http://www.ksc-net.jp/

神戸市北区の総合福祉公園「しあわせの村」内にある3年制の高齢者の生涯学習施設「神戸市シルバーカレッジ」。3学年で約1200名の学生たちが学習活動やクラブ活動、ボランティア活動に取り組んでいる



「シニア世代の皆さんが生涯学習や生涯スポーツを楽しみ、お互いの交流を深めることで、第三の人生を豊かなものにしていただきたい。卒業時の方が元気になったという人も多いですよ」と話すシルバーカレッジ事務局マネージャー、中山喜統さん



シニア世代が生涯スポーツを通じて地域のスポーツ・コミュニティを形成

神戸市シルバーカレッジ

[兵庫県神戸市]

生涯学習の一環としてスポーツに親しみ「再び学んで他のために」を実践する

神戸市の中心地、三宮から車で北へ30分足らずの場所に広がる総合福祉公園「しあわせの村」。200ヘクタールに及ぶ広大な緑豊かな敷地の一面に「神戸市シルバーカレッジ」がある。高齢者の経験や知識、技能を高めて、その成果を社会に還元することをめざす学びの場として、神戸市が1993(平成5)年に開校した3年制の生涯学習施設だ。「57歳以上の神戸市民ならどなたでも入学できますが、地域活動やボランティア活動に理解と熱意を持つ方、というのが求める学生像です」と説明するのは、シルバーカレッジ事務局の中山喜統カレッジマネージャー。同校では「健康福祉」「国際交流・協力」「生活環境」「総合芸術」の4つの専門課程と共通課程があり、後者では一般教養的な授業や、学びの一環としてスポーツを通じた健康づくりの授業が行われている。

「学年共通のスポーツ授業では、健康の重要性について再認識していただく講座のほか、誰もが、いつでも、どこでも気軽に参加できる生涯スポーツの楽しみ方を学んでもらっています」

そのひとつ、ダーツの授業を見学した。受講していたのは、国際交流・協力コース3年生のクラス。インストラクターから競技やルールについて説明を受けた後、グループに分かれて実技が始まると、あちこちで歓声が上がりと和やかな雰囲気包まれた。競技というよりもレクリエーションに近い印象だ。

「生涯スポーツの指導では『楽しい』と感じていただくことを主眼に置いています。実際に教えていると、たんに楽しみだけではなく、新しいことを習得したいという、学びの意欲が強い方が多くおられるのを感じます」と話すのは、インストラクターを務める甲南女子大学非常勤講師の谷めぐみさん。

このほか生涯スポーツとしては、ペタンクやローンボウルス、スカイクロス、太極拳などの授業が行われているが、いわゆる「ニュースポーツ」が多いのは、軽度な体力負荷で気軽に行える、という理由の他にも、高齢者が新鮮な気持ちで取り組めるという点も考慮されているようだ。

課外活動でもスポーツは活発で現在、20近い数の体育系クラブが活動している。卒業後も熱心に続ける人も多い。たとえば同校のダーツクラブOBが中心となって日本ダーツ協会兵庫県支部を立ち上げ、全国大会でしばしば上位入賞しているほか、神戸市内でダーツ体験教室を開催するなど地域活動にも積極的だ。

「5年ほど前から、ペタンクを愛好する卒業生が中心となって神戸国際ペタンクサロンを設立して、県在住の外国人や留学生を招いた国際交流大会を毎年開催しています。こうした草の根的な活動は他にも数えきれないくらいです」と中山マネージャー。

同校には『再び学んで他のために』という建学精神があり、その実践の場として在学生のボランティア活動を支援してきた。こうした生涯スポーツを通じた卒業生の活動はこの理念に通じるものだ。同校はまもなく開校20周年を迎えるが、ここが輩出したシニア世代の人材の層は地域社会においてますます厚みを増し、その役割と存在感はさらに大きくなっているようだ。

(文責・CEL編集室)



芝生の上でボールを転がして目標球に近づけることを競う英国生まれの競技「ローンボウルス」もスポーツ授業で体験する。「しあわせの村」には専用のローンボウルス場もある



同校での学習内容はコース別の専門課程のほか、教養を高める講義やスポーツを通じた健康づくりなどを学ぶ共通課程に分かれている。学年共通のスポーツ授業では、生涯スポーツのひとつとしてダーツ実技の授業もある



同校では3年生になると1・2年生で学んだ内容の集大成として、学生自らがテーマを決めてグループごとに調査・研究をする「グループ学習」に取り組む



カレッジのスポーツ授業でも取り入れられている「ペタンク」はビュット(目標球)に向けて金属製のボールを投げ合い、目標に近づけることで得点を競うフランス生まれの競技。同校卒業生が中心となって毎年「しあわせの村」で国際交流ペタンク大会が開催されている

校内のカレッジホールで練習に打ち込むダーツクラブのメンバー。クラブOBたちが主体となって日本ダーツ協会兵庫県支部を結成し、地域ボランティア活動としてダーツ教室を開催している

『心の聖地』スポーツ闘いの記憶

「スポーツが持つ多様な魅力が00Lを豊かにする」を紐解くヒント

共同通信社編 岩波書店 2012年



海老久美子 (えびくみこ)

立命館大学スポーツ健康科学部・同研究科教授。1962年神奈川県生まれ。博士(栄養学)。管理栄養士。公認スポーツ栄養士。オリンピック強化指定選手やプロ野球選手をはじめ、様々なアスリートの食事サポートを実施。著書に『野球食』『野球食Jr.』『野球食のレシピ』(ベースボール・マガジン社刊)、『食トレ』(池田書店)など。

本書は、共同通信社が2010年に全国の加盟新聞社に配信し、2010年ミスノ・スポーツライター賞を受賞した『「心の聖地」—スポーツ、あの日から—』の書籍化である。

私はあまり深く考えずに、取材をお受けしたが、念入りな打ち合わせの後、撮影とともに数回に渡って滋賀の私の現場に来られた。その綿密で丁寧な取材に感銘を受けたのを憶えている。

書籍化された本書は、4つのカテゴリーで45編が収められている。内容の深さは、取り上げられた主人公達の名前が物語っているだろう。

- 一 時代に翻弄されながら ~坂井義則(東京五輪聖火最終ランナー)、カール・シュランツ(アルペン)、カシアス内藤(ボクシング)、張本勲(プロ野球)、吉田実(競輪)、瀬古利彦(マラソン)、ベラ・チャスラフスカ(体操)、中西太(プロ野球)、竹田恒和(馬術)、王貞治(プロ野球)
- 二 苦悩の先、細い光 ~坂本佳一(夏の甲子園準優勝)、岩崎恭子(競泳)、池田敬子(体操)、北の湖(大相撲)、三輪勝(装蹄師)、吉田義男(元阪神監督)、荘則棟(卓球)、千田美智仁(ラグビー)、中嶋常幸(ゴルフ)、森且行(オートレーサー)
- 三 ライバルに背中を押され ~君原健二(マラソン)、加藤滝男・保男(登山家)、早慶レガッタ(ボート)、橋爪四郎(競泳)、西側よしみ(競泳)、モハメド・ラシュワン(柔道)、北沢欣浩(スピードスケート)、村椿輝雄(野球)
- 四 パイオニアの苦悩 ~今村美智子(競技かるた)、辻谷政久(砲丸職人)、中山律子(ボウリング)、中井広恵(女流棋士)、海老久美子(スポーツ栄養学)、木之本興三(元・Jリーグ専務理事)、谷田絹子(バレーボール)、笹原広喜(車いすマラソン)、山口香(柔道)
- 五 世界を舞台に ~川口悠子(フィギュアスケート)、ワタル・ミサカ(プロバスケットボール)、奥寺康彦(サッカー)、沢松和子(テニス)、篠塚健次郎(自動車ラリー)、村上雅則(元・大リーガー)、馬淵崇英(飛び込み競技指導者)、小林俊一(スポーツコーディネーター)〈掲載順/敬称略〉。

往年のトップ選手から私のような裏方まで、45人の心に秘める「聖地」をキーワードに、綿密な取材を元にそれぞれの軌跡を描き出す。時代や政治に翻弄されながらそれでも貫いた信念。選手として頂点を極めたその後の挫折、等、それぞれの心の聖地と共に語られる、それぞれの人生の闘いの記憶からは、今までに感じたことのなかったスポーツを味わうことができる。

それぞれ膨大になったと思われる情報から、丁寧に丁寧に研ぎすまされたボディ(本文)は、トップアスリートのボディ(肉体)を彷彿とさせる。そこに費やされたエネルギーを含め、まさにスポーツの“多様な魅力”を感じる一冊である。

Books : editor's choice

- 『スポーツ解体新書』玉木正之 日本放送出版協会(2003年)
- 『地域を変えた総合型地域スポーツクラブ』山口泰雄 大修館書店(2006年)
- 『脳に効く! コーディネーション運動—楽しく動いて脳活性』荒木秀夫、桐野衛二、多田ゆかり 主婦と生活社(2007年)
- 『スポーツで地域をつくる』堀繁、薄井充裕、木田悟 東京大学出版会(2007年)
- 『健康・スポーツへの招待—今日から始めるアクティブ・ライフ』山口泰雄 体育施設出版(2007年)
- 『スポーツマネジメント』原田彦彦、小笠原悦子 大修館書店(2008年)
- 『ドイツに学ぶスポーツクラブの発展と社会公益性』クリストフ・フロイアー 黒須充 監訳 創文企画(2010年)
- 『健康・フィットネスと生涯スポーツ』東海大学一般体育研究室 大修館書店(2010年)
- 『現代スポーツ論の射程—歴史・理論・科学』金井淳二 文理閣(2011年)
- 『スポーツマーケティング入門—コトラーのマーケティング3.0に学ぶ』久保田正義 秀和システム(2011年)
- 『「一流」が使う魔法の言葉—スポーツオノマトペで毎日がワクワク!』藤野良孝 祥伝社(2011年)

- 『スポーツの経済と政策』伊多波良雄、八木匡、伊吹勇亮、横山勝彦 晃洋書房(2011年)
- 『現代スポーツの社会学—課題と共生への道のり』J.コークリー 南窓社(2011年)
- 『スポーツ応援文化の社会学(SEKAISHISO SEMINAR)』高橋仁 世界思想社(2011年)
- 『スポーツ政策論』菊幸一、真山達志、横山勝彦、齋藤健司 成文堂(2011年)
- 『よくわかるスポーツ文化論』井上俊、菊幸一 ミネルヴァ書房(2012年)
- 『スポーツの組織文化と産業』横山勝彦、八木匡、松野光範、朝原宣治 晃洋書房(2012年)
- 『基礎から学ぶスポーツリテラシー』高橋健夫他 大修館書店(2012年)
- 『スポーツビジネス最強の教科書』平田竹男 東洋経済新報社(2012年)
- 『メディアスポーツへの招待』黒田勇 ミネルヴァ書房(2012年)
- 『スポーツの経済学』マイケルA.リーズ 中央経済社(2012年)
- 『スポーツビジネスの法と文化—アメリカと日本』グレン M.ウォン 成文堂(2012年)
- 『女子大生が立ち上げたプロスポーツのビジネス戦略ストーリー』渡辺保 日刊スポーツ出版社(2012年)



夜空を見上げよう

—春の星空ウォッチング—

渡部 潤一

わたなべ じゅんいち
国立天文台副台長兼教授、天文学者。1960年福島県生まれ。東京大学理学部卒業、同大学院理学系研究科天文学専門課程博士課程中退。最新の天文学の成果を講演や著書を通して伝えるなど幅広い活動をしている。『面白いほど宇宙がわかる15の言の葉』(小学館)など著書多数。



旅

気温が低い冬より、夜風に少しぬくもりを感じるようになると、夜空では冬の星座たちが西に傾き、春の星座が上ってきます。そんな早春の夜、たまには星空を見上げて見ませんか？
星を眺めるといって、どうしても難しく思うこともあり、天体望遠鏡がないとだめだろうな、などと思ってしまう。う人もいるかも知れませんが、そんなことは全くありません。星空を眺めるのは、とっても簡単。風景を眺めるように、まずは晴れた夜、見上げるだけでいいのです。そこには、まさしく宇宙の風景が広がっています。難しい知識や経験は不要です。なにしろ、人類は天体望遠鏡を発明する16世紀よりも以前、肉眼だけで星たちを観察し、さまざまな思いを巡らせてきたからです。その同じ夜空が、いまでも頭の上に広がっています。

早春の夜空のお勧めは、なんととっても表情豊かな月でしょう。春霞に浮かぶ満月は、いわゆる朧月と呼ばれ、春特有の風情ある眺めになります。さらに西の地平線に浮かぶ三日月も必見です。春の三日月は、地平線に対して、ほぼ平行に寝たようになりますので、まるで春の海に浮かぶ船のように見えるからです。今年3月は12日が新月なので、その週末がちょうど船のような三日月の見頃となります。ちなみに満月は27日です。
さて、星座の方はというと、誰でもが知っている七つの星の並びが北東の方角から上ってきます。春を代表する北斗七星です。七つの星がほぼ同じ明るさで、ひしやく型に並んでいて、北極星を探す目印として、小学校の教科書にもでてくるほど有名ですので、誰が見てもわかるはずです。この北斗七星が空高く上って

くる頃、そのひしやくの柄のカーブを、そのまま伸ばしてみると、そこにはオレンジ色の明るい星が輝いています。これがうしあし座の一等星アークトゥルス。さらに、そのカーブを伸ばしていくと南の空で、今度は純白の星にたどり着きます。おとめ座の一等星スピカです。北斗七星からスピカまで、夜空をまたぐ壮大な曲線は「春の大曲線」と呼ばれ、春の夜空のランドマークとなっています。純白のスピカとオレンジ色のアークトゥルスは、それぞれ真珠星、珊瑚星とも呼ばれています。春の夜空にカラフルな星々の色の対比が楽しめます。
季節ごとに、星空にはそれぞれ違ったランドマークがあり、また気象条件の差による月や星の見え方も異なる風情となります。春だけでなく、それぞれの季節で星空ウォッチングを楽しんでみませんか。

生活者の省エネルギーに関する意識について

志波 徹

はじめに

2011年3月に起こった東日本大震災から2年が経過しようとしている。原子力発電所が徐々に停止され、電力の需給は厳しい状況が続いている。そのような中、生活者も家庭で何気なく使用していた電力には様々な要因が絡んでいることに気づき、節電の取り組みを始めた人も少なくない。

一方で、エアコンの設定温度を上げて、暑い思いをした割に使用量が減らなかったり、電気のプラグをいちいち抜く行為が面倒であったりするために、省エネルギーの意識や行動に揺り戻しの動きもあるように思われる。また、省エネルギーのメニューや効果に関する情報は、生活者に十分届いているとはいえない。

そのような状況を背景に、CELでは、生活者の省エネルギーに関するライフスタイルの研究を新規に立ち上げた。本稿では、その研究の一環として実施した「生活者の省エネルギーに関する意識や行動に関する調査」の結果の一部を紹介する。

本調査の目的

本調査では、以下の仮説を検証する目的で、調査項目を検討した。

位3つの項目は、いずれも半数以上の人が取り組んでおり、省エネの手法として定着しつつあると思われる。

それぞれの省エネ行動について、以前から取り組んでいたか、この夏だけであったかも聞いたところ、前述の上位3つの行動に関しては、以前から取り組んでいた人が41〜47%、この夏から取り組んだ人が7〜8%であった。

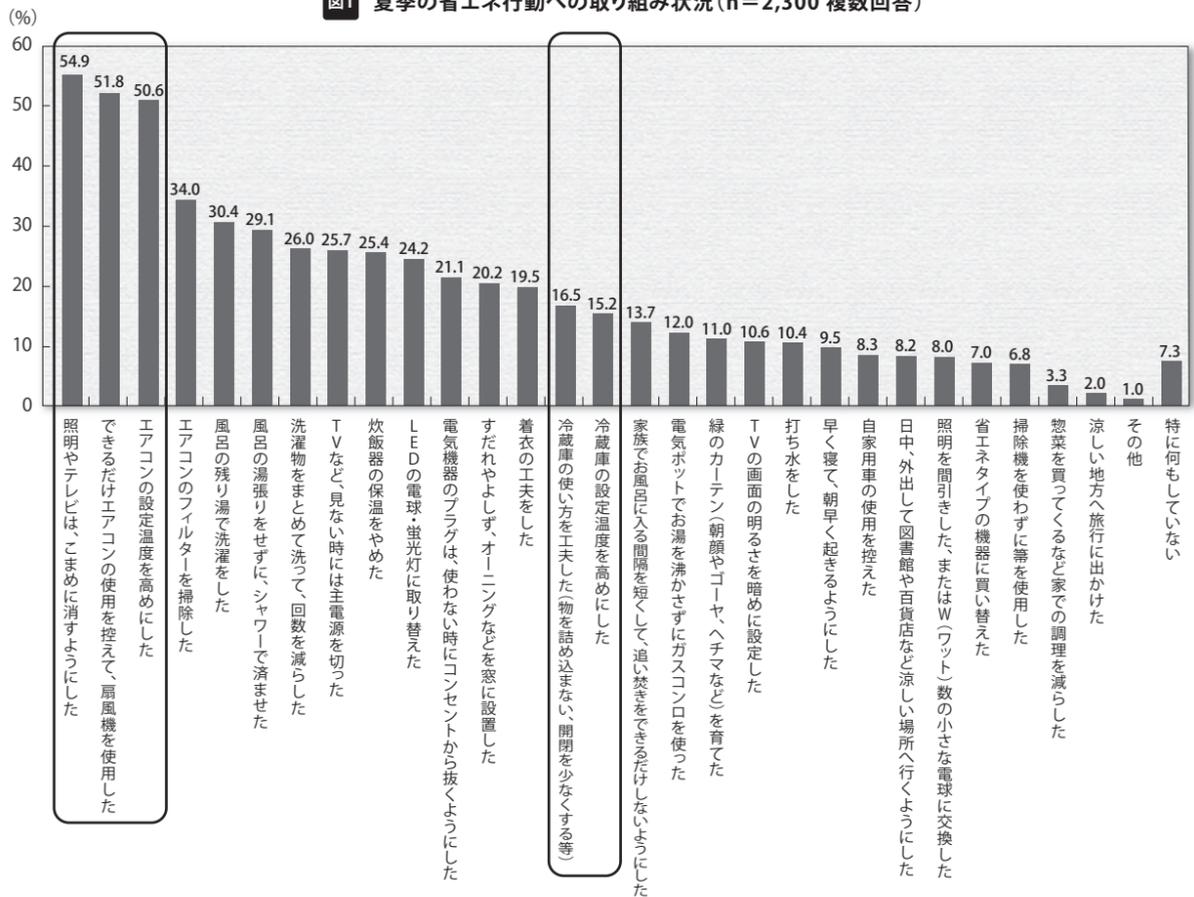
また、冷蔵庫は、住宅内で使われる電力消費量の中では、エアコンに次いで大きく、約2割を占めるといわれている。冷蔵庫に関して「物を詰め込まない、開閉を少なくするなど使い方の工夫をした」「設定温度を高めにした」人は、それぞれ15%程度にとどまっており、あまり実行されていない。冷蔵庫に関する省エネは、夏季に電力会社がCMなどで伝えていたので、実行した人も多いのではないかと思われたが、意外に低い結果となっている。

図1に示す28の省エネ行動のどれも行っていない人は約7%しかなく、全体としては、9割以上の人が何らかの省エネ行動をしている。しかし、省エネへの関心度とクロス集計をしてみると、「大変関心がある」「少し関心がある」と回答している人には、「特に何もしていない」がほとんどなのに対し、「どちらでもない」と回答した人の約2割、「関心がない」と回答した人に至っては8割が省エネ行動をとっていない。省エネに関心があれば、実際に省エネ行動をとるといえる。

これらの省エネ行動は、以前からしていた人に、この夏から取り組んだ人が加わる一方で、しなくなる人もいると思われる。そこで、夏に行った省エネ行動の継続意向を聞いたところ、表1のようになった。

今まで同様、省エネに取り組むとの回答が74%を占め、「今までしていなかったが、秋冬以降は取り組んで行きたい」との回答が6%ある一方で、「今まで取り組んできたが、やめるつもり」との回答が1・7%、「もともととしていないし、今後もするつもりはない」との回答も3・7%あった。全体として、取り組む人の割合が減少しないような方策を考えていく必要がある。

図1 夏季の省エネ行動への取り組み状況 (n=2,300 複数回答)



- 省エネに取り組むべきという意識と実際の行動には、乖離があるのではないかと?
- 省エネ行動に取り組まない人には、それぞれの理由があるのではないかと?
- 環境への配慮、省CO₂、光熱費削減等、個人によって優先するものは異なるのではないかと?

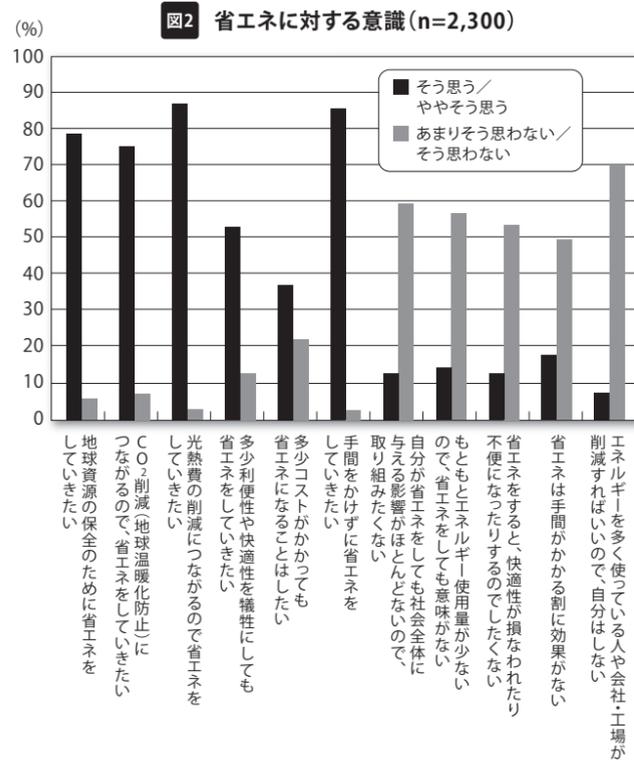
調査方法はインターネット調査で、対象は、全国の満20歳以上の男女。回収数は、2300人であった。調査時期は、2012年12月である。

省エネルギーの関心と行動

まず、省エネに関する関心を尋ねた。「あなたは省エネに関心がありますか」との問いに対し、「大変関心がある」「少し関心がある」との回答が81%と大多数を占めた。「少し関心がある」が55%と半数を占めており、それほど積極的ではないが、何かしら取り組んでいると思われるレベルの人が多い様子が窺える。

男女別で見ると、女性の方が、また年代別で見ると、高齢層の方が「関心がある」が多かった。

また、実際に、今年の夏、どのような省エネ行動をとったかを複数回答で聞いた結果は図1の通りである。「照明やテレビをこまめに消す」「エアコンの使用を控えて扇風機を使用する」「エアコンの設定温度を高めにする」の上



次に、省エネに対する意識として、11の質問を行い、5段階で回答を

省エネ行動に対する意識

影響しないとと思う」との回答もあったが、確かにテレビの機種によっては、待機電力がほぼ0まで小さくなっている機種もある。自宅のテレビの待機電力が情報としてあれば、自分の手間と勘案して、生活者自身が主電源を切ることができると思われる。

このように省エネ行動をしない理由として「面倒」が上位を占める結果となった。ここで、もしその行動によるエネルギー削減量や光熱費削減量などの情報を伝えることができれば、面倒という意識を切り崩して、省エネ行動を実行する方向に誘導できる可能性があるが、そうである。

省エネ行動をしない理由

省エネ行動をしない人には、それぞれの理由があると思われる。いくつかの行動について、取り組んでいない人に理由を尋ねた。その結果を表2に示す。複数回答で回答を得ているが、延人数を分母にして各回答数の割合を算出している。

「人のいない部屋の照明が点灯したままになっていることがある理由」と回答した人に対して、その理由を聞いたところ、「消灯を忘れる」という理由が一番多く、4割を超えている。一方で、意図的に点灯したままにしているとの回答もいくらかある。人感センサー付き照明を導入すれば解決するようにも思われるが、照明が不必要な場合でも人が近付けば点灯してしまうこともあるので、効果を考えて導入すべきである。

湯や水をこまめに止めない理由に関しては、「お湯の温度が変わるのがい

表1 この秋冬以降も省エネを継続していきますか？

今まで同様、省エネに取り組んでいきたい	74.0%
電力の需給が厳しいならば取り組む	7.3%
今までしていなかったが、秋冬は省エネに取り組みたい	6.0%
今まで取り組んできたが、やめるつもり	1.7%
もともとしていないし、今後もするつもりはない	3.7%
わからない	7.2%

(n=2,300)

表2 省エネ行動をしない理由

人のいない部屋の照明が点灯したままになっていることがある理由	
消灯するのを忘れるから	43.1%
すぐに戻るので、点灯したままにしているから	30.4%
夜、トイレに行く人がいたり、帰宅する人がいたりするので点灯したままにしているから	7.8%
いちいち消灯するのが面倒だから	6.6%
暗いとこわい(不安に思う)ので、点灯したままにしているから	5.7%
省エネにほとんど影響しないと思うから	1.7%
ON・OFFが多いと機器やスイッチが傷みやすいと思うから	1.7%
その他	3.1%
手洗い、歯磨き、風呂などで、水やお湯、シャワーを出しっぱなしにすることはありますか	
次にお湯を出す時に、温度が一時的に変わるのがいやだから	44.3%
いちいち止めるのが面倒だから	30.7%
止めるのを忘れるから	17.9%
省エネにほとんど影響しないと思うから	3.0%
その他	4.1%
冷蔵庫の設定温度を、季節によって変えていない理由	
面倒だから	21.2%
温度が上がって、食品が傷んだり、冷凍したものが溶けたりすると困るから	20.8%
変えるのを忘れるから	20.5%
変え方を知らないから	16.5%
省エネにほとんど影響しないと思うから	13.9%
その他	7.2%
テレビを見終わった時に主電源を切らない理由	
面倒だから	27.9%
次に見る時に、ONするのが面倒と思うから	27.4%
省エネにほとんど影響しないと思うから	15.6%
切るのを忘れるから	11.6%
家族が切るのを忘れるから	5.3%
切り方を知らないから	4.2%
その他	8.1%

やである」との回答が半数近くにもなった。湯温調整がにくいタイプのケランも多いと思われるので、設備の詳細調査も必要であろう。

冷蔵庫の温度設定の変更は、前述のように実施率は15%程度で意外に低かった。変更しない理由としては、「面倒」と「変えるのを忘れる」が多く、両方で40%を超えているが、「食品が傷んだり冷凍の物が解凍したりすると困る」との回答が約20%、「変え方を知らない」が16%、「省エネに影響しないと思う」が13%と少なからずあった。これらは、温度設定の変更方やその時の温度、節電への効果などの情報が伝えられれば、実行に移してもらえる可能性もあると考える。

テレビを見終わった時に主電源を切っている人は約45%であったが、切っていない人の理由は、「切るのが面倒」と「次に見る時にONしなければいけないのが面倒」の両方を合わせて半数以上になった。通常、リモコンでOFFするので、さらに手間かけるのは面倒かもしれない。「省エネに

求めた。「そう思う」「ややそう思う」の肯定的意見と、「あまりそう思わない」「そう思わない」の否定的意見の比較を図2に示す。対比を明確にするために、「どちらでもない」との回答は省いている。省エネに取り組む理由としては、①光熱費削減 ②地球資源の保全 ③地球温暖化防止の順になった。また、「手間を省いていきたい」という意見は、86%の人が肯定的な意見であり、否定的な意見(14%)は、少々手間がかかっても省エネをしていくは、3%に過ぎなかった。「手間」と感じるかどうかは、個々人の性格や感覚による。それぞれの省エネ行動の効果を伝える情報があれば、自分が許容できる手間で、比較的效果の高い省エネ行動を選択することもできるのではないかと考える。

おわりに

本稿では、今回行った調査の中からトピック的な事項を紹介した。他の質問項目についても分析を進め、発信していく予定である。

一般的には、エネルギーの「見える化」で省エネ行動をとるようになるといわれるが、省エネに関心のない人は見ようとしないうちに、同じ「見える化」システムを導入しても消費エネルギーが増加してしまう家庭もある。また、省エネに関する情報が不足で取り組んでいなかったり、間違った省エネをしていたりするケースもあると考えられ、どのような情報が必要なのか、調べていきたい。また、人の個性も様々であり、推奨するメニューも違ったものになると思われる。

今後は、このような調査を継続する一方、実験集合住宅NEXT21において、住戸内で使用するエネルギーの詳細計測や、入居者へのヒアリング調査なども行いながら、生活者のエネルギーに関するライフスタイルがどのようなものであり、今後、どうあるべきかを考えていきたい。

誤解による理解—コミュニケーションで苦勞するわけ

鈴木隆

はじめに

組織・社会を生成するコミュニケーションは、よく言葉のキャッチボールに喩えられる。キャッチボールであれば、子供でも容易にできるはずである。ところが、大人になっても日々苦勞しているというのが実感ではないか。コミュニケーションは、言葉だけでされるものではなく、キャッチボールのように単純でもない。コミュニケーションは、誤解しながら理解しあう微妙な行為なのである。本稿では、夫婦の会話からマーケティング、国家外交まで、その成否の鍵を握るこの微妙なしくみについて見ていくことにする。

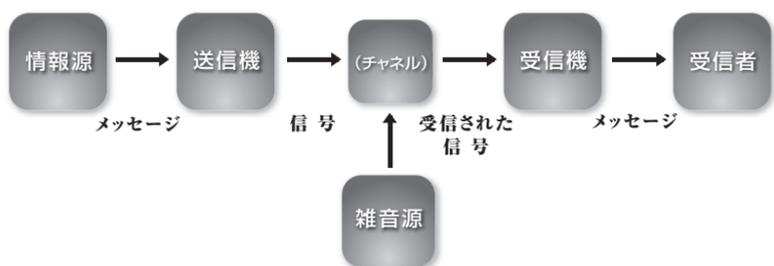
コミュニケーションは通信か

言葉のキャッチボールの喩えにも、実は理論的な裏付けがある。シャノン&ウィーバーの「通信モデル」(図1)である(※1)。送信者が話した音声を経電的な信号に変換し、雑音の影響を防いで効率よく伝

達し、届いた信号を音声に復元し受信者が聞く、というものである。コミュニケーション論や社会学、マーケティングなどでも、この通信モデルや簡略化したSMCR(情報源→メッセージ↓チャネル↓受信者)モデル(※2)が多用されている。家庭や学校、会社などの日常生活でも、通信モデルを暗黙の前提としていることがほとんどであろう。言葉のキャッチボールとの喩えが定着しているわけである。

しかし、そもそも通信モデルは、記号を電氣的な信号パターンに変換し効率よく伝達するために考案された通信工学の理論である。それを人間が情報の意味内容を伝達するコミュニケーションにまで拡大適用するのは行き過ぎである。「この理論は、意味論的なレベルを伴うような通信上の諸問題を扱うの

図1 シャノン&ウィーバーの通信モデル



には適当でない」(※3)。コミュニケーションの効果だけに着目し、人間のコミュニケーションの多くの重要な局面に適合しない機械的な線形モデルを採用したものである(※4)。完璧にユーザーおよび感受性を無視しており、「左脳の線形的な偏向の典型」である(※5)。情報の意味内容が送り手や受け手の外部にあつて小包のように往來するとの考えはとらない(※6)。

人間のコミュニケーション

それでは、人間のコミュニケーションのしくみは、どのように考えればいいのか。人間のコミュニケーションにふさわしいモデルを「対話モデル」と呼ぶことにしよう。対話モデルと通信モデルとはどこが違うのか。

本稿の対話モデルは、以下の3つを組み合わせたものである。第1に、20世紀最大の思想家とも言われるグレゴリー・ベイトソンのコミュニケーション理論(※7)を基本とする。これは彼が人間やイルカ、カワウソの観察研究に基づいて編み出したものである。第2に、この理論を継承し発展させた家族療法、短期療法の理論(※8)を取り入れる。家族療法、短期療法は、臨床心理の現場でのコミュニケーションにより顕著な成果をあげている。第3に、ベイトソン以降に発展した言語学(語用論)、社会心理学等の知見を加味する。

まず、対話モデルのコミュニケーションは相互作用(interaction)、すなわち双方向で

の回帰的な情報のやりとりである(※9)。通信モデルのように一方向で直線的に流れるものではない。コミュニケーションは、送り手と受け手のそれぞれ個人を単位とはせず、両者でやりとりし循環する関係を単位として捉えることになる(図2)。

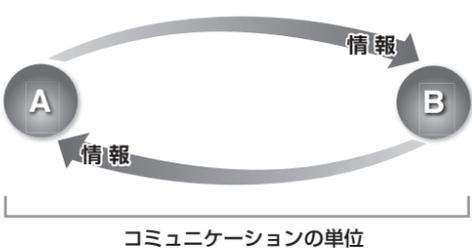
われわれはコミュニケーションしないではいられない(One cannot not communicate)(※10)。言葉を発する必要もない。送り手が意図しなくても受け手に伝わってしまう。何も伝えないよう意図的に努力しても伝わってしまう。試しに2人で無表情かつ無言で向かい合ってみれば、それでも伝わってしまうことがわかるであろう。対面していなくても、届いたメールに返事を出さず放置するだけで、不在・多忙・失念・怠惰・無視・拒絶などが状況に応じて伝わる。コミュニケーションは、送り手や受け手の意図を超えて循環する相互作用なのである。

しかも、コミュニケーションは、単層ではなく複層で構成される。まず、内容そのものを伝えるコミュニケーション(報告機能)がある。それに加えて、関係を伝える行動を限定・拘束するメタ・コミュニケーション(命令機能)がセットになっている(※11)。例えば、上司が忌憚のない意見を聞きたいと口では言っても、しかも面で腕組みしては、部下は誰も本音を話そうとしない。メールの顔文字や絵文字はテキストの内容に關係を加えて伝える。人間は内容だけでなく關係も同時に伝え受け取っているのである。

伝わる情報と意味

コミュニケーションで伝わる内容としての情報とは何であろうか。それは、「違いを生む違い(a difference which makes a difference)」である(※12)。「どっちだっつていい(make no difference)ような違いではなく、違っている」とい違いがある違いである。花の種類についていえば、桜の花といつても厳

図2 相互作用としてのコミュニケーション



コミュニケーションの単位

密には一輪一輪違うが、それは違いを生まないだけの違いである。桜の花と梅の花との違いこそが、花の種類としての違いを生む違い、すなわち情報である。

しかし、情報のやりとりだけでは空疎である。情報の意味を理解することが必要である。人間は意味を求める存在であり(※13)、コミュニケーションは「意味の追求 (effort after meaning) 」(※14)のための営みなのである。

情報の意味を理解するためには、コミュニケーションの背景であるコンテキスト(文脈・状況)を参照し推論することになる(※15)。一杯奢ると誘っても、いつもなら相好を崩すのに、禁酒中だと睨み返されるのは、コンテキストによって意味が違ってくる一例である。しかし、実際にコンテキストがどこまで共有できているか定かでないし、コミュニケーションのたびに上書きされ変化していく。推論の基盤となる知識、知識を使用する認知の枠組みであるスキーマ(※16)についても人それぞれであり、完全に共有されていることはまずない。

非合理的な判断、感情の作用

意味の推論にあたっては、合理的に判断するとは限らない。当該コミュニケーションや他の事象によって喚起された感情も作用する。人間は論理一辺倒ではなく、情にも掉差し流される存在である。

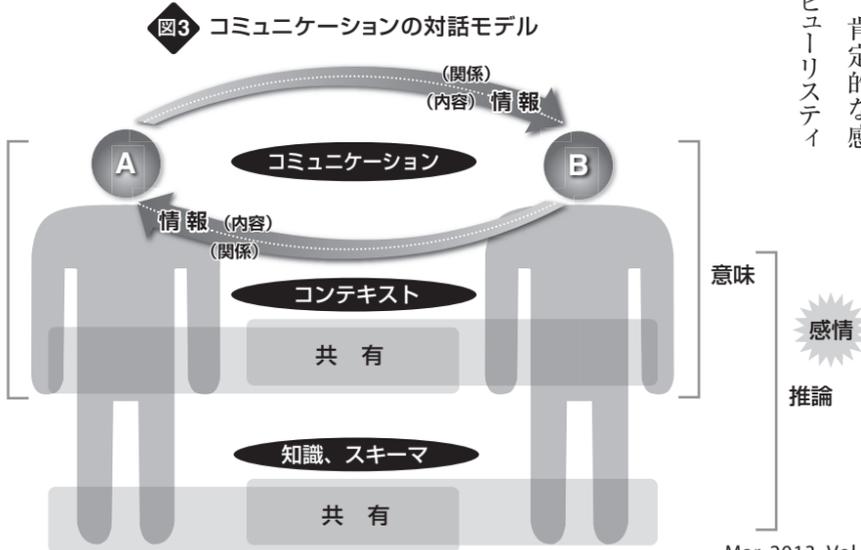
社会心理学では、ヒューリスティクス(困難な問いに対して、適切ではあるが往々にして不完全な答を見つける単純な手続き)(※17)や、精緻化見込モデル(動機づけと能力の有無によって、メッセージそのものの内容をよく吟味する中心ルートと、メッセージ以外の手がかりで簡便に判断する周辺ルートを使い分ける)(※18)が市民権を得て、人間の非合理的

性も理論に取り込まれるようになってきている。

これらの理論によると、肯定的な感情の時には周辺ルート、ヒューリスティクスが、否定的な感情の時には中心ルート、慎重な検討がとられやすいとされる(※19)。感情を理解するためには、特に関係のメタ・コミュニケーションに注目する(※20)。

有益な誤解による理解

このように人間のコミュニケーションは、必ずしも共有されない知識、スキーマ、コンテキストの下で、複雑レベルにおいて連鎖的に循環する累積プロセスであり、感情も作用する(図3)。情報の意味は、他者との相互作用によって恣意的に変化していく。完璧な理解などそもそもありえない。こ



ミニコミュニケーションは、有益な誤解 (useful misunderstanding) (※21)をしあいながら理解しあう微妙な行為なのである。

おわりに

機械の通信モデルではなく、人間の対話モデルを念頭にコミュニケーションすること、相互理解を深めることが可能になる。本稿が、コミュニケーションの苦勞を多少なりとも軽減するきっかけになれば幸いである。

筆者は、対話モデルに基づき、消費者行動、マーケティングについて研究している。本誌上などで順次発表していく。

(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 研究員)

- (※1) クロード・シャノン、ワレン・ウィバー(2009)『通信の数学的理論』筑摩書房
- (※2) デヴィッド・バーロ(1972)『コミュニケーション・プロセス』協同出版
- (※3) ケネス・ポールディング(1975)『経済学を超えて』学習研究社
- (※4) エベレット・M・ロジャーズ(1999)『コミュニケーションの科学』共立出版
- エベレット・M・ロジャーズ、リカー・A・ロジャーズ(1995)『組織』NHK
- コミュニケーション入門』プレジデント出版
- (※5) マーシャル・マクルーハン、エリック・マクルーハン(2002)『メディアの法則』NTT出版
- (※6) 西垣通(2004)『基礎情報学』NTT出版、西垣通(2008)『続基礎情報学』NTT出版
- (※7) グレゴリー・ペイトン(2000)『精神の生態学』新思索社、グレゴリー・ペイトン(2001)『精神と自然』新思索社、グレゴリー・ペイトン、ジャーゲン・ロイシュ(1995)『精神のコミュニケーション』新思索社、モリス・バーマン(1998)『デカルトからペイトンへ』国文社、野村直樹(2008)『やさしいペイトン』金剛出版、野村直樹(2012)『みんなのペイトン』金剛出版

- (※8) ポール・ワツラヴィック、ドン・D・ジャクソン、ジャネット・ベウン・バウエラス(1990)『人間』コミュニケーションの語用論』二瓶社、Paul Watzlawick, John H. Weakland (1977), The Interactional View, Norton.
- (※9) ポール・ワツラヴィック、ドン・D・ジャクソン、ジャネット・ベウン・バウエラス(1990)『人間』コミュニケーションの語用論』二瓶社、ツラヴィック、ドン・D・ジャクソン、ジャネット・ベウン・バウエラス(1998)『人間』コミュニケーションの語用論』二瓶社
- (※10) グレゴリー・ペイトン(2000)『精神の生態学』新思索社、ポール・ワツラヴィック、ドン・D・ジャクソン、ジャネット・ベウン・バウエラス(1990)『人間』コミュニケーションの語用論』二瓶社
- (※11) グレゴリー・ペイトン(2000)『精神の生態学』新思索社、ポール・ワツラヴィック、ドン・D・ジャクソン、ジャネット・ベウン・バウエラス(1998)『人間』コミュニケーションの語用論』二瓶社
- (※12) グレゴリー・ペイトン(2000)『精神の生態学』新思索社
- (※13) ヴィクトール・フランクル(2000)『意味への意志』みすず書房
- (※14) 野村直樹(2010)『ナラティブ・時間』コミュニケーション』遠見書房
- (※15) ヤコブ・メイ(1999)『ことばは世界とどうかわるか』ひつじ書房
- ダン・スベル(1999)『関連性理論』研究社、ステイヴン・レイヴァン(1990)『英語語用論』研究社、ジェニー・トマス(1998)『語用論入門』研究社、フランソワ・レカナティ(2006)『ことばの意味とは何か』新曜社
- (※16) 西田ひろ子(2000)『異文化間コミュニケーション』創元社
- (※17) ダニエル・カーネマン(2011)『ダニエル・カーネマン 心理と経済を語る』楽工社、ダニエル・カーネマン(2012)『ファスト&スロー(上・下)』早川書房
- (※18) Richard E. Petty, John T. Cacioppo (1986), Communication and Persuasion Central and Peripheral Routes to Attitude Change, Springer-Verlag.
- (※19) 北村英哉・大坪庸介(2012)『社会心理学 有斐閣』杉本徹雄(2012)『新・消費者理解のための心理学』福村出版、相川充・高井次郎(2010)『コミュニケーションと対人関係』誠信書房
- (※20) シーラ・マクミナー、ケネス・J・ガーゲン(1997)『ナラティブ・セラピー』社会構成主義の実践』金剛出版、若島孔文(2007)『社会構成主義のプラグマティズム』金子書房
- (※21) スティーヴ・D・シェイザー(1994)『ブリーフ・セラピーを読む』金剛出版

生活者の意識と行動

第1回(夏季)調査から

— 関心のありか、不安のありか

三島 順子

はじめに調査のこれまでの経緯

当研究所では、「住まい・生活」に関して生活者が抱える問題、期待する将来の姿・方向、そのギャップを埋める解決策と今後のあり方などを分析・研究することを目的に、平成16年度(2005年1月)から、年に1回、全国の約1000人を対象に「生活意識調査」を行ってきた。これまでの調査では各研究員の仮説検証が調査の主な目的にすえられ、設問は「どう思いますか」と回答者の「意識」・「意見」を問うものが中心であった。第8回平成23年度(2012年1月)の調査を最後に、方針を見直し「生活者の意識と行動」調査と改めたのは、「意識」だけでなく、「どうしていますか」「どうしたいと思っていますか」と「行動」を問うことを調査に加えたからである。また同時に「留置記入依頼法」(調査票を渡し、後日、調査員が記入済みのものを向いて受け取る)からインターネット調査に変更した。本調査では、意識を深く探りたいと考え、自由記述欄を使用した設問を初めて行った。今回のCELアウトプットではそこから「関心のあること」、「不安に思っていること」の2点について紹介する。

「生活者の意識と行動 第1回(夏季)調査」

- 調査期間：2012年8月24日～27日
- 方法：インターネットを利用したモニター調査
(株式会社日経リサーチに依頼)
- 対象：全国の20歳～80歳の男女(学生除く) 3056人

「生活者の意識と行動 第1回(夏季)調査」から — 関心のありか

「設問」あなたが、今関心のあることは何ですか。以下の形式にあわせて、3つまでお答えください。何もない方は「何もない」とご回答ください。

最も関心があること
2番目に関心があること
3番目に関心があること

に
に
に

関心がある
関心がある
関心がある

頻出ワードを順位付けするにあたっては、表現は異なるものの、意図していることは同じといえるもの、例えば、「自動車」と「車」などは同じと扱っている。一方、「子育て・育児」と「子ども」を別のものとし

たのは回答内容が「子育て・育児」の場合は大半の回答がこの単語のみなのに対し、「子ども」の場合は、「子どもの教育」、「子どもの進学」、「子どもの就職」、「子どもの結婚」と内容が多岐に渡るためである。また、20代、30代の回答では「子育て・育児」が「子ども」より頻繁に現れるが、40代以降では「子育て・育児」より「子ども」の出現回数が多くなり、20代・30代と40代以降で頻出語句が逆転する。

男女別頻出ワードの上位5位(表1)を見ると、男性はどちらかといえば社会全般にかかわる単語が多く、トップ5に限っていえば、子どもや家族に関する記述が見られない。これは、後述の「不安に思うこと」でも同様の傾向が現れている。対して、女性は第3位と第5位に子ども(子育て・育児)が現れており、育メン(育児を積極的に率先して行う男性)、育翁(孫育てに積極的にかかわる高齢者世代の男性)等の風潮はあるものの、子どもの世話については女性が主に担うことが多いといえるのではないだろうか。反対に男女に共通するのは「健康」であるが、出現回数で100回以上の差があり、女性の回答の特徴は「健康」一言の記述ではなく、「家族の健康」と書かれている傾向が男性より強く

「子どもの健康」(62歳女性)というように3項目すべて、または3項目のうち2項目が自分以外のことで埋められている回答も見受けられた。女性の頻出ワードをよく見てみると「子ども」と「子育て・育児」がランク入りしており仮に、同義として足し合わせると健康に次いで2位となる。本調査では「関心のあること」について3点聞いているが、3項目とも自分自身に属することではなく、他の人のことで占められているというものはたしてもっともなことなのだろうか。いずれ、子どもは成長し、自分から離れ、独立し、伴侶は先にいなくなることもある。その時のために、今すぐとはいわないが、もう少し関心や時間を自分のことに振り向けてみてよいか。それではないだろうか。そして、それができない理由について、さらに深く調べる必要があると考えている。

次に世代別の特徴を見てみる(図1)。各世代に共通するのは多い言葉から順に「旅行」、「資産関連(株式・資産・貯蓄等5語)」、「外交(領土等3語)」、「政治(政治等2語)」の4語である。世代ごとの特徴は、

表1 男女別頻出ワード

男性全世代 頻出ワード トップ5(n=838)		
順位	項目	件数
1	外交(領土・尖閣諸島・竹島)	162
2	健康	153
3	資産関連(株式・運用・資産・貯蓄・投資)	143
4	旅行	138
5	政治・政権	132

女性全世代 頻出ワード トップ5(n=963)		
順位	項目	件数
1	健康	268
2	旅行	208
3	子ども	143
4	外交(領土・尖閣諸島・竹島)	101
5	子育て・育児	88

図1 世代別頻出ワード(各世代トップ10)

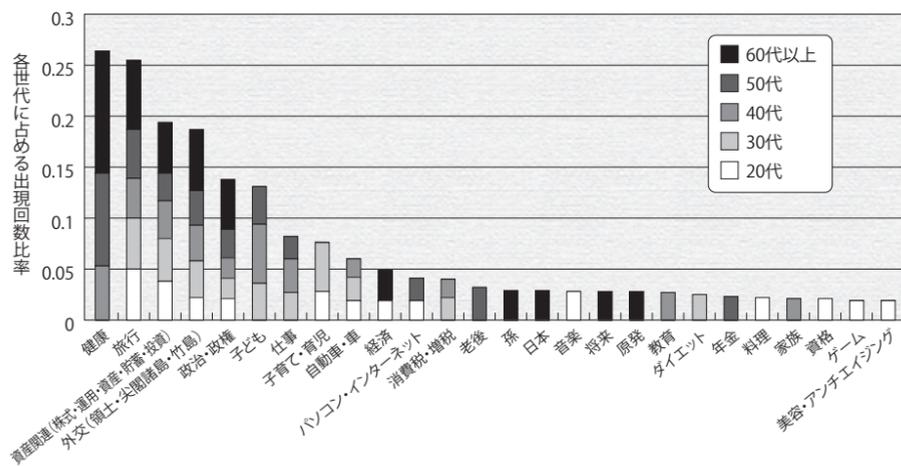
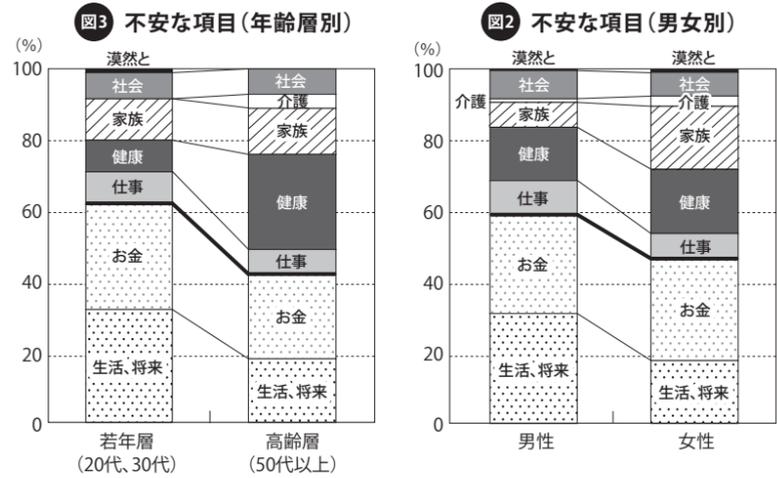


表2 世代別頻出ワード(20代と60代以上)

20代 頻出ワード トップ10 (n=1062)				60代以上 頻出ワード トップ10 (n=1954)			
順位	項目	件数	割合	順位	項目	件数	割合
1	旅行	53	5.0%	1	健康	192	12.0%
2	株式・運用・資産・貯蓄・投資	40	3.8%	2	旅行	108	6.8%
3	音楽	30	2.8%	3	領土・尖閣諸島・竹島	96	6.0%
3	子育て・育児	30	2.8%	4	株式・運用・資産・貯蓄・投資	79	5.0%
5	料理	23	2.2%	5	政治・政権	78	4.9%
5	領土・尖閣諸島・竹島	23	2.2%	6	経済	48	3.0%
7	資格	22	2.1%	7	孫	46	2.9%
7	政治・政権	22	2.1%	7	日本	46	2.9%
9	ゲーム	20	1.9%	9	将来	45	2.8%
9	経済	20	1.9%	10	原発	44	2.8%
9	美容・アンチエイジング	20	1.9%				
9	パソコン・インターネット	20	1.9%				
9	自動車・車	20	1.9%				

1位から5位の6項目を足し合わせると18.8%

1位から6位の6項目を足し合わせると37.7%



漠然と(なんとなく、いろいろ等)
 社会(日本の経済、政治、防犯、放射能、天災等)
 介護(介護、世話、認知症等)
 家族(子ども、結婚、夫、妻、独身、親、母、父等)
 健康(病気、体力が…、〇〇病、体調、病院等)
 仕事(就職、定職、派遣、有期雇用、アルバイト、家業、自営業等)
 お金(家計、給料、収入、経済面、投資、ローン、〇〇費)
 生活、将来(将来の生活、老後の生活、今後の生活等)

族のことが多く、男性の心配事は家族より自分や仕事を含めた社会そのものといえる結果となった。これは見方を変えれば、現代の社会では男性が家計を担い、女性が家庭を担うことが多いことの表れなのかもしれない。男女ともに、約半数が「金銭的なことを含めた将来の生活」に不安を感じていることがわかる。

これらからわかることといえば、「関心のあること」は具体的で、詳細な内容が書かれているのに対し、「不安に思うこと」は抽象的で、漠然としているということである。例えば「今の家があと何年もつか。できればあまりリフォームにお金をかけたくない」(男性29歳)のような具体的なことがあげられているものは少なく、「老後の生活費をどうするかについて」(男性30歳)のような30年後を憂えたもの、「人間誰でも加齢による身体の衰え、できれば寝込まずに、穏やかな終末を迎え

第一に年齢が上がるにつれ、回答内容が「子育て・育児」から「子ども」へ移行していくこと、40代からトップ10入りする「健康」が、年齢が上がるにつれ、さらに上位になることである。第二に、頻出トップ10だけでは少し傾向がわかりづらいのだが、若い世代、特に20代ではひとつの単語に回答が集中せず、分散する傾向にあり、図にすれば低い山がずっと連なっていくようなイメージになる。出現するワードも、身の回りのことが多く、自分自身の生活や興味への具体的な回答(例えば、アイドルと書かれているのではなく、アイドルの固有名詞があがる)が多く見受けられた。対して、50代、60代以降の世代では自身や配偶者の健康、家計といったこと以外は「世界の〇〇状況」

「日本」の〇〇状況」といった抽象的で定義が広い回答が多くなっている。これは、例えば《表2》のように世代別の頻出ワードの上位項目を見ても明らかである。

「不安のありか」

「設問A」生活で不安に思っていることはありませんか。(ひとつだけ)
 1. 不安はある
 2. どちらかといえば不安はある
 3. どちらともいえない
 4. どちらかといえば不安はない
 5. 不安はない

「設問B」設問Aで「1.不安はある」「2.どちらかといえば不安はある」と回答の方は、最も不安に思うことを自由にお書きください。特にない場合は「特になし」のようにご記入ください。

ここからは本調査で「不安」について行った右の設問A・Bに対し、設問Bの回答事例から紹介する。前項の「関心のあること」とは大きく異なり、全世代、男女のいずれでも、回答の大部分が一定の語句に集まる傾向がみられた(n=1936、設問Aで不安なことが何かあると回答した1961のうち、「特になし」の回答を除いたもの)。「関心のあること」とは異なり、単語ではなく、文章で回答されている傾向が強いことから、頻出ワードランキングではなく、ある一定のキーワードが出るものは同じ不安を抱えていると分類する作業を行った。例えば「収入が安定していない契約社員から正社員になれるか不安」の回答であれば、「お金」「仕事」「将来」の3点について不安であると判断した。その結果、これら3つを含む8項目の語句に集約できた(回答の97%が該当)(図2)。

男女別でみれば、関心のあることと同様に女性の心配事は家庭、家

まとめ

「関心のあること」は上位3項目、「不安に思うこと」は最も不安であることの1項目を尋ねるといややアンバランスな調査ではあるが、両項目であがったものは日々の生活に必要な「健康」と「おかね」であることは当たり前だといわれれば、そうかもしれない。印象的なのは「将来」という言葉の使われ方である。「将来」は肯定的な意味だけではないとあらためて気づかされた。実際に、「関心のあること」の設問で「将来」が使われている回答は「不安に思うこと」で使われているほど多くはなく、肯定的な内容も含まれていた。しかし、「不安に思うこと」の設問への回答では「将来」と一言書かれているものが34例、「将来」を含んだもの(例:「将来の生活」)は238例であった。様々なメディアで将来に対する不安感が大きくなっていると伝えられているが、あらためてそのことを意識させられる結果であった。本調査は今後も継続して行う。今後の調査ではこれらがどのように変わるか、また変わらないかの傾向を見るとともに、その要因についても掘り下げていきたい。

(大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所 研究員)

スポーツの底力を クオリティ・オブ・ソサエティの 向上に活かす

大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所
所長
木全 吉彦

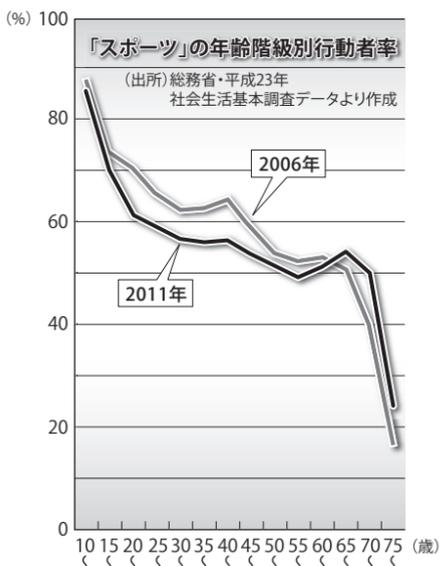
CELとスポーツ

昨年のロンドン・オリンピックでは、世界中がトップアスリートたちの一挙手一投足に熱狂し、勝利に酔い、敗北にため息をつきました。日本も多くの種目で好成績を上げ、メダルの獲得数は歴代1位。特に女子選手の活躍が目立ちました。その余韻がまだ冷めやらぬなか、これから半年後の9月7日には2020年のオリンピック開催地が決まります。1964年以来、実に半世紀ぶりに東京が選ばれば、開催までの7年間、スポーツへの関心はさらに高まって行くものと思われまます。

だからというわけではありませんが、本号の特集ではスポーツを取り上げ、その多様な機能と可能性について、文化的側面、生活的側面、社会的側面という3つの切り口から各界の識者に論じていただきました。

老若男女を問わず、生活者にとって身近な関心事であり営みでもあるスポーツですが、実は、これまで本誌では正面から取り上げたことはありませんでした。しかし、101号から新たなスタートを切る情報誌CELの企画を練る際に、これからの生活・社会を変える「エネルギー」として「ICT」とともに浮かんだのが「スポーツ」だったのです。

きっかけのひとつは2011年10月の第1回大阪マラソンです。沿道の応援



2・3ポイント低下しています。年齢別には65歳未満のすべての階層で低下する一方、65歳以上では上昇するという際立った傾向が読み取れます(上図)。種類別には「ウォーキング・軽い体操」が35・2%と最も高く、以下「ボウリング」・「水泳」・「器具を使ったト

レーニング」・「ジョギング」・「マラソン」・「登山」・「ハイキング」・「サイクリング」(以下略)と続きます。このうち5年前に比べて行動者率が上がったのは「ジョギング」・「マラソン」・「ウォーキング」・「軽い体操」・「サイクリング」の3つのみで、その他は軒並み低下しています。健康管理のためのストイックなエクササイズと呼ばれそうなのが上昇し、球技のようにゲーム性、競技性が高く、チーム・ワークを求められるものが低下するという傾向が表れています。

市民マラソンに見るストイシズム

少子高齢社会を迎え、この傾向は今後も続くと考えられます。ここから何が浮かび上がるでしょうか。ジョギングやランニングは孤独な営みです。例えば3万人規模のマラソン大会であれば、イベントとしての盛り上がりや一体感とは裏腹に、3万人の孤独なランナーが、決められたコースを時間内に走れるよう計算し、練習します。そして当日は自身の体調と相談し、身体

や商店街の人たちの炊き出しや差入れ、ボランティアによる運営サポートで盛り上がり、大成功を収めました。また、ここ数年、各地でトップアスリートが企画・運営するスポーツイベントが多くの観客を集めていることから、スポーツの持つ魅力を再認識させられました。ややもすればクロズドな「界」をつくって閉じこもりがちだったスポーツが、殻を破って、他のさまざまなプレーヤーと繋がって動き出したように見えます。人と人、人と地域を結びつけ、地域・国の一体感を高めるソーシャル・キャピタルとしての評価を行い、その可能性を考えてみたい。そんな思いでこの特集を組みました。

生活行動としてのスポーツ

人はスポーツを趣味や健康管理の一環として自ら行い、あるいは娯楽としてプロ、アマの競技を観たり応援したりします。すなわちスポーツは生活者の生活行動のひとつです。それでは、生活のなかでスポーツの位置づけはどのように変わって行くのでしょうか。

総務省の平成23年社会生活基本調査(2012年7月)によれば、1年間に何らかのスポーツを行った人の割合(行動者率)は63・0%で5年前に比べて対話し、叱咤し、拒絶され、なだめすかし、折り合いながら走るようになります。途中さまざまなアクシデントが起こるたびに、まずはひとりで対処の方法を考え、乗り越えなければならぬでしょう。

スポーツの種類によって、必要となる身体能力、技術、作戦は異なりますが、共通していえるのは「自分が自分の身体をマネジメントできるか」が問われることではないでしょうか。しかもその結果は得点なり記録なり、勝敗なりで明確に表れるのです。凄惨な形相をして走ったり、戦ったりするのも完走後、試合後にこのマネジメントができたという達成感を味わうためと考えれば、レジャーとしてのスポーツといえども、本質的には極めてストイックなものだと思います。

スポーツにその力を解き放たせるために

ルールを守り、フェアプレイに徹する。自身の力の限界を見極めつつチャレンジする。勝利・達成を喜び、敗北・未達成を悔しがり、あきらめず何度も挑戦する…本質的にストイックなスポーツを通じて得られる能力や態度、情緒は貴重なものです。学校での授業や部活動に始まる日本のスポーツですが、今やスポーツ人口は70代、80代にまで広がっています。今後はあらゆる年代の生活者の心身のケアの強力なツールとなつてQuality of Lifeの向上に貢献するとともに、社会の活力(Quality of Society)向上に資する)とがスポーツの役割となるのではないのでしょうか。

そのためにも、多様な顔を持つスポーツの研究と体系化、専門家・指導者の育成とあわせて、産・官・学・民の連携により、スポーツそのものを進化・発展させる仕掛けづくりに取り組むことが必要になります。スポーツでひと、まち、国が元気になるよう、議論を深めたいものです。

濱 恵介

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 顧問

【第4講】

住まいとエネルギー

監修：下田 吉之 大阪大学大学院 教授

「住まい」という用語は、定義がやや曖昧です。「住居」とも書き基本的には住宅を意味しますが、そこで営まれる生活や情景を含めて使われる場合が多いようです。

そのような理解のもと、第4講では暮らし方を視野に入れた住宅とエネルギーの関係について、その意味、望ましい利用の形、付き合い方などを考察します。

●●●●●
住まいはエネルギーの実感に最適

●●●●●
部門別最終エネルギー消費の統計によれば、家庭用エネルギーの占める割合は15%弱です。しかし家庭用(住まいのエネルギー)には特別な意味があります。その大きな特徴は、産業部門や業務用と異なり、生活者が主役で、本人がエネルギーを選び、利用し、費用を負担し、評価できる立場にあることです。

例えば、企業や行政機関で環境対策に必要な役割を果たしている人でも、家に帰れば一生活者です。住まいにおけるエネルギー選択、省エネなどがきちんと実践できれば、その人が携わる業務や政策づくりにおいても正しい判断につながるでしょう。

次に、家庭は子育ての現場です。未来を背負う子供・青少年たちに価値観や生活態度を植え付ける重要な場所が住まいです。エネルギーについても意識して向き合い取り扱うことで、正しい判断力や行動様式を身に付けさせることができます。

さらに、住宅を建てたり改修したりする際に、エネルギーに関する正しい知識を持っているか否かによって、その後何十年にもわたって住み心地や光熱費、そして温室効果ガスの排出量などに影響が及びます。

●●●●●
住宅の性能や設備だけでなく、実践される生活スタイルも含め、住まいはエネルギーを学び実感できる最高の舞台なのです。

●●●●●
断熱は健康・快適・省エネの一石三鳥

●●●●●
住宅づくりにおけるエネルギー対策には、さまざまなアプローチがあります。設備については他稿に譲るとして、ここでは機械力に頼らない工夫で居心地を確保する方法(パッシブデザイン)を考えます。その中で最も重要な「断熱」と「日射遮蔽」について見てみましょう。

●●●●●
住宅を含め全ての建築は外部の厳しい気温条件からわれわれ自身の体を守ることを大きな目的としていますから、熱の損失とブラインド、オーニング、緑のカーテン、壁面緑化などは、いずれもこの効果を高めめます。一方、風通しの良さはある程度までの暑さ対策には有効ですが、外気温が体温近くまで上がると、もはや役に立ちません。

●●●●●
住宅建築における断熱と日射遮蔽は、空調設備に頼らず快適な室内環境をつくるための基本です。いずれもエネルギー消費を節減するばかりか、仮にエネルギー供給が途絶した状態でも、命を守るのに必要な最低限の熱環境を保つ基本になります。これは、外部環境から生命・財産を守るシェルターとしての役割を担う建築の原点と直結しています。

●●●●●
なお、春と秋に代表される快適な季節は、住宅はおおらかに開放し自然の快適さを取り入れたらよいでしょう。もっとも、騒音や大気汚染さらには侵入犯など、別な要因が関わってそう簡単でないのは、現代社会の抱える大きな問題です。

●●●●●
自宅で太陽エネルギーを獲得する

●●●●●
住まいのエネルギーで最もワクワクするのは、太陽エネルギーの獲得です。太陽光発電は、設備さえ整えば長期にわたり無料



【写真1】断熱雨戸

不要な流入を防ぐことは住宅が備えるべき性能の基本です。

気密性の確保を前提として、高い断熱性能は暖房用のエネルギー消費を減らすばかりか、日常の快適性や健康性など居心地が良く安全な住まいづくりのための必須要件です。

例えば、断熱性に優れた住宅では各部の温度差が少なくなり、足元が冷える不快感が抑えられ、夜間の暖房停止時にも室温低下が少なく脳卒中など低温による健康リスクが避けられます。したがって、断熱の効用はエネルギー消費量や暖房費の節減だけで評価すべきではありません。

近年、引用される断熱性を評価する基準には、新省エネルギー基準(平成4年基準)と次世代省エネルギー基準(平成11年基準)があります。いずれも熱損失係数(Q値、内外の温度差1℃につき単位時間あたりに建物の外皮から流れ出る熱量を延べ床面積で割った値、単位はW/m²・K)で評価します。主な大都市圏がある第Ⅳ地域(旧称)において、前者が4・2、後者では2・7と定められています。同じ室温を保つ場合、後者では36%も少ないエネルギーで済みます。ちなみに、旧省エネルギー基準(昭和55年基準)では5・2でしたから、



【写真3】太陽熱調理器(ソーラークッカー)

「住まいの省エネなんて節約・我慢か、なんだかケチ臭いな」と考えてはいませんか。視点や行動を変えれば、エネルギーとの積極的な付き合いは意外と面白いものなのです。手はじめはエネルギー消費実態を把握すること。毎月の自宅における電力・ガス・灯油の消費量を数値で確認することで、エネルギーへの関心が高まります。伝票整理でもよいのですが、決めた日に自らメーターを検針すると一層意識が高まります。目に見える太陽エネルギー利用は特に面白いです。太陽熱調理器(ソーラークッカー)は最も

●●●●● 面白く元気になる

●●●●● エネルギーとの付き合い



【写真2】薪ストーブ

の日射を直接電気に変えて使えます。自家消費する分以外は配電網に「逆潮流」して電力会社に売ることが出来ます。環境負荷の極めて少ない電気がつくれる利点の他、生活者のエネルギーに関する意識や態度にも好ましい効果をもたらします。電気は電力会社から買うもの、と受身的に捉えるのと異なり、電気を自宅で作れば、消費者から生産者へ立場を転換させます。それが節電意識や省エネ行動につながるのだと思われまます。熱として使うエネルギーは、わざわざ電気に転換せず太陽熱をそのまま使うのが合理的です。太陽熱温水器は太陽熱で直接水を温めるという極めて明快な装置です。家庭用エネルギーの約3割を占める給湯

用の過半が太陽エネルギーでまかなえるのですから、省エネ効果は大きいです。最近では真空管ヒートパイプによる安価で高性能な製品も出回り、投資回収が容易になりました。太陽熱利用の多面的な拡大が期待されます。住まいにおける最も身近なバイオマス(生物起源のエネルギー源)利用は、焚き木や木質ペレットをストーブで燃やすことでしょうか。つまり現代の、太陽エネルギーが固定化された燃料の利用です。半世紀前までは台所でのご飯炊き、風呂沸かしなどには焚き木が使われていました。今日、敷地内で得られる燃料は庭木の剪定枝ですが、地域の公園や街路樹などから出る剪定枝など、コミュニティとして捉えようと、暖房エネルギーの一定割合を太陽エネルギーでまかなえます。焚き木を準備し、ストーブでその燃える様子を見ながら暖を採ることは冬の喜びであり、心の癒しや家族団欒の手段ともなります(写真2)。これらの太陽エネルギー利用は、単なるエネルギーの獲得にとどまらず、省エネ意識を高める効果があり、環境を守りつつ心地よい暮らしの実現に極めて有益です。わかりやすい装置です。パラボラ形の集熱器の中心部は高温になり、30分ほどで1リットルの水が沸騰し、2合のご飯が炊けます(写真3)。面倒な作業を家電製品などにまかせることで、家事は確かに楽になりました。その結果エネルギー多消費型の生活を招いたのは確かとして、同時にさまざまな生活の価値を失ったことにわれわれは気付いているでしょうか。例えば、家族の助け合い、家事の技術や知恵の伝承、さらには家族の会話や労働による達成感などです。省エネルギーのためだけでなく、現代生活の充実ないし質の向上には、省きすぎた手間・暇を取り戻すことが必要、と私は確信します。家事は実に多様でそれぞれに知恵を出し、体を動かすことが求められます。筋肉と頭を使うことで、体が元気になり、気分も爽快になるのです。エネルギーとの付き合いを軸に、手間をかける暮らし方と豊かな心を取り戻してみませんか。その際大切なのは、際限なく便利・快適を追い求めないことです。エネルギーを利用しながら自然環境の保全と生きる喜びを両立させるには、未来世代のことを想いつつ欲と現実の間でほどの折り合い点を見つけ、自分らしいエコな暮らし方を見つけ出すことが必要だと思います。

●●●●● 今ある住宅を

●●●●● 省エネ・エコ住宅に改修する

今使っている家を取り壊さず、新たに建築しないことは、資源の有効利用と廃棄物の発生抑制に直結します。建材の生産と廃棄物処理にはエネルギーを必要としますから、既存の住宅を住みやすく改修しながら断熱性と気密性を高めれば、ライフサイクルとしての省エネ効果は格段に増します。さらに太陽エネルギーの利用を組み込んだ省エネ・エコ改修は、住まいを進化させる面白さを教えてくれます。

目の前にある建物を基本に住まいを考えることは、出来上がりの姿を確実に予測できる手法です。質の高い建物の構造や素材は長く使われて問題なかったという証明付きです。新築が改修より常に優れているとは限らないのです。

都市景観の点からも、景観が変わりすぎる街は好ましくありません。美しい建物群は時間を経て形づくられるもので、落ち着きがあり愛着の持てるわが街をつくるには建築(住宅)の長寿命化が欠かせません。既築住宅の省エネ・エコ改修は、新築と並んでこれからの住まいづくりの柱となっていくでしょう。



小玉 祐一郎

こだま・ゆういちろう

神戸芸術工科大学
環境・建築デザイン学科 教授

ローエネルギー利用という発想の転換

エネルギーが潤沢に使えるようになったのは20世紀の後半、長い人間の歴史を考えると、ついこの間のことです。その大きな恩恵のあまり、私たちは電気やガス、石油の供給が滞ると禁断症状が現れる「エネルギー中毒」に陥っているフシもあります。他方、これらとは別に、太陽や風、気温の変化など、密度が低いゆえに使い方に工夫の要るエネルギーもあります。前者をハイエネルギー、後者をローエネルギーと区別することができます。

考えてみると、住宅のエネルギー用途は、暖冷房にしても、給湯にしてもそれほど高い温度が必要なわけではなく、ローエネルギーで賄える部分も多いのです。パッシブデザインやソーラー給湯はその代表的なものです。

現代社会でのハイエネルギーの需要は増える一方ですが、もし、私たちがハイとローの使い分けができれば、3.11以後の逼迫したエネルギー事情もずいぶん緩和されるのではないのでしょうか。

パッシブデザインには、自然と交感するという楽しみもあります。ハイエネルギー中毒に陥って見失った住まいの魅力を取り戻し、持続可能な社会を見据え、自然にも社会にも開かれたライフスタイルを再構築する糸口になるでしょう。

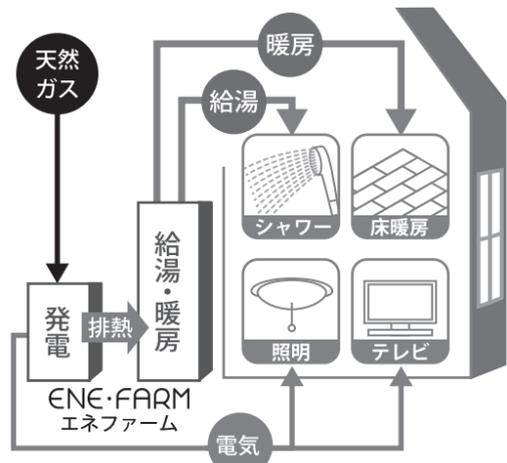
【第5講】

賢く住む家(スマートハウス)

監修：下田 吉之 大阪大学大学院 教授

丹羽 哲也

大阪ガス(株)エンジニアリング部
スマートエネルギーハウス推進室 室長



【図1】家庭用コージェネレーション

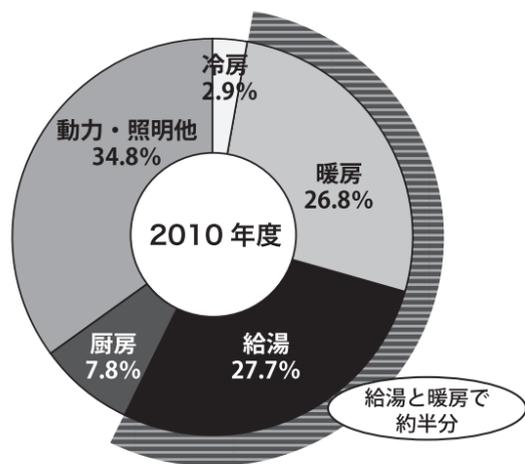
家庭用部門は大幅なCO₂排出量の削減と省エネルギーが求められる分野です。省エネルギーと言うと、まず電気に目が行きがちですが、熱エネルギーの省エネも重要です。一般家庭の平均的なエネルギーの消費量を見ると、給湯と暖房で約半分を占めていることがわかります(図2)。そのため、私たちは日ごろから電気と熱の両方の省エネを意識しておく必要があります。しかし、省エネと言っても日々の生活の中でただ我慢をするだけでは長続きがしません。快適で便利な生活と省エネの両立が重要です。その実現に必要な技術が住まい手の要求に応じて機器の稼働を適切にコント

2011年3月11日の東日本大震災および原子力発電所の事故により、エネルギーセキュリティに対する関心が高まったこともあり、通信会社、家電メーカー、ハウスメーカー、エネルギー事業者、さらに自動車メーカーなどが競ってあるいは協力して、スマートハウスの開発を進めています。スマートハウスは、今後の省エネルギーの推進、再生可能エネルギーの活用、エネルギーセキュリティの確保などから不可欠なものになっていくと思われる。今回は、大阪ガス(株)で社員家族による居住実験プロジェクトを推進しているスマートエネルギーハウス推進室・丹羽室長に、スマートハウスの現状、実証試験の状況そしてこれからのスマートハウスの方向性などについて聞きました(CEL編集室)。

スマートハウスとは？

スマートハウス＝賢い住宅とは、「ICT(情報通信技術)を使って家庭内のエネルギー消費が最適に制御された住宅」のことを言います。具体的には、太陽光発電や燃料電池などの「創エネルギー機器」と家電機器や住宅設備を組み合わせてコントロールし、エネルギーを上手に使うことを可能とした省エネ住宅のことです。

「創エネルギー機器」とは、例えば、電気の場合、発電所から送られて来る電気に対して自宅で発電する言わば「マイホーム発電」と言われるもののように、ここでは使用する場所でエネルギーを創る(正確には変換する)機器を指します。「太陽光発電」や「燃料電池」がその代表です。



【図2】家庭部門におけるエネルギー消費の用途別内訳 (出所) 経済産業省「エネルギー白書2012」より作成

ロールするICT技術であり、ICTを搭載したスマートハウスの普及が期待されています。

また震災以降、エネルギーセキュリティの問題がクローズアップされ、スマートハウスに対する期待に変化が起きました。すなわち本来の目的に加え、電力供給不足への対応、非常時にも安心して生活できる設備などです。これまで、需要側(家庭)が消費する電力は供給側(発電所)がそれに合わせて発電し、供給するというものでした。しかし、現在は需要側にも供給側の状況に応じて電力使用量を抑制したり、時間をずらしたりする使い方が求められつつありま

燃料電池は発電するだけでなく、お湯を創

することもできます。都市ガスまたはLPガスに含まれる水素と空気中の酸素を反応させて発電しますが、その時に反応熱も出ます。その熱を使ってお湯を沸かすのです。このように、例えば、ガスのようなひとつの原料から、「電気」と「熱」の2つのものを創り出すシステムをコージェネレーションと言います。コージェネレーションはもともと工場やビルなど規模の大きな業務用途として使われてきました。家庭用のコージェネレーションは約10年前から販売されています。ガスエンジンを駆動して発電する「エコウィル」が2003年、燃料電池タイプの「エネファーム」が2009年に発売されました。いずれも電気とお湯の両方を創ることができ、発電時の排熱も利用した給湯器の機能も兼ねています(図1)。

す。このことや非常時の対応の観点からも太陽光発電・燃料電池などの「創エネルギー」に加え、蓄電池などのエネルギーを貯めておく機器「蓄エネルギー機器」が注目をあびています。

スマートハウスを構成する

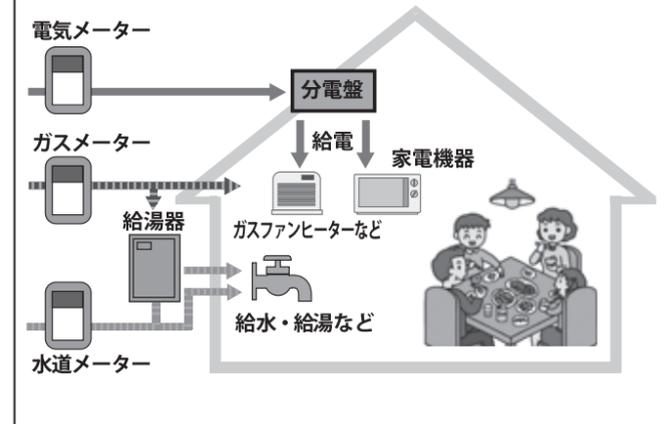
エネルギーシステム

創エネルギー機器や蓄エネルギー機器が採用されるようになって、家庭のエネルギーシステムは複雑になってきました。

従来のエネルギーシステムは、発電所で発電された電気が分電盤を通して家庭内に供給されて家電機器や照明器具などの電気機器につながっており、給湯器やファンヒーターなどの機器にはガスや電気がそれぞれに供給されていました。省エネルギーの実現とはすなわち、供給側の立場で言う「それぞれの機器効率を向上させる」と「それぞれの機器効率を向上させる」とでした(図3)。

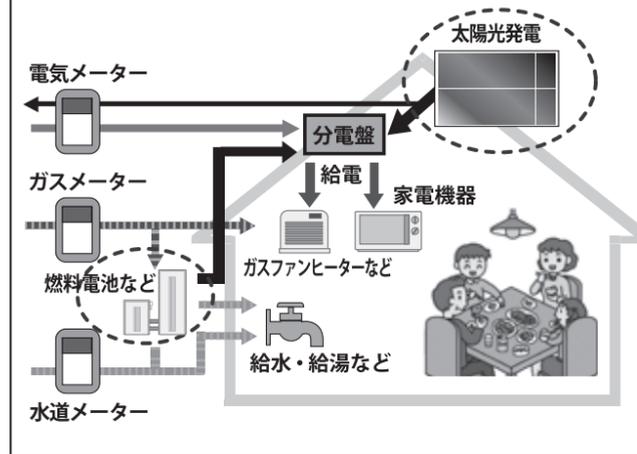
太陽光発電や燃料電池などの創エネルギー機器が普及すると、分電盤には発電所の電気と創エネルギーの電気が混ざって流れるようになります。これらの機器をうまく組み合わせることで、より省エネを図ることができ

個々の機器・設備が独立
それぞれが高效率・快適性・利便性を追求



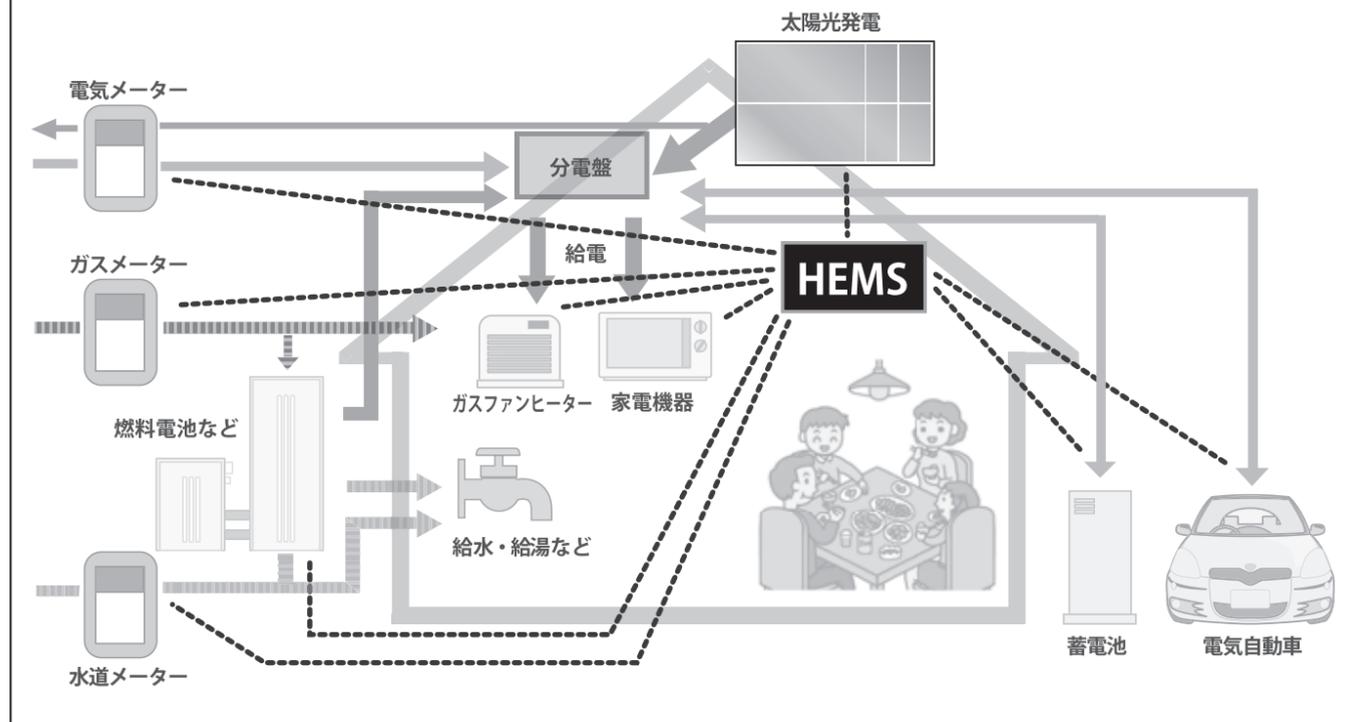
【図3】従来のエネルギーシステム

再生可能エネルギー・分散電源の有効活用により
省エネルギー・低炭素を実現



【図4】創エネ機器が導入されたエネルギーシステム

各機器の組み合わせ、相互作用、最適制御により
セキュリティ・利便性・さらなる省エネ・低炭素を実現



【図5】スマートハウスのエネルギーシステム

きます(図4)。

さらに、蓄電池(定置型)や蓄電池を搭載した電気自動車(EV)やプラグインハイブリッド車(PHV)なども家庭のエネルギーシステムを構成するようになります。最近では、電気自動車は単に充電するだけでなく、定置型の蓄電池と同じように家に電気を供給するV2H(Vehicle to Home)も提案されています。

これらの複雑なエネルギーシステムを賢く使えるようマネジメントする中枢に位置するものが、第3講でも紹介されたHEMS(Home Energy Management System)です(図5)。HEMSは大きく3つの機能に分けられます。

機能1…エネルギー使用状況の見える化、アドバイス

機能2…機器の遠隔操作

機能3…機器間の相互最適制御

HEMSは、機器リモコン発展形、タブレット、スマートフォンなど様々なハードウェアを母体に、各企業が商品化をしていますが、現在のところは機能1が中心で、機能2以降を搭載したものはわずか、機能3は実質上まだ開発段階です。

●●●●●

創エネ機器とスマートハウス

スマートハウスを構成する重要な要素が創エネ機器です。ガスエンジン式の「エコウィル」や燃料電池「エネファーム」は、都市ガスまたはLPガスを使って電気と熱の両方を供給します。発電量は家の電気使用量や熱の使用量などから最も省エネになるよう制御されます。太陽光発電は、自然エネルギーを使って発電ができます。発電量は制御できませんが、必要分を自家消費し、余った分は系統(電力会社)に売ることができます。

「エコウィル」や燃料電池「エネファーム」と太陽光発電を併設すると、相互の運転に特別な制御を加えることなく、さらに省エネ性をアップするとともに、電力需要ピークの緩和に貢献することができます。つまり、この段階ですでにある程度スマートハウスに期待される要件は果たしていると言えます。

●●●●●

スマートハウス開発事例

大阪ガスではこれからのスマートハウスとして、燃料電池(SOFC)※1・太陽電池・蓄電池の3つの電池を組み合わせた「3電

池」住宅を「スマートエネルギーハウス」として開発を進め、2011年2月から実証試験

を始めました。奈良県北葛城郡に実証住宅を建て、実際に人が住みながら省エネ性や快適性の評価を行っています(※2)(写真)。

蓄電池の活用にあたっては以下のことに留意する必要があります。蓄電池は電気を充電し、必要な時に放電することができます。非常時のために電気を貯めておき、電力需要が大きい時に放電して自家使用することにより、停電への備え、節電・ピークカットに貢献できます。しかし、充電、放電をす



実証住宅

祝宴の食卓(16世紀初めごろ)

洗練され始めた中世の食卓

秩序なく山積みされた食べ物、肉の山、甘いものの山、人を驚かせるためだけの料理、古代さながらの新興領主たちの祝宴、度を越した無節操が中世の食事の特徴と言えた。しかし中世の終わりごろには、徐々に調理場や食卓が洗練され、凝ったソース類や多様な肉のラグーが供されるようになった。肉料理や魚料理の間には甘いものが出されるようになった。肉を禁じる断食日にさえ、食卓に実に魅力的な料理の数々を出す貴族の家もあった。「我々は、まずキルシュを飲み、それから真っ白なパンを食べた。また上質のワインもたっぷり飲んだ…その後、ミルクで煮た若いソラマメ、魚とカニ、ウナギのパイ、ライスプディングにシナモンを振りかけてアーモンドを添えたもの、それから上等のソースを添えた焼きウナギ、丸パンとチーズ、そして締め括りには多くの果物を食べた。」

見せるための料理

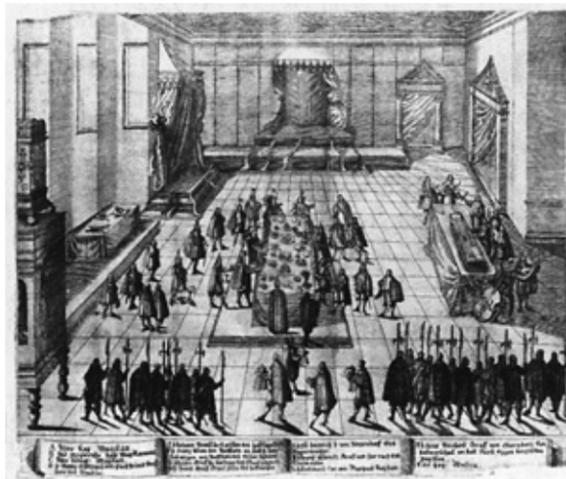
豪華な見せるための料理が依然としてテーブル飾りとして好まれていた。料理長たちはそのレシピを多数考案した。特に費用がかかったのは「動物園」のレシピであった。「動物園を作るには、小麦粉と卵、それに肉や魚を使って、好みの動物を10種類ぐらい作らなければならない。動物が逃げないように、レンガの塀、あるいはレンガがなければパンケーキの塀で囲むこと。それからその中には、塔を1つと通り抜ける道を1本作ること。塔の周囲に通路をめぐらせ、そこに、動物を見物したり捕獲したりしようとする女性や娘たち、騎士や騎士見習いを配置すること。動物園の外には溝を掘って、生きた魚を泳がせること。柵と溝の間には、リンゴやナシ、ニクズク、ナッツなど実のなる木を植えること。木の上にはリスや鳥を配置すること。動物園には門番を配置すること。これはできれば金で。」豪華な見せるための料理は、現実と空想、食べられるものと食べられないものがうまく溶け合っ、客の退屈しのぎとなった。これは食堂に運ばれて専用のテーブルの上に置かれ、客はいつでも好きなときに、この芸術作品に目を向けて楽しむことができた。

中世の食卓と「カトラリー」

中世の終わりごろにヨーロッパ中が手本にしていたのは、華麗なブルゴーニュ宮廷の食卓文化であった。しかし食器については、次の時代に比べるとまだ無関心と言えた。料理は錫の鉢に載せてテーブルに置かれ、人々は、スプーンや先の尖ったナイフを鉢に伸ばして、自分の前に置かれた皿に取って食べた。この皿は主に木製であったが、錫または貴金属の皿も招待者の財力によって使われ始めていた。スプーンは木彫りで、掬うための丸い部分と短い柄があって、その柄を握り締めるように掴んだ。スプーンの柄は金または銀でメッキされていることもあった。当時、いわゆる「カトラリー」と言えるものは、このようなスプーンとナイフだけであった。招待客は、その「カトラリー」を自分のケースに差し込んで携帯した。招待者が招待客にカトラリーを提供するのは、ずっと後になってからのことであった。フォークはまだ食事用としては使用されておらず、調理用や給仕用の二本歯のものであった。イタリアの非常に裕福なブルジョワの間でのみ、小さなフォークが使われていた。これはあるドージェ^{*}の奥方がコンスタンチノーブルからヴェネツィアに持ち込んだもので、砂糖菓子をフォークで味わうのであった。

テーブルは、赤や青で縁取りされ房飾りがつけられた目の粗いリネンのテーブルクロスで覆われていた。肩からかける大型のナプキンを食卓で使うこともあった。夜には、木や真鍮、錫や鉄の燭台が、食卓や壁際に置かれた。ろうそくは当時まだ大変高価であったため、灯り用としてごくわずかに使われた。

訳注 *Doge: 伊語、ヴェネツィアの総督



中世の皇帝の食卓を描いたスケッチ



イタリア・ウルビーノのマジョリカ焼きの食器と木製の皿(16世紀初めから半ばごろ)



マジョリカ焼きの飲み物用の器



貴金属や宝石で作られたセンターピース

食卓の喜び 第15回

AUGENSCHMAUS UND TAFELFREUDEN(目のご馳走と食卓の喜び)より

著者 Dr. Ingrid Haslinger

訳 山下満智子(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所)、宇野佳子



● Ingrid Haslinger
(イングリット・ハスリンガー)
ウィーンに生まれる。
ハプスブルク家宮廷の儀式や
テーブルマナー、銀器食器類
を研究。1987年『帝国のテ
ブル文化』、1998年『シシーの
食卓』、2001年原著を執筆。

● 宇野佳子
筑波大学大学院修士
課程地域研究研究科
ヨーロッパ研究修了。
専門分野は言語文化。



南ドイツ地方の飲み物用の器とセンターピース(16世紀)

10代の若い人たちは農業をどう見ているのだろうか——それを知りたくて、大阪府立農芸高等学校(堺市三原区)を訪ねた。9万平方メートルもの広い敷地に田畑や果樹園、牛舎豚舎、食品加工所などいろんな施設が並ぶ。ここでは普通校のような座学ではなく、体を動かしての実践が主体である。モットーは「校内と校外との両方で生徒を育てる」こと。だから野菜を朝市で販売したり、移動動物園を幼稚園でひらいたり、若者たちは積極的に街に出て農業を通じて社会とふれあっていた。

実践と協同がもたらすもの

太田 順一 (おおた・じゅんいち)
1950年奈良県生まれ。早稲田大学政治経済学部中退。大阪写真専門学校(現・ビジュアルアート専門学校 大阪)卒業。第12回写真の会賞、日本写真協会賞第1回作家賞、第34回伊奈信男賞受賞。主な写真集は、『大阪ウチナンチュ』(ブレンセンター)、『ハルセン 病療養所 百年の居場所』(解放出版社)、『群集のまち』(ブレンセンター)、『父の日記』(ブレンセンター)など。著書に『ぼくは写真家になる!!』(岩波書店)。

「農芸祭」でのトントンレース。順位を当てるとお菓子がもらえる



「ハイテク農芸科」作物部。トラクターの耕運実習



「食品加工科」応用微生物部。みそづくり



「資源動物科」酪農班

「食品加工科」製菓食品部。店を借り切ってスイーツ、パン、コーヒーの「一日カフェ」をひらく(堺市・泉北三原台)



池島^{はやて}颯^{きこた}さんと裕田^{ひろき}大貴くんは資源動物科・養豚班の3年生。ともに動物好きなこともあって農芸高校に入った。が、ペット感覚の「好き」だけでは通用しなかった。

「今はもう慣れたけど、においがきつくて。最初はええませんでした」(池島)

相手は生きものである。毎日の餌やりは当番制で、休日にも2、3回は学校に出てこなくてはならない。そのうえ解体の実習では、包丁を握って鶏を屠りもする。

「僕ら、いのちを食べてたんだ、って気づくんですね」(裕田)

出産に立ち会った子豚が成長して半年後には肉となる。初めは悲しかったが、しかし今では「自分たちが世話をして売れる豚に育てあげたんだ」との達成感がつのる。

日々の飼育はひとりではできない。班の皆との協力が不可欠だ。そのうえ豚肉の販売実習では、デパートの売り場に立って見知らぬ人に声をかけねばならない。

「人とコミュニケーションする力が身につくんです。この経験は大きいです」(池島)

ハイテク農芸科・野菜部3年の池崎^{いけざき}魁^{かい}人くんは、人と協同することの楽しさを知ったという。クラスの40人が水田に並んで苗を手植えし、秋には再び全員が並んで手刈りをする。泥んこになって作業に精出すことで、皆が仲良くなっていくのだ。

「おかげで、人前でしゃべるのが苦手だったのに、委員をするようにもなりました」

農家の子弟はまれな農芸高校にあって、池崎くんの家は兼業農家。卒業後は農業系の大学に進み、将来は農業人となって高品質な野菜栽培をめざす。祖父が畑で催すトマトなどの野菜の直売会に、いつも長蛇の列ができるのを見てきているからだ。

「スーパーで買うほうが安いはずなのに。しかもお客さんのほうが、おいしい野菜をありがとうって、逆に祖父に礼をいってる。そこに、僕はやりがいを感じるのです」

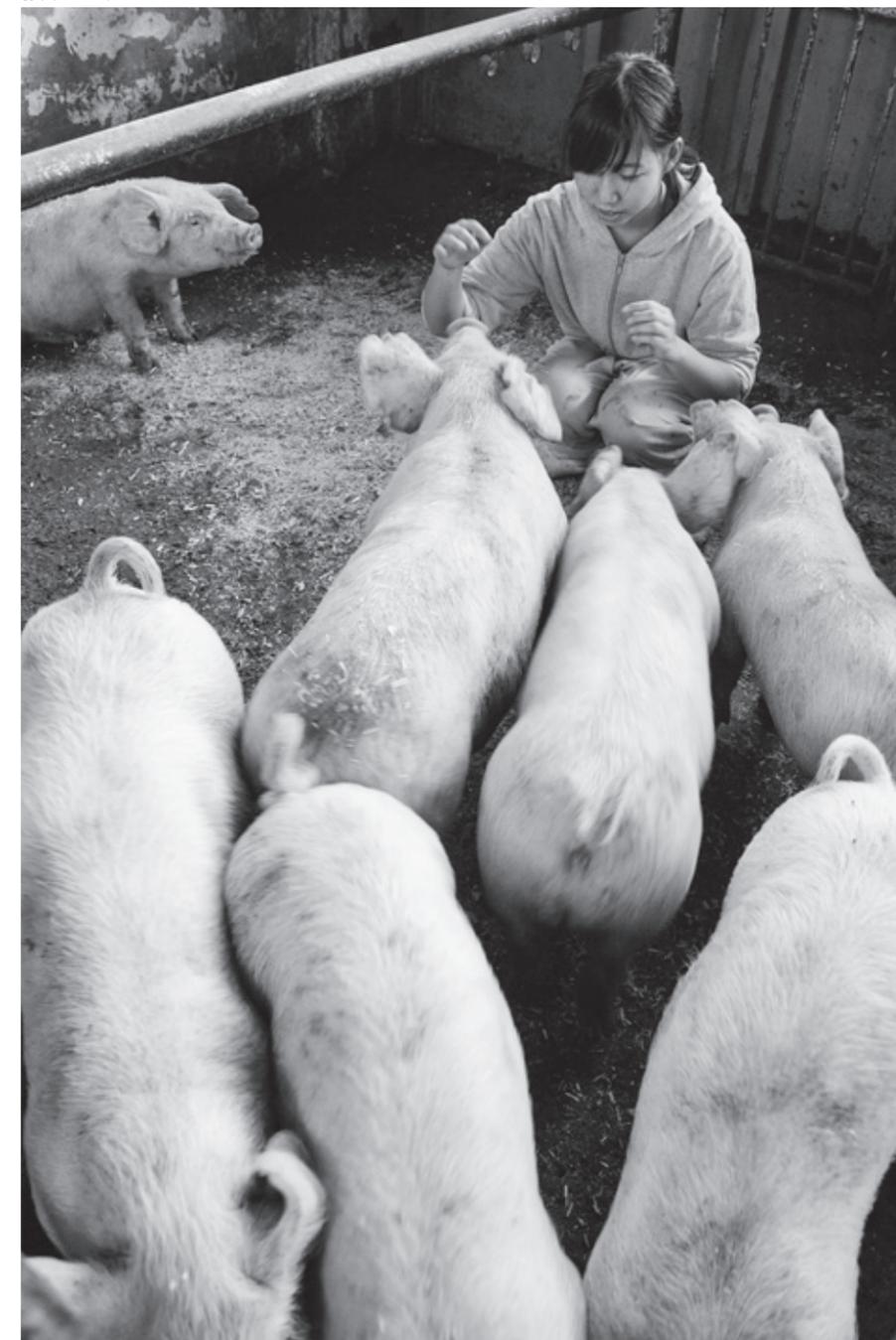


商標登録してある「農芸ポーク」の販売実習(泉北高島屋)

「資源動物科」養豚班。豚肉の解体実習



豚舎での餌やり



第23回
 炎と食
 シンポジウム
 (2012年9月20日)
 講演ダイジェスト

米食と日本人、食文化研究の視野

国立民族学博物館名誉教授

石毛直道
 Naomichi Ishige

第一部 米食と日本人 人間は料理し 共食する動物



文化を持った人間を他の動物と区別する言い方がいろいろとあります。例えば「人間は言葉を使う動物である」、また「人間は道具を作り、使う動物である」とも言います。私はこのほかに、人間の食の文化における特徴から、次の2つの言い方を加えたいと思います。

まず「人間は料理をする動物である」。もちろん「料理」の定義は文化によって異なりますが、特に火を使って料理をするのは、動物には一切ないもので、非常に人間らしい行動と言えます。もうひとつは「人間は共食をする動物である」。動物でも、親が子に食べさせることはありますが、成長すると自分で餌を探し、見つけたものが食べるのが原則。一方、人間はどの民族でも分かち合って食べるのが一般的で、その基

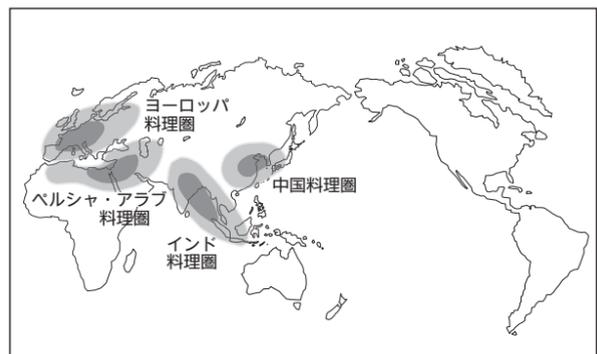
本的な集団が家族だと言えます。人間の家族は食と性をめぐって成立した集団です。女性には妊娠期間や子育てがあり、狩りをするのは男たちの仕事。仕留めた獲物を持ち帰って、それを家族に食べさせる。つまり分かち合いながら食べる。そうになると、強い者が独り占めしないように分配のルールが生まれ、それが後の食事作法の出発点になっただろうと思われま

世界的視野からの料理圏の捉え方

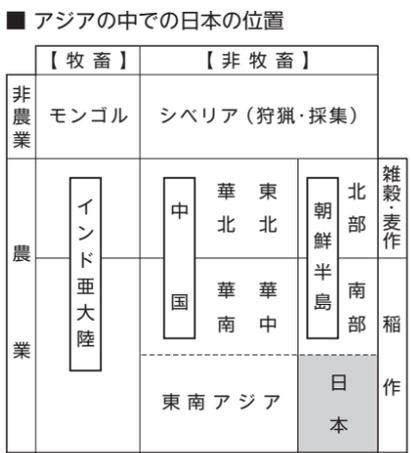


その後、新石器時代から人間は農耕と牧畜により食料の生産を始めます。さらに時代が過ぎ、食の視点からは、やがていくつかの料理文明圏というようものが形成されます。それがヨーロッパ、ペルシャ・アラブ、インド、中国の4つで、他の地域にも大きな影響を与えました。ペルシャ・アラブ料理圏は、西アジア、古代ペルシャに始まって、その上にイスラムのアラブ

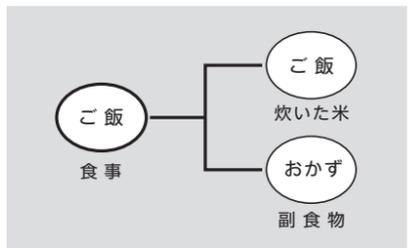
世界の主要料理圏



文化、そこにトルコ料理が重なる。インド料理圏は、カレーに象徴されるような料理。東南アジアには、インド料理がさまざまなスパイスを使うことなどでまず影響を与え、近世になると華僑が進出し、中国料理圏の象徴である箸を使う地域も広がります。



■ 食事の構成概念図



ことを「ご飯」と言いますが、炊いたお米が食事と同じ意味で使われています。隣の中国では、華北の饅頭や粟飯もあり、必ずしも主食は米ではないのですが、食事はやはり主食の「飯」とおかずの「菜」からなり、食事は「喫飯」と言います。同様に、

米食民族と言える日本人の食生活



「斐太後風土記」は、明治2年から5年にかけて、今の岐阜県の飛騨の国全域の戸数、人口、米の石高、作物量や魚のとれ高などを村ごとに細かく記録したものです。明治といっても江戸から続く生活。この資料をもとに、昔、国立民族学博物館で私の同僚だった小山修三さんがエネルギーの計算をしています。結果は、飛騨の国で生産された食料から、人が得られるエネルギーの90%は穀物からで、米が55・0%、ヒエ22・7%。

このとき、日本を取り巻くアジア全体の様相を大まかに捉えておくことが重要です。まず、北のシベリアは寒冷で農業ができない。昔は狩猟・採集の生活。モンゴルから中央アジア、西アジア一帯は乾燥気候で砂漠も多く、牧畜が主でした。少し南になると、インドの北方は麦作と粟や黍などの雑穀で、ベンガル平野や南部に行くにつれて稲作地帯。中国は東北や華北は雑穀と麦作で、南の揚子江流域などは稲作。東南アジアも稲作地帯。朝鮮半島では、北部は伝統的には雑穀で、南部は稲作。その中で、日本は北海道以外はずっと稲作を行ってきました。

「ご飯」が食事を意味するアジア稲作地帯

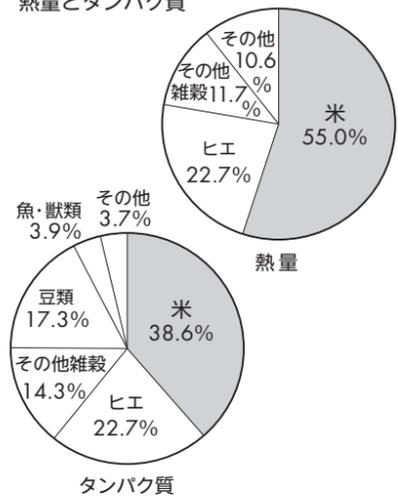


日本人が考える食事は、伝統的に「ご飯とおかず」の2つから構成されます。また、我々は食事の

タイ語やジャワ語でも、ご飯とおかずの両方が揃って食事になり、米の飯を指す言葉が食事にあたります。これは稲作民族に共通する伝統的な食事観だと言えるでしょう。ではなぜ、ご飯が食事の中心として考えられるようになったのか。私の大先輩で、食物史を総合的に研究された篠田統さんはこう言います。タンパク質の元になる必須アミノ酸は人体では合成できないので、食べ物として摂らないといけない。それがお米の中にはたくさん含まれており、たいへんバランスが良い食品であるからだ。

篠田さんはおもしろい計算をしています。ビタミンやミネラルなど必須の微量成分はひとまずおいて、もし人間が主食だけを食べて生きようとしたらどうなるか。体重60キログラムの男性では、計算上は1日6・5合のご飯でエネルギーとタンパク質は補給できるそうです。極端な話ですが、昔のお百姓さんは農繁期に一升飯を食べたと

■ 『斐太後風土記』の食品の熱量とタンパク質



石毛直道氏の最初の著書
 『食生活を探検する』1969年

これで、1日1人あたり1515キロカロリーになる計算。タンパク質は米からたくさん摂っていて、他の雑穀や豆類は元々の摂取量が少ない。ここに、さらに他国から移入したと記録されている米1万5千石を加えて計算し直すと、1日1人あたり約1850キロカロリーの摂取になり、当時としてはまず良好な水準。稲作に不利な飛騨の国でもこうですから、日本人はやはり米食民族だと言えるでしょう。

よく江戸時代では、税として米がとられるので、農村では麦飯やヒエ飯、粟飯を食べていたと言います。ただし、雑穀だけの混じりつけなしだったら、炊いてもぼろぼろ。必ず少量でもつなぎとしてお米を入れて食べていたはずですよ。

肉を食べなかった日本人とうま味の文化



日本の食文化で他と大きく違うのは、伝統的に肉を食べなかったことです。しかし、縄文時代の貝塚や弥生時代の遺構からは鹿や猪の骨が出てきます。日本人が肉を食べなくなった始まりだとよく言われるのが、天武天皇が675年に牛、馬、猿、鶏、犬の五種の肉食を禁じたことです。仏教の影響とも言われますが、必ずしもそうではなく、当時、牛や馬の頭数は少なく貴重な役畜でしたし、鶏は神の使いの鳥で、古代の日本ではその肉は食べませんでした。

はその肉は食べませんでした。

それでも、後の奈良時代には仏教による鎮護国家の考えが強まり、殺生禁止とともに肉食も少なくなります。平安時代も、地方では肉を食べましたが、京の都とか町の人は肉を食べませんでした。神道でも肉に対する穢れの観念があり、肉を食べた人は伊勢神宮に百日間お参りするのを禁じられていました。こうして次第に、日本の食生活から肉は消えましたが、江戸時代でも「薬食い」、病氣直しと称して健康な人が食べていたこともあり。やがて、明治時代には肉食も自由になり、牛鍋や焼き焼が流行したと言われます。それでも、1923年、大正時代の陸軍糧秣庁の国民栄養調査のデータでは、国民1人あたり1日の肉消費量は3.75グラム。1カ月合わせてもハンバーグ1個くらいの量でした。では油っ気はどうしたのか。江戸後期になると、江戸の町でも天ぷら屋ができますが、露店の立ち食いで、上等な食べ物とは認められてなかったようです。料理に植物油を使うのもわずかで、日本料理には油っ気なしの伝統がある。一方、世界中で肉や油っ気のある料理はやはりごちそうです。京都大学の伏木亨さんによると、油脂は食べるの大脳の中に快感物質が出て、おいしく感じるメカニズムがあるそうです。

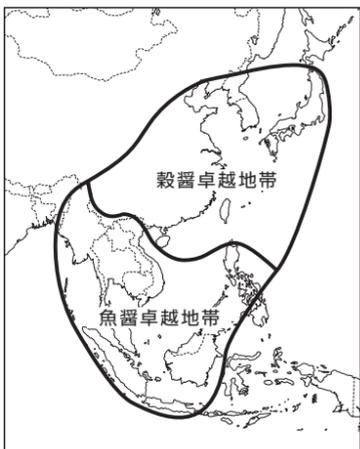
日本では、肉と油脂という世界の人々が好むものを料理に採用しなかった。魚にしても、沿岸部

地帯では、雨期になると川が増水して溢れ出します。すると田にも魚が入ってきて卵を産む。次の乾期に水が引けていく時に、たくさん雑魚が捕れるので、それを食料として保存するために塩漬にした。こうして淡水魚の塩辛がまず生まれたのではないかと。いずれにしろ、塩辛は各地に広がり、いろいろな魚で作られるようになりました。

中国では、紀元前後やもつと前の文献に、魚醬という表現があります。魚の醬は、実は塩辛の仲間のこと。魚に塩をして長く保存しておく、その間に魚に含まれた酵素の力でタンパク質が分解されていきます。塩味のほかに、いろんな種類のアミノ酸を含んでおり、うま味の素になるグルタミン酸も多い。塩辛も汁をこすと魚醤油になります。

その一方で、中国では独自の穀醬や豆醬といった、味噌や醤油の元祖のようなものも生まれてきます。中国では、昔から酒造りに麴を使うことが発達しており、塩辛をつくる時にも麴を使いました。これは漢の時代に既にあり、このとき魚の代わりに、大豆や穀物を炊いて、そこに塩と麴を作用させて作ったのが穀醬です。穀醬にはうま味のもとになるアミノ酸類が含まれ、材料が保存できるし、大量につくることもできました。こうして中国で味噌と醤油の祖先が生まれたのだと私は考えています。

■ うま味の文化圏

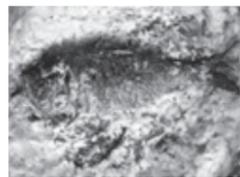


東南アジアでは、魚を原料にして塩と一緒に発酵させた魚醬が現在でもよく使われます。そのまま食べるだけではなく、野菜に付けて食べたり、いっしょに煮たりもします。朝鮮半島でもキムチを漬ける時には大量に塩辛を使います。また、日本や朝鮮半島は、調味料としての味噌や醤油が発達した地域です。いずれにせよ、塩辛から発展したと思われる発酵調味料を使っており、これらの地域は共通した「うま味の文化圏」であると言えるでしょう。

世界の料理になった日本のすし

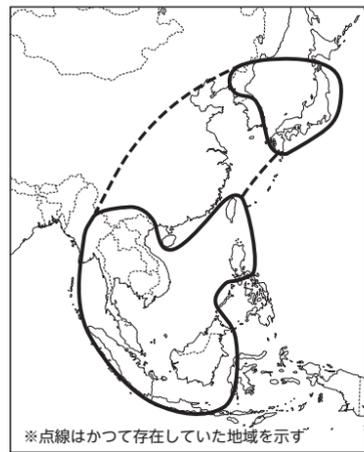


琵琶湖の鮒ずしを作るには、産卵前のニゴロブナを4月頃に捕って塩漬にし、夏の土用に塩抜きをし、炊いたご飯と一緒に漬け込みます。するとご飯は乳酸発酵し、魚は崩れ



琵琶湖の鮒ずし

■ ナレズシの伝統的分布



※点線はかつて存在していた地域を示す

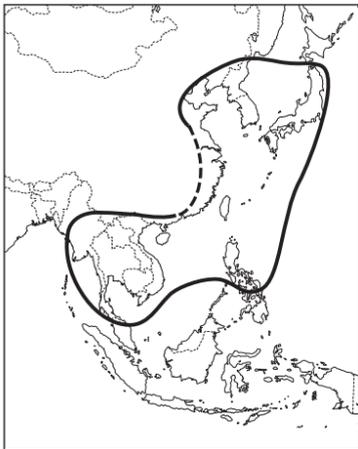
ず保たれます。ご飯はべとべとなので、普通は食べない。これはナレズシという保存食の一種です。日本ではこれを古い時代から各地で作っていたという記録が残っています。これも稲作とともに広がっていった食品です。東南アジアでもよく食べられますし、中国でも古い時代には食べられていました。このナレズシが日本では独自の発達をします。まず、室町時代には「生ナレ」が出てきます。普通のナレズシだと、漬け込んでから2〜3カ月以上かかるところを、これは半月とか1カ月で食べました。ご飯も酸味はあるが食べることができず。主食と副食がひとつになった食品に転化したわけです。江戸時代には「早すし」が出てきます。発酵させずに、酢をご飯に入れる。すると魚を使っただけでなく、いなりずしや海苔巻きのようなものも出てきます。それがもつと早く「にぎりずし」になり、幕末頃になると、客の顔を見て

稲作とともにある塩辛の起源と分布



の人を除くと毎日食べるわけにはいかない。主におかずは野菜。そこで、うま味を野菜に加えるために、だしの文化が発達したわけです。料理に昆布や鰹節が使われ、味噌、醤油もつくられました。うま味はグルタミン酸や核酸などに含まれ、野菜にこのうま味を付けて食べるのは東南アジアにも共通するものです。私は以前に、アジアの塩辛や魚醬の分布を調べましたが、塩辛を伝統的につくっていた地域は、伝統的な水田稲作の地域と一致しているのがわかります。中国では今は生ものを食べなくなり、塩辛も作らなくなりましたが、昔は沿岸部だけでなく内陸部でも作っていました。その起源を、私はこう考えています。インドシ

■ 塩辛の伝統的分布



ナ半島のメコン川流域から西南中国にかけての

から酢飯を握って生魚をのせて食べさせた。かつての保存食品が即席食品に変化したわけです。この日本のすしが、70年代終わり頃から、欧米人もこぞって食べるものになりました。そして今では世界各地に広まっています。すしという、日本で発展した米を使った食品は、今、世界の土地の好みに合わせて変化し、さまざまな新種がつくられる時代になったのです。

第二部 食文化研究の視野 食の文化研究の 先達と私



食文化の研究というのは、実は世界的にも新しいものです。イギリスのオックスフォード大学で「食べ物と料理の国際シンポジウム」が初めて開催されたのは1981年のことでした。当時、アジアからの出席者は私一人。食べることを文化として総合的に捉えようとする研究は、まだ世界的にも始まったばかりでした。

それまでの食べ物に関する研究とえば、まず食料生産に関わる農学系、あるいは栄養学や生理学がありました。一方、文科系には「日本食物語」の分野がありましたが、歴史学の応用のような扱いで、これを自分の仕事の主流とする研究者は多くありませんでした。

その中で、東アジア全体を視野に入れて歴史アフリカの狩猟採集民の家では、農業をしないので「原料処理」の道具が一切ない。リビア砂漠のオアシス農耕民では、全体的にもっと道具があり、「原料処理」の道具が多い。そうやって比べていくと、文化のパターンの違いが分かってきます。

日本の家庭には台所用品がたくさんあります。豊後水道の日振島という小さな島の漁村にひとりて住むおばあさんと、京都に住む料理好きな人の台所道具をグラフにして比べると、道具の数は後者の方が何倍も多いのに、似たような形になる。共通するのは、現代の台所では「原料処理」の道具がないことです。

かつての「農業社会型」では、「原料処理」と「したごしらえ」、「加熱」に用品が集中しました。それに対して、現代の都市社会では、「混合・変形」、「加熱」、「味つけ」の道具が多い。「盛りつけ」の食器もたくさんある。では未来の社会ではどうか。既成の食べ物を買ってくるのが主流になると、「味つけ」と「盛りつけ」だけに移行するのかもしれない。

食文化研究への視野



食文化の研究は、台所と食卓から人間の文化や人間行動の全般を考えてみようとする立場の学問です。その研究にあたっては、私は2つの視

的に日本の食文化を考えようとした先達（せんたう）が、先に紹介した篠田統さんでした。そしてもうひとりが中尾佐助さん。有名な「照葉樹林文化論」などに見られるように、中尾さんの世界の文化の流れをダイナミックに捉える考え方からは、私自身大きな影響を受けています。

京大の海外調査などを通して得た知見をもとに、私が1969年に最初の本『食生活を探検する』を書いた頃は、食べ物のテーマは文科系の学者にとつて余技や遊びと見られていた時代で、石毛は学問の主流をはずれたとも言われたのですが、中尾さんだけは「おもしろいこと始めたね」と激励してくれたのを覚えています。

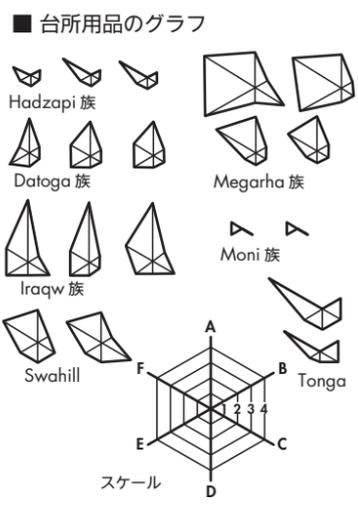
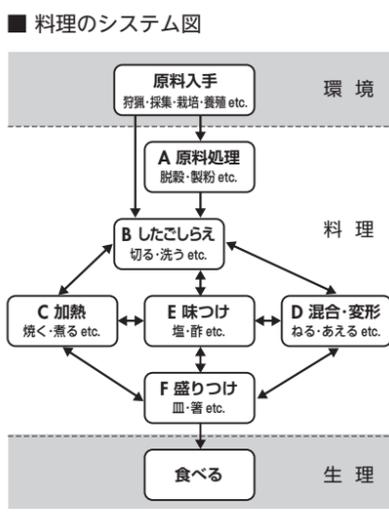
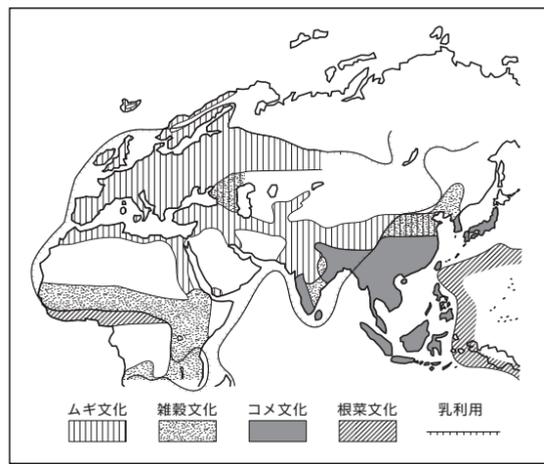
その後、私は本格的に食の文化に取り組みようと考え、1970年に「季刊人類学」に「台所文化の比較」という論文を書きました。現地での住み込み調査の際、その家にどんな家財道具があり、それを現地語でどう言うかなどが全部ノートにとつてある。その中の料理の道具をまず整理しようと考えました。すると、その前に、「料理」とは何かを自分なりに定義してみる必要が出てきたわけです。

料理の原料は「環境」の中から取ってきます。一方、人間が食べた後は消化や栄養など「生理」の問題。私は、その間にある、食べ物をつくる一連の作業を広い意味での「料理」だと考えました。その観点からは、脱穀や製粉も含んだ「原料処

点を重視してきました。まず、食というのは、人間生活のあらゆることに関係を持っているということ。経済学、政治学、哲学もそう。あるいは食は絵画に描かれ、文学にも表現されます。食は人間生活の基本にあるものだから、その研究の中心は学際的で、いろいろな分野の人が集まって共同研究することが必要だと考え実行してきました。ひとつひとつの学問から食を考える、また、今度は総合的な食の立場から個別の学問を見てみることもできるわけです。

もうひとつ、私が、若い頃から力を注いだのは、世界を視野に入れた研究でした。そのためには、世界のことをただ知るだけでなく、世界史として各地域の食文化の伝統をまず押さえることが必要でした。私は、新大陸と旧大陸の交流が

■ 15世紀世界の主食作物と乳の利用



理」も料理の一部になります。「したごしらえ」には、洗ったり切ったりの道具、「加熱」には、熱を加えて処理をする道具、「混合・変形」には、ねったりあえたりなどの道具、そして「味つけ」の道具があり、最後に「盛りつけ」の道具があります（料理のシステム図）。

この6つの分類に当たる道具が1つの家の中にどれだけあるかを調べて、放射状の6本の線に目盛りを打ちグラフにして比較しました（台所用品のグラフ）。

盛んになる前の15世紀の世界で、その見取り図を考え、一連の「食の文化マップ」をつくりました。ムギ文化、雑穀文化、コメ文化、根菜文化といった捉え方で世界を見る。そこには、家畜の乳を利用するラインもあります。中国の万里の長城は、実はこの牧畜の限界ラインと一致するもの。このように、食文化の研究においても、世界を大きく見渡した上で、個別の問題に取り組むべきだと考えたのです。

「食文化」という言葉は、実は1980年頃まではありませんでした。私は、食品加工と食事行動を中心にした文化の領域を「食事文化」と名付けていました。そのうち、私が企画するシンポジウムなどで「食の文化」という言葉を使うようになっていき、それがマスコミなどで取り上げられる間に「食文化」と言われるようになったのです。以前は研究者も少なかった分野ですが、現在では、これを研究しようという人がかなり増えてきました。この分野の研究で博士号をとる人も出てきており、私は大変うれいことと感じています。

石毛直道（いしげ なおみち）
文化人類学者。国立民族学博物館名誉教授・元館長、総合研究大学院大学名誉教授。1937年千葉県生まれ。京都大学文学部史学科卒業。同大学人文科学研究所助手、甲南大学文学部助教授、国立民族学博物館教授を経て、1997年同館館長。2003年からは同館名誉教授、農学博士。日本と世界の食文化研究の第一人者。著書は、「食卓の文化誌」、「魚醤とナレスシの研究」、「種の文化史」等のほか、「石毛直道自選著作集」（全11巻、別巻）。

人はなぜスポーツをするのだろうか？

そう思うのは、私自身、自分の心と身体が、今は少し離れてしまっているように感じるからだ。子どもの頃は、考えるより前に身体が反応し、もっと自在に動けたように思う。

最近、私の周囲では、走る人が目立って増えている。大都市でのマラソン大会など、市民ランナーの晴れの舞台が増えていることもあるだろう。達成感を得ると同時に自身の限界を知る。加えて、そこで感じる緩やかな連帯感も心地よいようだ。

高齢化の時代、人が気軽にスポーツをすることができ、それが社会参加にもつながり、健康増進に役立つのなら、それはQOL向上だけでなく、多方面での社会的コストの削減にもつながるだろう。

これからは、各々の世代において、スポーツが生活の中にある時代になってほしいと思う。毎日、顔を洗うのと同じような感覚でスポーツをする。競い合うのではなく、日課のようにして、走ったり、ボールを蹴ったり投げたりする。

そのためには、地域や都市の環境整備も望まれる。緑が多い、空気のきれいなところで走りたいし、気軽に使える運動施設も欲しい。もちろんその前に、自身のライフスタイルや価値意識の転換も必要だ。人は、たぶん自分自身を取り戻すために、スポーツをするのだろうか。 — 丹戸 裕之

CEL 103号

特集 スポーツが持つ“多様な魅力”が QOL(生活の質)を豊かにする

発行 ● 平成25年3月1日 頒価1,000円(送料別途)

発行 大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL) 〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2

発行人 木全 吉彦 Yoshibiko Kimata

編集人 丹戸 裕之 Hiroyuki Tando

企画制作 豊田 尚吾 Shogo Toyota

編集 ● 関西ビジネスインフォメーション(株)内 CEL編集室 〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18 住友中之島ビル7F TEL.06-4803-2238

印刷・製本 ● 日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2013 OSAKA GAS CO., LTD.

禁無断転載複写

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を表すものではありません。本誌・バックナンバーのコンテンツやエネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容はインターネットホームページ[http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/]をご覧ください。

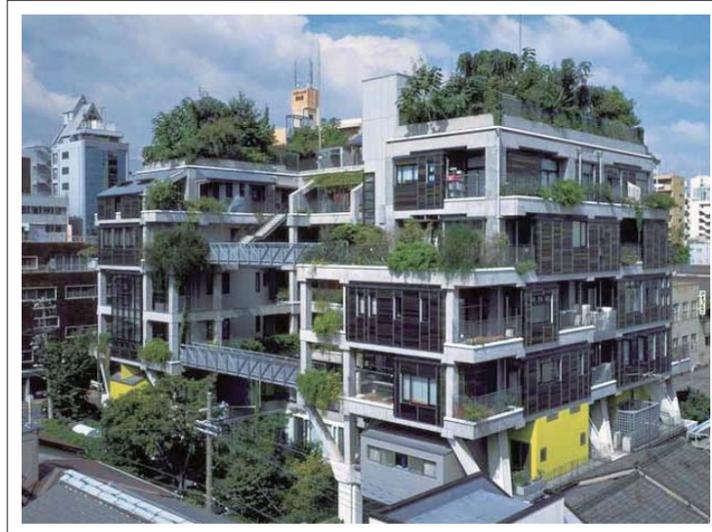
本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申込みや送付先変更等のご連絡は、CEL編集室 Tel.06-4803-2238 Fax.06-4803-2240 cel@kbinfo.co.jp(メールは2013年6月末まで)までお願いします。

お知らせ

大阪ガス実験集合住宅NEXT21

第4フェーズ居住実験 公開イベントのお知らせ

(予告)



大阪ガス実験集合住宅 NEXT21

大阪ガス実験集合住宅NEXT21では、環境との共生、少子高齢化への対応などをテーマに実験を継続してまいりました。

この度、平成25年度より開始予定の第4フェーズ居住実験のため、大規模改修を実施いたしました。

今回の改修は、建築家・竹原義一氏、近角嚶子氏による住戸改修、住棟全体に及ぶ緑地改修、エネルギーシステムの再構築を含む、竣工以来の大規模改修です。

改修終了後の公開イベントを下記のように実施させていただく予定です。みなさまのご来場をお待ちいたしております。

■ 大阪ガス実験集合住宅NEXT21 第4フェーズ居住実験 公開イベント

発表会：平成25年4月23日 午後(予定)

見学会：平成25年4月25日～7月末日(予定)

*詳細は近日公開のホームページにてお知らせ予定です。

<http://www.osakagas.co.jp/rd/next21/index.htm>



山本 健慈

学びに向かう志を育てる

「日本の大学生は勉強しない」などと言われる。アメリカの大学生は大半が、1週間に約11時間自主学習をするのに対し、日本の学生の大半は、4時間程度しかしていないなどと比較される。学長としては、勉強をしてほしいが、アメリカの若者も失業等を抱え必ずしも幸せとはいえないことを考えると、単に時間で比較しても学生の学びを鼓舞しない。そこで、まずは、彼らの意見を聞きたいと、学生たちにこのテーマで懇談を呼び掛けたところ、100人を越える学生が参加し、彼らの学びを語ってくれた。ほとんどの学生が、大学に入り、和歌山の地域にフィールドワークに出て、地域の課題に懸命に取り組む住民、それを支援する教員・研究者の姿を見て、自分がかかか「無知」であるかを知り、学びに貪欲になったと語った。そして、高校までの学びがいかかか貧困であったかを知ったと語った。「第一志望が不合格ゆえの入学であったが、和歌山大学に入学して、本当に良かった」という者もいた。

フィールドワークは、自分の幸せだけでなく、自分の人生の目的と社会の幸せを考える「志」のある学びへの意欲を生んでいる。他方、「多くの学生が勉強しない方がいい。なぜなら自分が少し勉強すれば、上位に立てる。この方が楽だ」と正直に語った学生もいた。「競争」「比較」のなかでの学びが、「志」を失わせる典型的な事例だ。

競争社会での勝利を動機づけに、人生を鼓舞してきた世代は、時代と人間(若者)の変化をしつかり見つめるべきであろう。

幸い和歌山には、効率化を求め続ける社会において衰退を余儀なくされながらも、それに立ち向かう「志」をもってアクティブに活動する人々がいる。こうした人々との出会いは、「競争」のなかで「志」を失ったり、無気力になったりした学生を蘇生させ、時代にも自己にも果敢にチャレンジする若者に育ててくれている。

和歌山大学の学生は、タイ、インドネシア、ベトナム等アジアのフィールドでも、「志」に目覚めている。

教室・研究室での学び、教員と学生との関係での学びだけではなく、豊かな自然、多彩な人々と出会うフィールド



スティーブ・ジョブズ スタンフォード大学卒業式辞

が、スティーブ・ジョブズ氏が2005年スタンフォード大学卒業式でのスピーチで述べた「自分の心と直感に従う勇気を持つ」若者を育てている。

◆◆◆◆

山本 健慈 (やまもと・けんじ)

和歌山大学長。1948年山口県生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士課程修了。95年和歌山大学教育学部教授などを経て2009年より現職。専門は社会教育・生涯学習論。主な著書は、「学びあうコミュニティを培う」(共著、東洋館出版社)など。

CEL

Culture, Energy and Life

大阪ガス エネルギー・文化研究所

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE
OSAKA GAS CO., LTD.

Vol. **103**
March 2013

